



アクセル・ワールド17

星の揺りかご

川原 礫

川原 礫

イラスト/HiMA

accel World 17

川原礫のもう一つの電撃文庫シリーズ!

ソードアート・オンラインII

SWORD ART ONLINE II

TVアニメ放送中!

放送開始!

電撃文庫

FIGHTING

<http://www.swordart-online.net/>

©2014 KADOKAWA PUBLISHED BY YUJI KAWAHARA

特製グッズプレゼント実施中!!

応募締切 / 2014年11月26日(金) 15時迄の受付

初回限定

フェア特典

「エロワン付先生」

キャラクター付せ!! 全巻付1000円

詳しくは下記ページにも
ご確認ください。

電撃文庫



アクセル・ワールド17

—星の頂りかご—

＜加速研究会＞との戦いを終えた黒雪姫らとネガ・ネビュラスは、ついに白のレギオン＜オシラトリ・ユニヴァース＞との決戦を決意する。＜ホワイト・コスモス＞に挑むためには、緑のレギオン＜グレート・ウォール＞との休戦協定が絶対条件だった。

緑の王＜グリーン・グランデ＞と交渉のため、ハルユキは緑の本拠地・渋谷へ向かう。

そんな重大な局面で待っていたのは、高級ホテルのプールで水着姿になる黒雪姫で？ これは新たな特訓なのか。それともただのレクリエーションなのか？

熾烈なバトルを終えたあとは、ラブコメディイベントに突入？

**進化
宣言!**

電撃文庫FIGHTINGフェア

抽選・合計2,100名様へ**特大プレゼント!**

特賞

3ポイントで応募

著者サイン入りミニキャラクター

スタンディPOP12枚セット ————— **30**名様

FIGHTING 3ポイントで応募

電撃文庫掛け替えカバー4枚セット ————— **150**名様

進化宣言賞 2ポイントで応募

特製しおり12枚セット ————— **1,920**名様

フェア期間中に発表される電撃文庫および電撃文庫関連のフェア企画が書かれている豪華資料について
詳しい募集で参加するグッズの紹介ページ、応募方法と応募資格・応募期限などについて詳しくはこちらの
ページについてのお問い合わせは、フェア公式サイトまでお問い合わせください。



9784048669368

ISBN978-4-04-866936-8

C0193 ¥590E



1920193005905



ASCII MEDIA WORKS

アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 角川書店株式会社KADOKAWA

定価: 本体 590円

※消費税が別記価格に含まれる



アタセルワールド
の魅力を最大限に引き出す
豪華エッセイ!

■小説・イラストCD
「アタセルワールド」
CD1-CD4巻発売中!
原作 高橋 ワーナー
ゲーム ぴあ



■雑誌コミックス
「アタセルワールド」
CD1-CD4巻発売中!
作画 高橋ひさゆき
●「週刊文庫MAGAZINE」
10月号10日は発売日にて連載中!



■GAME
「アタセルワールド - 異世界の冒険 -」
「アタセルワールド - 異世界の冒険 -」
ハード PlayStation 3,
PlayStation 4, Portable
発売! パンダイナムゲームス

■雑誌コミックスEX
「あつちゅるーるど」
CD1-CD4巻発売中!
作画 高橋ひさゆき
●「週刊文庫MAGAZINE」
10月号10日は発売日にて連載中!



■雑誌コミックス
「アタセルワールド - デュラ
マギサ・ガーデン」
CD1-CD4巻発売中!
作画 高橋ひさゆき
●「月刊コミックアゲイン」
10月号10日は発売日にて連載中!

アクセル弁当⑭ ねこ



かわはら ねこ
川原 碌

今年はまださくらんぼを食べていません。なのでこの本の作業が全て終わったら、ちょっとお高いやつを買ってきて恐うさま食りたいです！ ソロで！

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1～17

ソードアート・オンライン1～15

ソードアート・オンライン プログレッシブ1,2

絶対ナル孤独者！

イラスト：HIMA

応募要項

郵便ハガキに、あなたの住所・氏名・年齢・電話番号・応募作品の題名を記入し、封筒を密に封じ切った応募用紙に、半角2文字を必要事項と併記して、下記宛先まで応募ください。

●発売所 〒102-0054 千代田区富士見1-8-18

アスキー・メディアワークス

電撃文庫編集部「文化宣伝」電撃文庫FIGHTINGフェア」係

●応募締切 2014年11月28日（金）※抽選開封有期

このサイトへの応募は
下記サイトまで

<http://bangai.bunko.dengeki.com/fighting/>

※ホームページへの応募は応募できません。応募は必ず郵送でのみとなります。応募用紙は必ず封筒に入れ、密に封じ切ってください。応募用紙に記入する内容は、必ず応募要項の「応募要項」の欄を必ずよく読んでください。応募用紙に記入する内容は、必ず応募要項の「応募要項」の欄を必ずよく読んでください。応募用紙に記入する内容は、必ず応募要項の「応募要項」の欄を必ずよく読んでください。

列島縦断ご当地ホスターキャラバン！

電撃文庫の人気キャラクター、各地の方言で喋ったキャラクターの活躍の場が登場するホスターご当地キャラバン。詳しくはフェアページをご覧ください。2014年11月28日（金）まで

10月おとし
ホスターご
“る”



アクセル・ワールド17

星の揺りかご

川原 礫



電撃文庫



17

星の揺りかご

川原 礫
イラスト/HiMA

Accel World 17

Copyright © 2012 KAWAHARA RYUKI
Illustrated by HiMA
All Rights Reserved

電撃文庫

アクセル・ワールド17

一星の頼りかご

《加速研究会》との戦いを終えた黒雪姫らしくネガ・ネビュラスは、ついに白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》との決戦を決意する。《ホワイト・コスモス》に挑むためには、緑のレギオン《グレート・ウォール》との休戦協定が絶対条件だった。

緑の王《グリーン・グランデ》と交渉のため、ハルキは緑の本拠地・渋谷へ向かう。

そんな重大な局面で待っていたのは、高級ホテルのプールで水着姿になる黒雪姫で？ これは新たな特訓なのか。それともただのレクリエーションなのか？

熾烈なバトルを終えたあとは、ラブコメディイベントに突入？



9784048669368

ISBN978-4-04-866936-8

C0193 ¥590E



ASCII MEDIA WORKS

アスキーメディアワークス

KADOKAWA 角川株式会社KADOKAWA



1920193005905

定価: 本体590円

※消費税は別記、税別と表示す



アクセル弁当⑭め



かわはら あき
川原 稜

今年はまださくらんぼを食べていません。なのでこの本の作業が全て終わったら、ちょっとお高いやつを買ってきて恐うさま食りたいです！ ソロで！

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1～17

ソードアート・オンライン1～15

ソードアート・オンライン プログレッシブ1,2

絶対ナル孤独者1

イラスト: HIMA

10月3日生まれ。漫画はウシシリーズが初のイラストレーター。『電撃魔王』小冊子への寄稿を見た文庫編集者が、今回の神崎悠希をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

アクセル・ワールド17 一星の揺り籠

川原 礫

 電撃文庫





DENGERI BUNGO

アクセル・ワールド



星の揺りかご

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビレィ



タケム

八村の学校の同級生。元バカセくん。
現在はオガ・ギブススのメンバー。
アニメル・バスターはゼン・アッシュ・バスター。

「あとでキツチリ
説明してもらおうかな。
ハルユキ君」

「やっほー」

若宮 恵

生徒会副会長である若宮恵と
仲がよい女子生徒。
口癖が生徒会書記を飾める。

「……………」
「なんでも言へばいいよ」

「お願いがあるの。
私と一緒に、次の生徒会役員選挙に
立候補してもらえないかな」

イタ ダワ マ ユウ
生沢真優

ハルユキとタクム、チユリの
クラスメイト。
2年C組のクラス委員長でもある。



「えええんあいつていつあああいあー!」

チュリ

ハルエキの幼馴染。思春期を過ぎ、新生《ネガ・ネビュラス》のメンバー。デュエルアバターは《ライム・ベル》。

「エロいぞクロウ……!!」

「な……なんのつもりですの……」
「の変態!!」

「……おや、おや、どうも……」
「……へー」
「……ですわあ……」

ミント・ミトン&ブラム・フリッパー

「やあつ、
べ、べろべろするなあ——っ!!」

シルバー・クロウ

中学内最良最悪の
少年・ハルユキのアバター。
黒髪銀眼の
新生「ネガ・ネビュラス」のメンバー。

ショコラ・バベッター

小鳥様と平井シズチ・バケツのラスター。
シルバー・クロウと協力し、
親友二人をEVSキットから解放が目標とができた。

「おつかれさま、楓さん」

「有田さん、抜け駆け、
ずるい……です」

声優 三宅 亜沙美
倉崎 楓子

星宮園子という
歌手（本名：三宅 亜沙美）のメンバー、
《心遊》をハルユキに収録した《お姉様様》、
デュエルフバナーは《スガミナシイカーニバル》

黒雪姫

黒のレギオン(ネガ・ネビュラス)の
レギオン・スター。梅園中学校園生委員会
デュエル・バスターは「ブラック・ロゼッタ」

【U-V 私にも浮き輪を貸してあげたいのさすー!】

四埜宮 謡

兄弟揃っている
新生(ネガ・ネビュラス)のメンバー。
ハルユキが所属する
梅園中学校園生委員会の副委員長。
デュエル・バスターは
「エグザ・メイデン」

日下部 繪

ハルユキを慕う少女
黒のレギオン(グレート・ウォール)所属。
デュエル・バスターは「アッシュ・ローラー」
(デュエル時は兄が意識の主導権を握る)

「ハルユキ君、
キミは水泳のほうはどうなんだ？」



「強くなったな、ロウタ」

「夢、いや、剣で語る」

それが我が師のやり方だ」



アクセル・ワールド¹⁷

星の揺りかご

川原 礫
イラスト／HIMA
デザイン／ヒルビィ



[illegible][illegible]

■「ユニー」は通称「ユニ」(サリシマ・デュリ)。ハルユネの初期は、上野公園を主な会場、学生アパターは「黄色の服」。デ・
モは「ユニー」(サリシマ・デュリ)と「ユニー」(サリシマ・デュリ)。

■タチノミ 一般に「タチノミ」は、タチノミのミミズ、デミミズとミミズが混在する状態を指し、ミミズが混在、デミミズがパターナリズムのミミズを指す。

■アーサー・ウィリアムズ（1919年・アメリカ）：彼は、本でよく知られている「オーストリアン・ドリーム」(1947年)の著者として知られる。この本は、当時のアメリカ社会を鋭く批判した。彼は、第二次世界大戦後のアメリカ社会の腐敗と堕落を暴露した。この本は、アメリカ社会の改革を促すために書かれた。彼は、この本で、アメリカ社会の改革を促すために書かれた。彼は、この本で、アメリカ社会の改革を促すために書かれた。

■2017年一押し商品は「ノリイキ、ササゲ、黒砂糖、手ぶどう」に挑戦したい。バーストサンダー、御元祖「塩」メンバーの1人、山崎を招き、各々手ぶどう栽培のやり方、食文化の共通点や相違点を教えるだけでなく、山崎の愛用も商品とする、デュエムアバターが「アージー・メイデン」にバリエーション

[illegible]

■ゲイ・ナイト・エディ―本誌は1980年(第9号・第10号)に掲載していた、バーエドランナー、ゲイ・ナイトエディの一人、トマス・J・J・トマスにインタビュー。

[illegible][illegible][illegible]

そのうちマサチューセッツ州、オクスフォードにあるマサチューセッツ工科大学の物理学者が、1981年に、

2. 日本経済フォーラムでは、先進国のゲームシステムが普及しており、その市場は次第にアジアの国々にも広がると見込まれる。

● 読者の多くは一アバタ一読習するたふに読ふたふとふ。読習するてふはたふとふによつてアバタ一読習する

■よりよい設備投資計画が確立し、よりよい事業活動によって、よりよい設備投資計画が実現する。設備投資計画の策定と実行は、経営計画の策定と実行と密接に関連している。設備投資計画の策定と実行は、経営計画の策定と実行と密接に関連している。

■とらぬが花子(高橋)の「おぼろけ」は、その後の『おぼろけ』に下し、ゲームの音楽も

● 凡在本報刊登廣告，請向本報廣告部洽談，地址：上海南京路一八一號本報總編輯部。

が主たる「ブランチ・ポイント」(分岐点)で、ブランチ・ポイント間には、

トーン・オブ・ボイス、顔の表情と身体に緊張・弛緩する(本人も自覚なく)と読み取ることが出来る。トーン・オブ・ボイス、顔の表情、身体に緊張・弛緩する(本人も自覚なく)と読み取ることが出来る。

■入会費・年会費—なし、但し、入会費—初年度—の納入の上、紹介した親戚などに対する、入会の保証、その他の

[illegible]

とで、このソフトを発売し、日本人が「エクス」で一歩先を走った。このソフトは、開発中に

— 10 —

同様に「サウザン・クロス」の「サウス」は「南」を意味する。このように、英語の「サウス」は「南」を意味する。このように、英語の「サウス」は「南」を意味する。

... ..

10ヶ国が、オーストラリアのデュエムアスターを輸入するとする。

■ 人間と草木花鳥の一呼吸の心の通いから自然に生み出れる詩性で、44 冊の全集 W p t 1

「...」

● 2000年11月1日現在、日本に約10万人が在留している。

思っても見たことがなかった。その瞬間、心は動いてしまった。

Journal of Management Education 36(8) 907-924

絶対、キミはひと言もしやべるなよ。

絶対に、最後までおとなしくしているんですよ。

絶対、静かにしていないとダメなの。

絶対に、何があっても怒つちやいけないのです。

——と、レギオンの頭首と幹部三名にこれでもかと言ひ含められていたハルユキだったが、いざその姿を見た瞬間から、飛びかかって胸ぐらを掴んで渾身の右ストレートを顔面に叩き込んでやりたいという衝動と必死に戦わなくてはならなかった。

二〇四七年七月七日、日曜日。

今年三回目となる七王会議は、前回、前々回と同様に青のレギオンのコバルト・ブレードとマンガン・ブレードが対戦開始者となって開催された。

レオニーズからは、青の王（剣聖）ブルー・ナイトと親近の二剣士。

緑のレギオンからは緑の王（絶対防御）グリーン・グランデと補佐役アイアン・パウンド。

紫のレギオンからは紫の王（紫電后）パープル・ソーンと副長アスター・ヴァイン。

黄のレギオンからは黄の王（放射性惑乱）イエロー・レディオと、初めて見る小

柄なF型アバター。

赤のレギオンからは赤の王（不動要塞）スカーレット・レインと副長ブラッド・レバー
ド。

黒のレギオンからは黒の王（絶対切断）ブラック・ロータス、副長スカイ・レイカー、おま
けのシルバー・タロウともう一人。

そして、白のレギオンからは、白の王（儚き永遠）ホワイト・コスモスの全権代理、
アイボリー・タワー。

ハルエキ自身は、魔導師然とした姿のアイボリー・タワーと直接言葉を交わした経験はない。
以前の会議で、ほんの何度が声を聞いたことがあるくらいだ。にもかかわらず、やけに細長い
シルエットのアバターが議場に音もなく出現した途端、圧倒的な憤怒に体の芯を貫かれ、両
拳を握り締めずにいられなかった。

なぜなら、もはや明らかだからだ。

アイボリー・タワーは、加速世界にどす黒い悪意と混乱を撒き散らした（加速研究会）の上
位幹部だということだ。

七日前、ハルエキは知った。三ヶ月にわたって戦い続けてきた加速研究会が、白のレギオン
内部の組織であるという恐るべき事実を。レギオンメンバーの大部分は、あるいはそうと知ら
ないのかもしれない。しかし、王の代理を務めるほどの地位にあるアイボリー・タワーが承知

していないということは有り得ない。

六月十六日に開催された一回目の七王会議で、ヘルメス・コード競走レースに研究会所属のブラック・バイスとラスト・ジグソーが乱入した件について話し合われている時、アイボリー・タワーは素知らぬ顔で、疑義を呈した。

「イベント中に心意を解放し、（空間侵蝕）にギャラリーをも巻き込んだというそのバーストリンカーは、いったいどの誰で、何が目的だったんでしょかね——と。

いかに巨大な欺瞞に塗れた発言だったか、いまなら解る。彼はラスト・ジグソーの名前も、その目的もよく知っていたはずなのだから。にもかかわらず、あおも見事に白を切れる胆力を、むしろ称賛するべきか。

いや、アイボリー・タワーが尋常な精神力の持ち主ではないことは、いまこの瞬間も証明され続けている。

白の王ホワイト・コスモスは、ブラック・バイスやアルゴン・アレイ、そしてアイボリー・タワーたち幹部に告げたはずだ。黒のレギオンの面々に対して、自分が加速研究会のトップであることを明かした、と。

つまりアイボリー・タワーは、ハルユキたちに自分の秘密が露見していることを知っているはずなのに、七つの椅子の一つに平然と座り続けている。

相変わらず存在感の薄いデュエルバターからは、緊張や動搖の気配は一切伝わってこない。

それどころか、アバターに宿っているはずの、生身のバーストリンカーの意識や思考といったものもまるで感じられない。まるで人型のエネミーが、いつも大理石でできた彫像のようだ……。

「――揃ったみたいだから、そろそろ始めるとすっか」

砕けた口調の、しかしびんと強く響くブルー・ナイトの声に、ハルユキはびくりと体を震わせた。隣に立つ楓子が、左手の指先を軽く触れさせてくる。落ち着きなさい、という師匠の声が聞こえた気がして、心の中で「はい」と答える。

残念ながら、いまこの場で、アイボリー・タワーと白のレギオンを糾弾することはできない。黒雪姫が、事前に王たちに報告したのは次の三点。

シルバー・クロウが習得した対レーザー攻撃アビリティによって、ミッドタウン・タワーを守護していた大天使メタトロンを撃破したこと。

ミッドタウン・タワー四十五階に設置されていた、ISSキット本体を破壊したこと。

そして、本体の破壊に伴って、現存する全てのキット端末が無力化されたこと――。

つまり、白のレギオンの本拠地と目される女子校で繰り広げられた（もうひとつの戦い）については、何一つ明らかにできなかったのだ。理由はもちろん、白のレギオンが加速研究会の隠れ敷であるという証拠がただの一つもないからだ。迂闊なことを言えば逆に問い詰められ、名誉毀損でペナルティを科せられる可能性すらある。

——いつかきつと、奴らの尻尾を掴んでやる。それまでは、我慢するんだ。

ハルユキが自分にそう言い聞かせると同時に、円形の議場の反対側で、青の王ががしやりと鐘を鳴らして立ち上がった。

「まず、各レギオンの調査報告から聞こうか。……いや、逆に、こう訊ねたほうがいいかな。誰か、この一週間で、まだ力を使えるISSキット・ユーザーを確認した奴はいるか？」

手を挙げる者は、一人もいない。

黒雪姫と楓子、あきら、誰が敵闘の果てにキット本体を破壊したのだから当然の結果だが、それでもハルユキはゴーグルの下ではっと息を吐いた。

青の王もゆっくり頷くと、少しだけ語気を緩めて言った。

「なら、いちいち個別の報告を聞くまでもないな。あの目玉……ISSキットは、本体が破壊されると同時に、一つ残らず消えた。俺たちに黙ってミッドタウン・タワーに特攻んだ黒の王にはひとこと言いたいとこだけど、ま、ロータスの独断専行はいまに始まった話じゃねーしな」

「その言われ方は心外だな、ヴァンキッシュ」

即席の椅子に懸掛けた黒雪姫が、軽く両腕を広げる。

「前回の会議で我々が受けた要請は、シルバー・タロウが（理論・鏡面）アビリティを習得し、その力で大天使メタトロンのレーザーを防御すること——だったはずだ。実際の攻略作戦にお前たちの承認が必要だとは聞いていなかったぞ」

「そりや、そうは言わなかったけどさ。普通考えないだろ、あのバケモノにたった六、七人で挑戦しようとか」

青の王の苦笑に、紫の王が刺々しい声を重ねる。

「單に欲張りで目立ちたがりつてだけでしょ。どうせあのデカブツを自分たちだけで倒せればレジオンの評判も上がるし、獲得バーストポイントとドロップアイテムも独占できるとか考えたのよ」

「タッタツ、確かに、あのモンスターを（地獄）ステージ以外で倒した例はありませんでしたからね？ 何か、素敵なアイテムがドロップしたのかもしれませんがねえ？」

黄の王が口を挟むと、彼の後ろに控える小柄な少女型アバターがふらふら体を揺らしながら舌っ足らずな声で「しーれませんねー」と繰り返す。体勢が不安定なのは、派手な色のボールに座っているからだ。レモン・イエローのレオタード装甲や、大きなボンボンのついた三角帽子からして、サーカスの玉乗り少女をモチーフとしたデュエルアバターらしい。

剣の主を認められ、ハルエキは大いに憤慨したが、しかし我を忘れて反駁するまでには至らなかった。思考の半分を、別種の懸念に支配されていたのだ。

——あの、皆さん、あんまりバケモノとかデカブツとかモンスターとか言わないで。

王たちに向けて、必死にそう念じるのと同時に。

天上の鐘の音のように清らかで、冥界の吹雪のように冷ややかな女性の声が、頭の真ん中で

響いた。

「あの青いのと紫色のと黄色いのは、命が惜しくないようですね」

声の主は、ハルユキの左肩に乗っている（もう一人）。

紡錘状の本体と薄い輪っか、そして一対の羽根からなる全長五センチほどの小さなアイコン——先刻から話題に出ている、神機織エネミー（四聖・大天使メタトロン）その人である。

「我（わ）がしもべシルバー・クロウ、いますぐあの無礼者（むれいしや）どもを半殺しにしてください」

「む……………」

危うく声に出しそうになってから、思念に切り替えて叫ぶ。

「む、む、無茶言わないでよー あの人たち、めっちゃくちや強いんだよー」

「強いと言っても所詮（しよせん）は小戦士レベルでしょう」

「そ、そりや、きみから見たらそうかもしれないけどさ……………」

「ああ、もどかしい。私が本来の力を取り戻せば、一秒で消し炭にしてやれるのですが」

「加速世界が戦国時代になっちゃうからやめて!!」

——などと脳内で冷や汗ものの会話を繰り広げつつも、数日ぶりのメタトロンとの交流に、ハルユキは胸の奥が仄かに温かくなるのを感じていた。

東京ミッドタウンと港区エリアの女子校を舞台に繰り広げられた加速研究会との激戦から、早くも一週間が経過している。

災禍の鎧マークⅡの最大最後の攻撃からハルユキを守って消えたと思われたメタトロンは、
 〈何とかテラス〉を名乗る不思議な声の導きによって復活を果たした。しかし、強大な虚無属性の力を相殺するために自分自身を限界まで光属性エネルギーに転換したせいで、戦闘能力のはとんどを失ってしまったのだ。いまは小さな立体アイコンの姿で実体化するのが精一杯で、しかもハルユキのほうから接統を確立したうえで呼びかけなければ出現できない。この会議の場にメタトロンを呼んだのは、王たちと、とくにアイボリー・タワーを見ておいて欲しかったからだ。

現在、エネミーとしてのメタトロンの実体は、無制限中立フィールドの芝公園地下大迷宮、別名コントラリー・カセドラルの最深部に〈第一形態〉として存在する。

第二形態であるメタトロン本体にとって、巨大な第一形態は〈自動戦闘機能つき強化外装〉のようなものらしく、迷宮に挑むバーストリンカーをラスボスとして迎え撃つぶんには問題はない。しかし、仮に、万が一〈地獄ステージ以外で第一形態を倒す〉という隠し条件をクリアされれば、次はメタトロン本体が戦わねばならない。

力の大部分を喪失している現状では、私自身の戦闘力は第一形態に遠く及ばないでしょう、と彼女は言っていた。つまりその場合は、本体までもが討伐されてしまう可能性が高いということだ。

エネミーは、たとえ死んでも変遷が起きれば復活する。だがそれはあくまで同種の別個体で

あつて、生前の記憶は引き継がれない。八千年ものあいだ思索を重ね、自身を（ビーイング）と呼び、ハルユキと絆を結んだいまのメタトロンは完全に消滅してしまうのだ。

地獄ステージによる副体効果を利用せずに第一形態を倒すことは、ほとんど不可能に近い。コントラリー・カセドラルに封印されていた神器（ザ・ルミナリー）もとうに奪取されているいま、敗れて挑もうとするバーストリンカーがいるとも思えない。

しかし、可能性はゼロではないのだ。大口徑レーザー（トリスアギオン）を何らかの方法で反射できれば、地獄ステージでなくとも第一形態を倒し得ることを、一週間前にハルユキ自身が証明してしまった。そしてその事実を、少なくともこの場に集う王や幹部たちはもう知っている。

もちろん、メタトロン本体の出現条件は他のレギオンには伝えていない。共に戦ってくれた赤のレギオンのニコとバドさんにも、それは秘密にしておいてくれるように頼み込んである。だが、ハイランカーたちは超強な戦士であると同時に歴戦のゲーマーだ。地獄ステージ以外で第一形態を倒せば何かが起きるのでは、と思いつく者がいても不思議はない。

そう、それに、メタトロン第一形態を（ザ・ルミナリー）の力でタイムしてダンジョンから引っ張り出した加速研究会は、出現条件そのものを知っているかもしれない。もう一度タイムして利用する、あるいはタイム状態のまま倒そうとする可能性はある。

——早く、何か手を打たないと。メタトロンが消えてしまつてからじゃ遅いんだ。

——今度は、僕が守るんだ。絶対に……絶対に。

ハルユキの危機と決意を感じたのか、左肩に乗るアイコンが、憤慨を表す小刻みな羽ばたきを止めた。

「……しもべのおまえが、私の身を案じるなど千年早いというものです」

脳裏で響いた声は相も変わらず案づかないが、刹那しきは抜け落ちている。思考を読まれたことを氣取すかしく思いつつ、唯々言い返す。

「しもべがご主人様を心配するのは当たり前だよ」

「その言いようが生意氣だということです」

そんな思念を交わすあいだも、会議場では王たちの議論が続いている。

「——ともあれ、ISSキットのアウトブレイクが水陸で防がれたことと、そいつがネガビュの手柄であることは間違いないんだ。そこは素直に認めておこうぜ」

という青の王の言葉に、

「だからって、三年前の裏切りが帳消しになるわけじゃないけどね」

と釘を刺しつつも紫の王が領いたことで、場の空気がわずかに緩んだ。黄の王も、これ以上混ぜ返す気はないようだ。

緑の王は例によって喋らざることに厳の如しだし、全ての事情を知る赤の王も、余計な発言をするつもりはないとばかりに胸組みをしている。ISSキットに関する議論はこれで一段落か

と思われた、その時。

ハルユキから見て左斜め前方にひっそり座っていた象牙色のアバターが、おもむろに右手を持ち上げた。

「あの、発言いいですか」

のんびりした口調でそう言ったのは、白の王の全権代理たるアイボリー・タワー。男だろーうということしか伝わってこない、どうにも特徴の薄い声である。青の王が頷くと、塔のように尖った頭をぐるりと廻らせながら続ける。

「東京ミッドタウンのISSキット本体が黒の王によって破壊された件、そして全てのキット端末が非活性化された件は了解しました。しかし、それでめでたしとはなりませんよね。事件の黒幕だという加速勉強会……いや研究会でしたか、その連中についてはどのように対処するのですか」

その言い様を聞いたハルユキは、再びありったけの精神力を振り絞って自分を抑えなくてはならなかった。

——お前が、それを言うのか！

せめて頭の中で思い切り怒鳴ることによってどうにか気持ちを落ち着かせてから、隣の様子に小声で問いかける。

「……あいつ、どういうつもりなんでしょう」

楓子も当然、アイボリー・タワーが加速研究会の一味である疑いが駭りなく濃厚であることを認識している。正面を向いたまま、ハルユキの聴覚に捉えられるぎりぎりの音量で囁き返してくる。

「わたしたちへの挑発、かしらね。こちらに白のレギオンを糾弾させて、それを逆手に取るつもりなんだと思いますよ」

「何を根拠に……ってわけですか。ううー、そこで完全無欠な証拠をばしっと突き付けてやれたらなあ……」

「白の王がわたしたちのミーティングに乱入してきた時、リブレイ・カードを使って録画することも考えましたが、残念ながらダミーアバターでしたからね。それに、彼女に気取られずにストレージからカードを出すのは困難でしたし」

リブレイ・カードとは、映像記録用のカードアイテムだ。半年前の五代目クロム・ディザスター事件のおり、黄の王イエロー・レディオが黒書姫を動揺させるために使用したのは記憶に新しいところだが、ハルユキ自身は使うどころか入手方法すら知らない。

「……あの、リブレイ・カードって、どこで手に入るんですか？」

いっそう小さな声で訊ねると、楓子がかすかに微笑みながら答えた。

「もちろん（ショップ）ですよ」

「あ、そ、そうか」

「でも、鴉^{カラス}さんはまだ当分ショップには立ち入り禁止ですけど」

「は、ハイ……」

無制限中立フィールド、またの名をミーン・レベルには、(ショップ)と呼ばれるアイテム販売所がある——らしい。レトロゲーム屋^{ゲームショップ}返りが趣味のハルユキとしては興味津々^{きんみづづ}なのだが、ポイント^{ポイント}を無駄^{ムダ}遣^遣いするに決まっているからという理由で、黒書^{クロガキ}姫や楓子から利用禁止令を出されてしまっている。かつて、不用意なレベルアップ操作でポイント全損しかけた身としては文句も言えないが。

などと考えていると、メタトロンの声が脳裏^{のうり}に響いた。

「お前たちの言うショップとやらが、ミーン・レベルに存在するアイテム・ベンダーならば、権力^{権力}近づかないに越したことはありません」

「え……ど、どうして？」

「あれもまた、お前たち小戦士を選別するための装置だからです」

「僕たちを……選別する……？」

まだ見ぬショップで、いつかはあれやこれや面白い物をしてみたいと憧^{あこが}れていたハルユキは、メタトロンの思わぬ言葉に途惑^{とまど}った。しかし左肩のアイコンはそれきり沈黙^{しんもく}してしまったので、やむなく王たちの会話に意識のフォーカスを戻す。

「ちよつとあなた、代理だからって他人事^{ひとごと}みたいな言い方しないでよね」

アイボリー・タワーの発言にそう切り返した紫の王は、右手に携えた錫杖——七の神器のひとつ（サ・テンベスト）の石突を音高くステージの床に打ち付けると、いばらの名のおとり鋭い轉を帯びた声でまくし立てた。

「そもそも、ISSキット本体が置かれてた東京ミッドタウンはオシラトリの領土内だよね。なら、あなたのとこが最初にどうにかするべきだったんじゃない？　なのに偵察はダレウオ、攻撃はネガビュに丸投げしておいて、そのうえ加速研究会とやらの始末までつけさせようってわけ？」

ブラッタ・ロータスに最も敵対的な王であるバーブル・ソーンの言葉だが、いまだけはハルユキも心の中で「もっと言っちゃれ！」と叫ばずにはいらなかった。

白のレギオンがミッドタウン・タワー攻略に乗り出そうとしなかったのは当然だ。あの場所にISSキット本体を設置し、メタトロン第一形態に守らせていた張本人こそが白の王なのだから。

しかし、まさかアイボリー・タワーが自分からそれを言い出すはずがない。紫の王の追及をいったいどう躲すつもりなのか、とハルユキは象牙色の魔導師に視線を注いだ。もしひと言でもボロを出せば、即座に黒雪姫が切り込んでくれるはずだ。

やがて発せられた声は、しかし、これまでと同じくのんびりしたものだだった。

「そう言われましたも、エリア境界線が見えない無制限中立フィールドでの出来事ですからね。

オーロラ・オーバルさんと違って、我々は無制限フィールドでの支配権を主張していないのですよ。事実、グレート・ウォールさんやネガ・ネビュラスさんの、港区エリア内での活動には一切干渉しなかったでしょう？」

「それってつまり何もなかったってことじゃない。あと、うちが無制限フィールドでエリアへの無断侵入を禁止してるのは、銀座の上位ショップ密集地域でポイント残高ぎりぎりまで買い物しまくって、爆りにエネミー引っかけて全損する馬鹿が何人も出たからだからね」

「それは自己責任というものでは？ 過保護は若者の成長を妨げますよ。何もしない、という貢献もあるのだと理解して欲しいですね、紫の王」

アイボリー・タワールのことん人を食った物言いに、パール・ソーンの背後に控えていた副長アスター・ヴァインが、軍服を思わせる赤紫色の装甲をがしやりと囁らしながら一歩前に出た。

「責様、我々を愚弄するつもりか。加速研究会をどうするのかと言いついたのはそちらだろうが。ならば、のらりくらりと言い逃ればかりしていいいで、建設的な意見のひとつも出したらどうだい！」

「私もできればそうしたいのですがね。残念ながら、加速研究会とやらについては何の情報も持っていないので、意見の出しようもありません」

白々しい、とはこのことだ。ハルユキも、よっぽどアイボリーの前に飛び出してガツンと言

ってやろうかと思ったが、あるいはそれこそがアイボリーの狙いなのかもしれないと自分に言い聞かせて我慢する。

領土が近接しているだけに昔から色々あるのであろう白のレギオンと紫のレギオンの角突き合いに、ブルー・ナイトはやれやれと言を振り、イエロー・レディオはにやにや笑い、ニコと黒雲姫は静観を続けた。

重く張り詰めた沈黙を破った声は、しかしハルユキにしか聞こえなかった。

「あの小戦士……どこか変ですね」

左肩の立体アイコンが発した眩きに、対峙するアスターとアイボリーを見やりながら思念で問い返す。

「変って……どっちが？」

「白っぽいほうです。数値的戦闘力は青や紫の小戦士よりずっと低いのに、情報量だけがやけに大きい……」

「情報量……？」

それはつまり、ニコの言う（情報圧）のことだろうか。即席の椅子に腰掛けるアイボリー・タワーに改めて眼を凝らしてみるが、王たちから受けるようなプレッシャーはまったく感じない。むしろ、存在感のアスター・ヴァインやコバルト・ブレードたち、各陣営の幹部リンカーよりもずっと希薄に思える。



とはいえ、白のレジオンⅡ加速研究会の上位メンバーである以上、只者ではないことだけは確かだ。何かを感じようと精神を集中させていると、再びメタトロンが呟いた。

「ハイエスト・レベルからあの小戦士を見ることができれば、色々と解るのですが」

「そ、そうか。じゃあ、いまからちよつと行つて……」

応じた途端、脳内でびしりと吐りつけられる。

「どうしてそう感かなのです。ここはミーン・レベルの下位フィールド、言わばロウ・レベルでしょう。私でさえ無理なのだから、お前が何百年がんばってもここからハイエスト・レベルに到達できるわけがありません」

「そ、そう、ですわね」

メタトロンの言うハイエスト・レベルとは、無制限中立フィールドにダイブした状態から更なる加速を行うことによつてのみ到達可能な最高位空間のことだ。そこでは加速世界の全情報、銀河のような三次元ドット・マトリクスで記述されていて、観察者は世界の真実の姿を知ることができる。

しかし、ハルユキがハイエスト・レベルを垣間見たのは、七日前の戦いで災禍の鐘マークⅡの即死攻撃を回避しようとした瞬間のたった一度だけだ。しかもあの時はメタトロンが導いてくれたのであり、自力ではいったいどうすれば（加速しながら加速）などという真似ができるのかさえ解らない。

それ以前に、メタトロンの言うとおり、この会議場はコバルト・マンガン結核が作った通常対戦フィールドなのだ。ハルユキはフィールドの小石ひとつ破壊できないギヤラリーであり、可能なのは見ることに聞くことだけ。ならばせめて、王たちの言動をしっかりと記憶に刻まなくてはならない。

「確かに、こうも繰り返し加速世界を引っかき回してくれた連中なのに、現状判明してるのが組織名だけってのも情けない話だな」

青の王ブルー・ナイトが両肩をすくめながら言うとき、黄の王イエロー・レディオが苟立ちも露わに頷く。

「しかも自称ですからねえ？ まったく、研究会などと名乗るのなら、おとなしくシステムの抜け穴でも探していればいいんですよ」

「奴らがやっているのはまさにそれだと思っぞ、レディオ」

と抑留された声で応じたのは、黒の王ブラック・ロータスだ。

「今回のISSキット事件だけではない。一ヶ月前のヘルメス・コード縦走レース乱入事件、三ヶ月前のアキハバラBG荒らし事件、八ヶ月前のパックドア・プログラム事件。奴らは常に、ブレイン・パーストのシステムを嘲笑うかのような手口で混乱を引き起こしてきた。つまり、それが奴らにとっての（研究）なのだろうさ」

「アン……私には、ただのテロ行為にしか思えませんけどね？」

イエロー・レディオがそう吐き捨てた途端、黒の王の右に座る赤の王スカレット・レインが頭部のアンテナ型パーツをびくりと震わせた。背後に立つブラッド・レバードがそれとなく前に出て、主の右肩に指先を触れさせる。

レイン——ニコは恐らく、黒雪姫が口にしなかったもう一つの《事件》——半年前の五代目クロム・ディザスター事件のことを思い出したのだろう。

五代目となつてしまったニコの《恩》チェリー・ルータに真相の顛を譲渡したのは、証拠はないが恐らくイエロー・レディオだ。そしてこれも証拠はないが、レディオのその行動の裏には加速研究会の見えざる手が働いていた可能性が高い。

黄の王の口ぶりからして、自分が研究会に操られていたなどとは露ほども思っていないようだが、だからと言ってニコの怒りと悲しみが減じられるわけではもちろんない。自分もそばに行つて力づけてやりたいとハルエキは強く思ったが、残念ながら七王会議の場でそんな真似はできない。ただでさえ、ニコとバドさんは、SSキット攻略作戦に参加したことをこの場では伏せているという微妙な立場なのだ。

黒雪姫の声は、静かに流れ続ける。

「——問題は、奴らの狙いは何なのかということだ。余人の思いつかない手段で、加速世界をいつとき混乱させることだけが目的なのか？ それとも、事件を連鎖させた先で、決定的かつ最終的な破壊と混沌を引き起こそうとしているのか……？」

「ふふ……。あなたがそんなことを言うなんてね、ロータス」

パープル・ゾーンが、甘い蜜の奥底に氷の棘を潜ませたような笑みを漏らした。ブラック・ロータスが秩序の破壊者と呼ばれる原因となった三年前の出来事を仄めかしていることは確実だが、黒雪姫は冷静さを保ったまま答えた。

「言うき、もちろん。研究会が加速世界に破壊をもたらすとすれば、レベル10到達を目指す私にとっては邪魔者でしかないからな」

再び、紫の王と黒の王の間に鋭い火花が散る。

パープル・ゾーンは知らない。ISSキット本体に、加速研究会が擬似的に蘇生させた初代赤の王レッド・ライダーの意識が宿っていたことを。

もしあの場に紫の王がいたら、彼女はもういただろう。赤の王の魂に再びの安息をもたらすため、黒雪姫と協力したか。それとも——亡霊と知ったうえでレッド・ライダーを守るべく、黒雪姫に右手の神器を向けたか。

しかし、ただ一つ確かなことがある。ISSキット本体にライダーの意識が憑依させられていたこと、そしてキット端末を生み出していたのは彼のアビリティ（競器創造）であることを黒雪姫が王たちに告げなかったのは、かつてライダーと愛し合っていたというパープル・ゾーンに配感した——いや、思いやつたがゆえなのだ……。

「確かに、研究会の奴らが何かデカイことを企んでやがるのかどうかは、しっかり検証してお

く必要があるだろうな」

黒の王と紫の王が高めた緊張感を和らげようとするかのように、落ち着いた口調で青の王が言った。

「いままで連中が引き起こした事件のうち、ヘルメス・コード乱入事件とISSキット事件は明らかに連動している。あのレースで何百人ものギヤラリーに心意システムの力を見せつけておいてから、手軽に心意技が使えるようになるISSキットをバラ撒いたわけだからな。考えようによつては、アキバBGを寛らしたりバツタドア・プログラムの実験をしたりしたもの、ISSキット製造に必要なポイントを稼ぐためだったのかもな……まあ、どうやってキットを造ったのかはさっぱり解らねーけど」

そこでブルー・ナイトがちらりとこちらに視線を向けてきたような気がしたが、ハルユキが慌てて様子を窺った時にはもう、青の王は語りを再開していた。

「もし〈次〉があるなら、加速研究会はISSキットの無償配布と引き替えに〈何か〉を得たはずだ。それが何なのか解れば、奴らの狙いの方向性くらいは見えてくる。どうだ、ロータス・ミッドタウン・タワーでISSキット本体と直接接触したお前なら、何かを感じ取れたんじゃないのか？」

その問いに、黒雪姫はすぐには答えなかった。

もちろん彼女は——そして楓子もニコもバドさんもハルユキも、青の王の言った〈何か〉の

正体を知っている。

想像し得る限り最悪、と言っているいい代物だ。数多くのキット・ユーザーから集めた負の心意を凝縮し、赤の王から奪った強化外装（インビンシブル）に注入することで生まれた新たな脅威、災禍の鎧マークⅡ。

一週間前、メタトロンの自己犠牲に助けられて、ハルユキはどうかマークⅡを撃破した。だが、ライム・ベルの必殺技（シトロン・コール）でインビンシブルを分離しようとしていた時、依代となっていたウルフラム・サーベラスが皆の眼前から消滅してしまったのだ。最後のパーツ、インビンシブルの背面スラストターと一緒に。

すなわち、いまのニコは、全部で五つ存在するインビンシブルのパーツを四つしか所持していないことになる。それでも装着は可能らしいが、本来の力を百パーセントは発揮できない。その事実を、他の王たちに知られるわけにはいかない。赤の王の弱体化を知れば、イエロー・レディオあたりが、再び良からぬ企みを巡らせかねないからだ。

ニコに関する話を伏せたまま、災禍の鎧マークⅡについてどこまで語るか。それは黒雪姫に一任すると、会議前にニコ自身が明言していた。もともと彼女は、「パーツがいつこ足りないくらい、バレてもどうってことねーさ。いっそこっちから教えてやるよ」とまで言っていたのだが、ハルユキたちがどうか説得したのだ。

王たち、その配下たちの視線を一身に受けた黒雪姫は、組んでいた脚を解き、音もなく立ち

上がった。

「……確かに、私は感じた。いや、この眼で見た。SSSキットが破壊された直後に起きた、とある現象を」

右手の剣を持ち上げ、まっすぐ前方へと向ける。

「不吉な赤い光が、ミッドタウン・タワーから南の方向へと発射されたのだ。あれは恐らく、キット本体に蓄積されていた膨大な負の心意エネルギーだ」

「はほう？　つまり、こういうことですか？　本体は破壊したものの、その中身にはまんまと逃げられた、と？」

細い両手を広げた貴の王がわざとらしく驚きを表現すると、背後の玉乗り少女が甲高い声で「逃げられたー！」と叫ぶ。

そちらをじろりと見た黒雪姫は、右手を勢いよく下ろしながら言い返した。

「まるで、転送された心意エネルギーを惜しんでいるような口ぶりだな、レディオ？　あんなものに手を出したら、いまごろお前はタロム、もとい（イエロー・ディザスター）に成り果てていたぞ」

ざりざりの発言だが、かつて（災禍の籠）を手に入れながら自ら装着することには二の足を踏み、他レギオンのチェリー・ルークに譲渡した過去を持つ貴の王はプライドを傷つけられたらしく、フンと鼻を鳴らして黙り込んだ。

代わりにひよいと手を挙げたのは、アイボリー・タワーだった。

「南の方向と仰いました、その心意エネルギーとやらが転送された場所は、具体的に解つて
いるのです、黒の王？」

またしても露骨な挑発。

ヒルズ・タワーから発射された赤い光が降り注ぐその瞬間を、ハルユキは目撃した。場所は、
港区白金に存在する小中高一貫の女子校。名前もすでに判明している。

私立エナメルナ女子学院。

白のレギオン、オシラトリ・ユニヴァースの——そして加速研究会の本拠地と目されるその
学校は、百三十年もの歴史を持つ名門校だ。過半数のメンバーが男性である研究会が女子校を
拠点にしているというのも奇妙だが、連中の行いは加速世界の常識では測れない。それもまた、
隠れ蓑の一つなのだろう。

幾つもの苦しい戦いの果てに突き止めたその名前を、この場で明らかにすることはできない。
いまはまだ、何の証拠も用意できていないからだ。

「残念ながら、エネルギーの追跡はできなかった」

アイボリーの挑戦的な問いにも、黒雪姫はあくまで平静に答えた。

「念のため、ミッドタウン・タワーの南側に怪しいポイントがないか地図で確認してみたが、
あの辺りには確いものでね。そう言えばオシラトリの領土内だが、そこらはどこか思い当たる

場所はないかな？」

黒雪姫のききやかな反撃を、アイボリーもまた平然と受け流す。

「ミッドタウンの南と言っても広いですからねえ。目立つランドマークは六本木ヒルズ、自然教育園、それに品川駅周辺くらいででしょうか？ その先はもうグレート・ウォールさんの領土ですし」

列挙された名前の中に、もちろんエテルナ女子学院は含まれていない。アイボリー・タワーの鉄面皮ぶりにハルユキはまたしても歯噛みさせられるが、会議前に下された至上命令を思い出してひたすら耐える。

他の王たちも考え込むような気配を漂わせる中、赤の王スカーレット・レインが、長い沈黙を破った。

「研究会の連中が、ISSキットを使って溜め込んだ心意エネルギーで何を金んでやるのかはともかく、だ」

胸割された声の奥で赤々と燃える意志の炎を感じ取ったハルユキは、いつとき慎りを忘れてニコに視線を注いだ。

大型のアイレンズを強く光らせながら、二代目赤の王は発言を続けた。

「これまではずっと、研究会への対応が後手後手になっちまってからな。次もまた、奴らが何かをしでかすのをただ待つてゐるわけにはいかねーだろ」

「そうは言っても、連中は領土を持ってるわけじゃありませんからねえ？」
すかさず、黄の王が横やりを入れる。

「先手を打つのは結構ですが、いったいどこを攻めようというんです？」

「あたしが言いたいのは、その《攻める》って意思だけはこの場できっちり統一しておくべきだってことさ。もし加速研究会の本拠地が割れたそんな時は、ここに集まってる七レギオンが総力で攻撃する。マツチングリストから消える隙も与えずに乱入しまくって、開ける限りのポイントを開り取る。もしその作戦に参加しぬレギオンがあったら、そこは研究会と通じてると見なす」

ニコの物々しい言葉に、各レギオンの幹部たちが低くぎわめいた。イエロー・レディオさえも、鼻白んだように黙り込む。

過激ではあるが、発言に筋は通っている。何より、アイボリー・タワーと白のレギオンには小さかぬプレッシャーとなるはずだ。もしエテルナ女子学院、通称《ルナ女》が加速研究会の拠点であるという確固たる証拠が示されれば、その時点で、白のレギオンは重大な選択を迫られるのだから。

「彼女も、王として一皮剥けたようですね」

隣の楓子の囁きに、ハルユキは小さく頷き返した。

「はい……レインはこれから、もっともっと強くなると思っています」

「猶^{なほ}さんも、負けていられないわね」

「ハ、ハイ」

首を縮めつつもう一度頷いたその時、ブルー・ナイトの毅然とした声が議場に響いた。

「赤の王の言っていることは正論だな。ここで七レギオンの方針を統一しておけば、いざという時にすぐ動けるわけだ。もちろん俺は、この場に研究会と内通してる奴がいるとは思わないが一応訊くぞ。誰か、反対意見のあるヤツはいるか？」

青の王の言葉が終わらないうちから、ハルユキはアイボリー・タワーにじっと視線を注いでいた。

これまではのらりくらりと顔に巻くような発言を繰り返してきた彼も、今回ばかりは手を挙げない。パープル・ソーン、イエロー・レディオ、そしてグリーン・グランデも沈黙を保っている。

ぐるりと会議場を見回したブルー・ナイトは、重装甲をガシヤツと鳴らして勢いよく立ち上がった。

「それでは、赤の王の提案を採択する。加速研究会の拠点が判明した時点で、速やかに七レギオンによる合同チームを編成し、集中攻撃を行うこと。攻撃には、ハイレベルのメンバーを可能な限りの人数参加させること。ちなみに、レオニーズからは俺も出張るつもりだ」

それを聞いた途端、背後に控えていたコバルト・ブレードとマンガン・ブレードが慌てたよ

うに叫んだ。

「お、王！」

「それは……！」

「仕方ないだろ、同じ相手への乱入には一人一日一回の制限があるんだ。連中の蓄積ポイントにもよるが、全損まで追い込もうと思ったら一つでも多く勝ち星を上げないとな」

確かにそれはその通りだ。ブラック・バイスやアルゴン・アレイはレベル8のハイランカーであり、溜めて（ため）いるバーストポイントも千や二千ではないだろう。彼らを一気に全損させるのは非現実的だが、レベル8のラスト・ジグゾーや、黒書殿（クロムノミヤ）が沖縄で遭遇したというサルファ・ポットならば……。

そこまで考えた時、ハルユキの脳裏に、再びひとつの名前が浮かんだ。

ウルフラム・サーベラス。

加速世界に姿を現して以来、アタア・カレントのお株をうばうような（最強のレベル1）として勇名を轟かせた彼だが、一週間前の戦いで無制限フィールドにダイブするためにレベルを一気に5まで上昇させた。それだけではない。研究会の支配から永久に脱するべく、ハルユキの手で引導を渡して欲しいと願った後は、残りバーストポイントをわずか10にまで減少させたのだ。

その後、災禍（災い）の鐘（かね）マークⅡに取り込まれてしまったサーベラスは、回線切断によって無制限

フィールドから消えた。以来一度も姿を現していないが、ハルユキはまだ彼がバーストリンカーであり続けていると信じている。

しかし同時に、枯渴しかけたポイントが、そう簡単に回復するとも思えない。

サーベラスが加連研究会と、彼らの《心傷療理論》によって生み出されたバーストリンカーであることは、ネガ・ネビユラスのメンバー以外ではニコとバドさんしか知らない。だがもしそれが他のレギオンの知るところとなり、採択されたばかりの合同攻撃作戦の標的にされたら、たった数回の敗北でポイントを全損してしまうだろう。

いや、それ以前にサーベラスは、膨大な負の心意が宿った《インピンシブル》のスラストを所持したままなのだ。恐らくISSキットと同様かそれ以上の精神干渉を受けているはずで、早く強化外装を浄化、分離しないと、リアル的人格までもがネガタイプな影響を受けてしまいかねない。

——どこにいるんだ、サーベラス。

対戦ステージの空を見上げながら、ハルユキは胸中深くで呼びかけた。

ステージの種類は《鉄鋼》。会場場となっていて千代田エリアの帝城、東御苑の地面には無骨な鉄鋼板が敷き詰められ、立木も赤茶けた鉄骨に姿を変えていて風情も何もないが、空だけは美しい。透明感のある青色をバックに、鎧装が何本もたなびいている。

もし、もう一度ハイエスト・レベルに行ければ、サーベラスを見つけられるかもしれない

……と考えるから、すぐに打ち消す。いくら無限の知覚力を与えられるあの場所でも、現実世界にいる人間を探することはできない。

ああ、いっそ——。

いっそ、加速世界と現実世界がひとつに融合してしまえば。みんながバーストリンカーで、対戦は楽しくてスリリングなだけのゲームで、誰も全損なんかしないし憎しみも生まれない、そんな世界になれば。サーベラスにもすぐに会いに行けるし、メタトロンとだっていつも一緒にいられるのに……。

そんな途方もない空想を湧かせながら、ハルユキは無意識のうちに、左肩に乗っていた小さなアイコンを右手でそっと握ると左手も重ねて胸の前まで移動させた。

すると即座に、頭の中で軋（こ）むような音が弾ける。

「こら——しもべの身で、私に軽々しく触れるなど何度言ったら解るのです！」

「あ、いや、その」

慌てつつも、ここで手を離すとメタトロンが飛び上がって他レギオンの注意を引いてしまいうるので、しつかり抱え込んだまま脳裏で弁解する。

「き、きみがあんまり静かだから、フリーズしちゃったのかなーって……」

「フリーズ？ この私が、たとえフィールド・アトリビュションW04、おまえたちの言う（氷雪ステージ）であろうと凍り付くはずがないでしょう」

「そ……そうだね。なら、黙り込んで何を考えてたの？」

「おまえたち小戦士どもの意思決定プロセスがあまりにも非効率的なので呆れていたのです。カソクケンキュウカイとやらがあのおぞましい疑似ビーイングを創った者どもならば、こんな話し合いに時間を浪費せずに、いまずぐ城ごと叩き潰してしまえばいいでしょう」

「そ、そんな単純な話じゃないんだよ。あの学校が奴らの拠点だっていう確かな証拠がなきゃ、他の王たちを納得させられないんだから」

「だいたい、その《王》という呼称が気に入りません。単身では我が第一形態にすら手も足も出なかったというのに、王を名乗るなど片腹痛いというものです。おまえの《親》だとかいう黒いのも例外ではありませんよ」

「わあ、そそそのへんで！」

メタトロンとの会話は思念で行われているが、自分のことに關しては理屈ではない超感覚を発揮する黒雪姫ならば、それさえも聞き付けかねない。ほんの二メートル前に座っている黒の王の背中を見詰めながら、ハルユキはいつそう強く立体アイコンを胸に引き寄せた。

すると、黒雪姫ではなく、右隣に立つ楓子がちらりと視線を落としながら不思議そうな声で囁いた。

「猶さん。会議の前から気になっていたんだけど……その白い虫みたいのは、いったい何なのかしら？」

「虫とは無礼な!!」

怒声（どせい）をキーンと響（ひび）かせ、ハルユキの胸から飛び出そうとするメタトロンを、両手で必死に押さえ込む。

「あ、こ、これはその、ベツトというかオプシヨンというか」

「ふうん……どこで拾ったんですか？」

「えと、 ええ——と……」

神獣級エネミーである大天使メタトロンが一週間の戦いでハルユキを助けてくれたこと、そして災禍（わざはひ）の鐘（かね）マークⅡの虚無攻撃（きむこうげき）を防ぐために消滅（しょうめつ）してしまったことは、戦いの後のミーティングで委細（わいさい）漏（も）らさず説明した。

しかし、その後メタトロンが奇跡的な復活を果たしたことについては、つい皆に伝えそびれたまま七日が経過してしまった。理由は二つ。一つ目は、迫り来る期末テストのせいで、全員が集まる機会が持てなかったこと。そして二つ目は、復活したメタトロンとレギオンメンバー——とくに黒雪姫（くろくは）が邂逅（かいこう）したらどうなるのか、想像もできなかったからだ。

黒雪姫は、ハルユキの（親）にしてレギオンマスター。そしてメタトロンは、ハルユキをしもべと呼ぶ（主）。そこに（師匠）である楓子（かえりこ）が加わったら、きっと何か途轍（とつご）もなく恐ろしいことが……。

「——はんじゃ、今日のところはこんなモンか」

青の王の声が、ハルユキの意識を議場に引き戻した。幸い、隣の楓子も追及を中断して体の向きを戻す。

ずっと上の空だったわけではなく、王たちの会話は耳に入っていたのだが、加速研究会への攻撃方針が決定したあとは、六大レギオン相互不可侵条約の撤廃止や、七月導入の噂はあったもののいまだ出現していない《宇宙》ステージに関する情報交換など、ネガ・ネビュラスには直接関係のない話し合いが続いていたのだ。

ざっ、と重々しい足音とともに七人の王たちがいつせいに立ち上がる。進行役の青の王が、再び口を開く。

「次の会議は、加速研究会の本拠地が発見され次第、招集をかける。情報が正しいと判断されれば、即座に攻撃作戦を立案、発動する。願わくば、奴らの次なる悪巧みが動き出す前に叩き潰したいモンだな」

「最後に、ひとつ確認させて欲しいんだが」

黒雪姫の言葉に、青の王が軽く首を傾けた。

「なんだ、ロータス？」

「ナイト、お前はいま、情報が正しいと判断されればと言ったが、何をもって正しいか否かを決めるつもりだ？」

「そこは単純に考えてるけどな。研究会の連中も、まさかニューロリンカーのグローバル接続

を常時切りっぱなしってわけにはいかないだろ？　なら、奴らが根城にしてる戦城のマツチン
グリストには名前が出てくるはずだ。情報を受け取り次第、偵察隊を派遣してリストを確認す
る。そこにブラック・バイスだのラスト・ジグソーの名前があつたら、情報は正しかつたつて
ことだ」

「……ふむ。了解した」

黒雪姫が頷くと、長い錫杖に体を預けたバーブル・ソーンが、どこか優しげに聞こえる声で
言った。

「ロータス、次は自分たちだけで殴り込むのはやめてね。あなたが私の知らないところで金損な
んかしたら、私、とっても悲しくなっちゃうから」

「忠告、有り難く受け取っておこう、ソーン」

案つくなく応じると、黒雪姫は足許の鉄板を音高く鳴らして一歩下がった。それを合図に、
まず黄の王が無言で芝居がかった札をすると、玉乗り少女と一緒にするすると遠ざかっていく。
次いで紫の王と青の王がそれぞれの配下とともに歩み去り、赤の王とブラッド・レバードもハ
ルユキたちに軽く合図して歩き出す。

視線を動かすと、アイボリー・タワーの座っていた席は、いつの間にか空になっている。こ
れで、会議場に残っているのはネガ・ネビュラスの三人と、グレート・ウォールの二人だけと
なった。

結局、今回の会議でもほとんど喋らなかつた緑の王ダリーン・グランデは、エメラルド色の装甲を重々しく鳴らしながら巨体の向きを変え、鈍く光るアイレンズでじっとハルユキを見下ろした。

もうずっと昔のことのようにも思えるが、二週間と少し前、ハルユキは六本木ヒルズ・タワーの屋上で緑の王と邂逅した。その時、グランデはハルユキに告げたのだ。

この「フレイン・バースト2039」と名付けられた世界の他にも、二つのよく似た世界、「アクセル・アサルト2038」及び「ヘコスモス・コラプト2040」が存在していたこと。しかしその二つは、何らかの理由で廃棄されてしまったこと――。

同じ名前を、ハイエスト・レベルにいる時にメタトロンのからも聞かされた。そして彼女は、こうも言ったのだ。ハルユキに二つの別世界の存在を教えた緑の王も、ハイエスト・レベルを訪れたことがあるのかもしれない、と。

いま、ハルユキの両手の中でグランデを観察中であろうメタトロンは、いったい何を感じているのだろうか。先刻までは手から飛び出そうと盛んに羽根を震わせていたが、いつの間にか完全に動きを止めている。

重苦しい沈黙を破ったのは、グランデの後方から姿を現した鋼鉄のボクサー型アバター――「グレート・ウォール（六層装甲）」の第三席、「鉄拳」アイアン・バウンドだった。黒光りするグローブを嵌めた右手を軽く持ち上げ、意外に気さくな口調で話しかけてくる。

「よう、ご苦勞だったな、シルバー・クロウ。お前に（理論鏡面）アビリティ習得を要請したのは俺だが、まさか本当に身につけて、しかもあのメタトロンをやっつけちまうとは思ってなかったぜ」

「い、いえ、僕はレーザーを反射しただけですから……」

しかも、ハルユキが習得したのは、アーダー・メイデンの（鏡）であるミラー・マスカーが編み出したという（理論鏡面）ではなく、似て非なる効果を持つ（光学誘導）アビリティなのだが、それはこの会議では伏せておくということになっている。

「反射しただけでもすげえよ、ウチのレギマスの神器プラス心意防壁でも五秒耐えるのが限界だったんだからな。ボス、クロウに何かひと言あります？」

「……………」

「何もないそうだな。つうわけで、とっとと用件に入らせて貰うぜ。いつコバマガがステージを閉じちまうか解らないからな」

バウンドは、ちらりと周囲を見回し、他のレギオンのメンバーたちが完全に姿を消していることを確認してから小声で続けた。

「例の件、基本的にはOKだ」

「へ？ 例の…………って、何でしたっけ？」

首を傾げるハルユキを、すぐ右に立っていた機子と左に立っていた黒書姫が両側から押して

下がらせる。

「基本的には、つてことは何か条件がついてるの、拳ちゃん？」

楓子が口にした愛嬌のあるニツクネームに嫌な顔をしながらも、バウンドは頷いた。

「まあ、そういうことだ。うちのビリー……六層装甲第二席の《ビリジアン・デクリオン》が譲らなくてな。会談は、渋谷第二エリアでやらせて貰う」

それを聞いて、ハルユキはようやく思い出す。一週間前、長く苦しい戦いが終わったあとのミーティングで、楓子がアッシュ・ローラーに命じたのだ。近々、グランデとの会談をセツティングしなさい。場所は任せるけど、中立のエリアが望ましいわね——と。

その時はいくらなんでも無茶なのではと思っただが、どうやらアッシュはすっかり役目を果たしたらしい。しかし、さすがに王を領土から引く張り出すことはできなかったようだ。

楓子は、黒青鮫と一瞬視線を交わしてから、流体金属のように輝く銀色のロングヘアを揺らして頷いた。

「構わないわ。ただし最低限の安全措置として、会談の前後十分間は、参加するメンバー以外はグローバル接続を切断して貰えるかしら」

今度はバウンドが隣のグランデを見上げ、緑の王は身動きひとつしなかったにもかかわらずすぐに首肯した。

「いいだろう。会談は、この会議と同じくギャラリー方式で行う。スターターは俺とビリー。」

もしそっちの誰かが、たとえウツカリミスでもうちのメンバーに乱入してきたら会議はお流れだからな。そして万が一、乱入相手がボスだった時は、即座に全面戦争だ」

どすの利いたパウンドの声にもまるで動じず、楓子はもう一度頷いた。

「解ったわ。参加人数だけど、こちらは最大で七人の予定よ」

「では、こちらもそれに揃える。日時はどうする？」

「来週の日曜、七月十四日の午後三時でどうかしら」

「了解した。運れるなよ」

《鉄腕》スカイ・レイカーと《鉄拳》アイアン・パウンドはあつという間に打ち合わせを終え、それぞれのレギオンマスターに視線を向けた。

いままで無言で緑の王を見上げていた黒雪姫が、思わぬ言葉を発したのはその時だった。

「グランド。二年と十一ヶ月前の、我々の会話を憶えているか」

少し間を置いて、ステージの地面を覆う分厚い鉄板を震わせるほど重々しい声が、緑の王のフェイスマスクから発せられた。

「無論」

「そうか。ならば……《選択の時》は遠からず訪れる」

ハルユキには理解できない言葉を吐くと、黒雪姫は無音で踵を返した。楓子も、緑の二人に向けてひらりと右手を振ってから、黒雪姫の後について歩き出す。

「え、えと、失礼します」

べこりと頭を下げ、ハルユキも二人を追いかけた。(選抜の時)とはいったいどういう意味なのか訊ねたかったが、黒の王の細い背中には凛とした決意が満ちていて、声を掛けることは躊躇われた。

会議場となった江戸城本丸跡広場から、桔梗門のほうへと下り始めた時、ハルユキの両手に包まれたまま沈黙していたメタトロンが呟くように言った。

「あの緑色の小戦士も、白いのとは別の意味で興味深いですね」

「え……どのへんが？」

「ほんの少しだけ、我らビーイングと同じ匂いがしました」

「それって……どういう……」

首を傾げながらハルユキはちらりと後ろに眼を向けたが、赤茶けた鉄骨の群れに遮られて、緑の王の姿を見つけることはできなかった。

楓子の運転する車が北の丸公園のパーキングを出て靖国通りを走り始めても、ナビシートの黒雪姫は黙り込んだままだった。

思えば、今日は最初から口数が少なかった。七王会議を前にして気を張っていたのだろうか、本書ではアイボリー・タワーや他の王たちと堂々と渡り合い、白のレギオンに少なからぬ圧力までかけてみせたのだ。

結局ハルユキはその場にいただけで終わってしまったので、せめていたわりの言葉をかけたかったが、後席から見える黒雪姫の横顔は深い物思いに沈んでいるようで、それを紡げるのも躊躇われる。

いっばう、運転席も静かだ。書道の楓子なら、レギオンマスターの緊張をはぐすためにあれこれ話しかけているだろうに、今日はきっちり口を閉じたままステアリングを操作している。車内には、かすかなロードノイズとモーター音、そしてARナビのガイド音声だけが無機質に響き続ける。

——ここはやっぱり、僕が雰囲気を感じないといー

と決意したハルユキが、行きつけのゲームショップで見つけた、ジャンプとダイブキックし

かできないレトロ格闘ゲームの話題を出そうとした、その時。

「……楓子。杉並エリアに入ったら、少し停めてくれないか」

黒雪姫が、咬くように言った。

「……わたしも、それを提案しようと思ってたところなの」

そう答えた楓子が、ちらりとナビを見る。車はいつの間にか山手線をくぐり、増田通りから新青梅街道に入っている。数分後、中野区と杉並区の境界線を越えた途端、左のウィンカーが点滅する。

カナリアイエローのイタリア製EVは、滑らかに減速すると、道路脇に設けられた駐車帯に滑り込んだ。車が完全に停止するやいなや、黒雪姫が上体を振り向かせる。

「ハルユキ君」

いきなり名前を呼ばれ、ハルユキは半分開いたままだった口をいったん閉じてから、改めて答えた。

「は、はい」

「一つ、確認しておきたいことがあるんだが……いや、続きは向こうで話そう」

「は、はい？」

と隣さした時にはもう、黒雪姫はシートを深くリクライニングさせ、後席に身を乗り出していた。伸ばした右手に摘まれているのは、黒く輝くXS-Bケーブルのプラグ。

ぶすつ、とハルユキのニューロリンカーにプラグが挿入され、同時に種子も黒雪姫と直結し、黒雪姫の口から「パー스트リント」のコマンドが発せられ、ハルユキの目の前に「HERE COMES A NEW CHALLENGer」の英文字が出現するのにかかった時間は、わずかに二秒だった。

いつたい、なにゆえ車内で直結対戦。

と訝りながらハルユキが降り立ったのは、黒く湿った土の上だった。頭上の夜空には緑のようには細い三日月が浮き、周囲にはありとあらゆる形の墓石が無数に並んでいる。下位階黒系の（墓地）ステージだ。

対戦相手の黒雪姫はどこだろう、と周囲をきょろきょろ見回す。視界にガイドカーソルが出ていないのですぐ近くにいますすが、ステージがかなり暗いせいもあって、漆黒のデュエルアバターをなかなか見つけられない。

「……これじゃあ闇夜にカラスだなあ……あ、カラスは僕だっけ……」

などと身体もないことを眩しながら、墓石の列に沿って歩きだそうとした時。

頭上から、耳に馴染んだ——しかしどこか冷ややかな声が降ってきた。

「ここだ、クロウ」

慌ててもう一度空を見上げると、まるでトータムボールのように細長い墓石の上に、鋭利な

シルエットが存在した。両腕を組み、両脚をびしっと揃えて立つその姿は、間違ひなく黒の王ブラック・ロータス。

灰白^{ハイホウ}い月光^{ゲツカウ}が半透過^{ハントウカ}装甲の直線的なエッジを浮き上がらせ、その中で青紫色のアイレンズがひととき強く輝^{ヒカ}いている。更に、アバターの全身から放射されるオーラの圧力までもが強烈^{キョウリョウ}に伝わってくる。

——先輩、本気だ。でもなんでいきなり。まさか、ここで何かの特訓？ それともシゴキ？ はたまたカワイガリ？

そんなことを考えながらじりじり後退するハルユキの背中側から、新たな声^{こゑ}が響いた。

「わたしはここですよ、鴉^{カラス}さん」

しゅばつと振り向く。少し離れた場所^{ばしょ}にそびえる節くれ立った巨木の枝に、灰白い影が懸掛^{けんか}けている。純白のワンピースを身にまとい、同色の帽子を頭に戴^かせたネガ・ネビュラス副長、スカイ・レイカー。

ハルユキには干渉^{かんしょう}できないギャラリーのはずなのに、放たれるブレッツシャ―は黒雪姫^{クロユキヒメ}に勝るとも劣^{おと}らない。レイカーもまた本気^{まこと}のようだ。何に本気なのかはさっぱり解^からないが。

前門の黒雪姫、後門の楓子^{かきこ}に挟^{はさ}まれて進退窮^{しんたいきゆう}まったハルユキは、二人を交互^{こうご}に見やりながらおそろおそろ訊^きねた。

「……あの、先輩、師匠^{ししやう}、これは何なんですか」

「言っただろう、確認したいことがあると」

そう答えると、黒雪姫は高さ七、八メートルはあるであろう墓標の上からひらりと身を躍らせた。同時に楓子も木から飛び降り、ふわりと地面に降り立つ。

「か、確認……もしかして、僕が（鐘）にまた寄生されたんじゃないかと思ってる……とかですか……？」

「いや、違う。キミ自身に関することではない」

「へっ？」

唖然とするハルユキに向けて、黒雪姫は思いもよらない言葉を口にした。

「今日の会議のあいだずっと、キミの肩に載っていたアレは何なんだ？」
どくり。

と全身を緊張らせた途端、背後で楓子の声が響く。

「鶴さんはベットとかオプションとか言ってましたけど、まさか、わたしたちの言いつけを破ってショップでおかしなモノを買ったわけじゃないですよね？」

そう言いながらハルユキの傍らを通り過ぎ、黒雪姫の隣でふわりと振り返った楓子に向けて、ハルユキはヘルメットを高速水平運動させた。

「ちちちち違います！ ショップなんて行ってません！」

「なら、アレはどこで手に入れたんですか？ わたし、あの虫っぽいことから、どうも良からぬ

「心配を感じたんですが」

「私もだ。あの心配、どこかで感じたことがあるような、ないような……」

再び胸組みをする黒雪姫に視線を移し、苦しい説明を試みる。

「きききき気のせいじゃないですか？ あれはええと、その、知らないうちに、いつの間にか僕にひつついて……」

「ほう。ならば、ちよつと出してみてくれ」

「へっ？」

「いいでしょう？ わたしたちにも、鴉さんのかわいいベツトを紹介してくださいな」

「えー、あー、うー……」

この場を切り抜ける方法をどうにか捻り出そうとしても、脳内の検索エンジンは一致する情報は見つかりませんでした」と答えるばかり。

かくなるうえは、慘劇がなんとか回避されることを祈りつつメタトロンを呼び出すしかない
と覚悟を決めてから、そもそもそれができない可能性に気付く。

ハルユキとメタトロンは、正体不明の（何とかテラス）の言葉によれば、ある種のリンクで結ばれている。そのリンクは、無制限中立フィールドのみならず通常対戦フィールドでも保たれているが、メタトロンの立体アイコンを呼び出すには、深く精神を集中しながら数十秒間も呼びかけを続けなくてはならない。

先刻の七王會議に、黒雪姫や楓子に内緒でメタトロンを召喚したのは、アイボリー・タワーや他の王たちを見ておいて欲しかったからだ。その甲斐あって、彼女はアイボリーと緑の王に何かを感じたらしい。

しかし、この墓地ステージは隔離された直結対戦フィールドだ。果たしてここから、メタトロンの呼びかけが届くかどうか……。

——いや、届くはずだ。直結対戦でもポイントを増減するし、それはつまりブレイン・バースト中央サーバーと接続しているってことなんだから。

そう考えたハルユキは、レギオンマスターとサブマスターに向けてこくりと頷いた。

「……解りました。いま呼びますから、四……いえ、三十秒待ってください」

「ずいぶん時間がかかるんだな」

と言いつつも黒雪姫は一步下がると、墓碑のひとつに背中を預けた。楓子も、にこやかに言い添える。

「あんまりのんびりしていると地面から死人の手が生えてきちゃいますから、早めにお願ひしますね」

「は、はい」

大きく息を吸い、吐くと、ハルユキは眼を閉じて精神集中を開始した。

イメージする。加速世界の片隅にいる自分から、遙か高みのハイエスト・レベルを通じて、

（コントラリー・カセドラル）の最奥で翼を休めているメタトロンへと一筋の光が伸びていくイメージ。そのリンクを通して、声を届けるイメージ……。

——メタトロン。僕の声が聞こえるかい。

——はんの三十分前に別れたばかりだけど、もういちど出てきてくれないか。君に、ちゃんと紹介したい人たちがいるんだ……。

暗闇に閉ざされた視界に、極小の光点が生まれる。ゆっくりと点滅するそのドットは、少しずつ振幅を増していき、やがて連続点灯状態で安定する。

——相変わらず愚かですね、シルバー・クロウ。

頭の方で、呆れたような声が響いた。

——お前の世界での三十分は、ミーン・レベルでの五百時間に相当するのです。もっとも、その程度の時間、私にとっては一瞬のまじろみのようなものですが。……リンクが安定しました、眼を開けなさい。

命じられるままに、ゴードルの下でアイレンズを見開くと、すぐ目の前に純白のアイコンが浮遊していた。紡錘形の体に天使の輪と小さな翼を備えた、メタトロンの感覚端末だ。

三メートルほど離れた場所に立つ黒雪姫と機子の視線を感じながら、ハルユキはアイコンを両手で包み、そっと胸の前まで移動させた。

「えーと……先輩、師匠、呼びました……」

願わくば、この〈会見〉が平穩無事に終わってくれますように！ と祈りつつ、二人に声をかける。

すると、墓石から離れた黒雪姫が、興味深そうに上体を屈めながら言った。

「ほう、それが、キミのベットか」

途端――。

「誰がベットですが、この無礼者!!」

いつもの思念ではなく、ステージ全体を揺るがすような大音声が轟き渡った。実際に無数の墓石が震え、地面の下でうごめく死人たちまで縮こまったように思えたのは、恐らく気のせいだろうが。

黒雪姫と楓子は同時に体を仰け反らせると、互いに顔を見合わせた。

「……レイカー、なんだか、いまの声に聞き覚えがある気がするんだが」

「……わたしもよ、ロータス。確か、無制限ワールドのどこかで……」

「我が声を忘れるとは、重ね重ねの非礼、最早許せません！ 我がしもべシルバー・クロウ、この兩名に一発ずつ拳骨をくれなさい！」

「し、しもべだとい？ 貴様こそ虫みたいなナリをしているくせに偉そうな！ クロウは私の



「子」だぞー！」

「そしてわたしは弟子ですよ、ベットさん。あなたがどの誰だろうと、横取りしようなんて図々しいわ」

「何度虫だのベットだのと、本気で命が惜しくないようですよ！ かくなる上は、私が直接思い知らせてやります！ お前たち、いますぐ我が城まで出向きなさい！」

よし、走って逃げよう。

久々の遁走を決定したハルユキは、じりじり後ろに下がろうとしたが、黒雪姫に右手の剣を向けられて硬直する。

「タロウ、いったいこの偉そうなのはどこのどいつなんだ？」

「邪さん、逃げたりごまかしたりしたらあとで痛くしますよ」

「え、えーと……えーっと……」

不安定な格好のままハルユキは危機回避の道を探ったが、これは避けられぬ激突だったのだと観念し、かくりと頷く。

「あの……これ、じゃなくてこの人は、神獣級エネミーで（四型）の一人、大天使メタトロンさんです……」

恐る恐るそう口にする、小アイコンはふわりと浮き上がり、偉そうに羽根をはためかせ、黒雪姫と楓子はその下で啞然とアイレンズを見開いた。

「大天使、メタ……トロン、だと？」

「メタトロンの本体……？ 消えてしまったんじゃないの……？」

「様をつけなさい、小さき者たちよ」

——この三人も、きつといつかは解り合ひ、友達になってくれるはずだ。いつか……そう、加速世界に真の平和が訪れた、その時には……。

などと、脳内に壮大なBGMを流しながら考えてしまうハルユキだった。

災禍の鐘マークⅡとの死闘の最中に消滅したと思われたメタトロンだったが、(コア)だけはどうか復活を果たせたこと。

それ以来、ハルユキと不思議なリンクで結ばれ、通常対戦フィールドでもこうしてアイコンを呼び出せるようになったこと。

しかし戦闘能力のほとんどは失われてしまい、現在はコントラリー・カセドラルに存在するメタトロン第一形態の中で傷を癒していること——。

それらの事情を黒雪姫たちに説明するだけで、ハルユキは対戦時間の七割ほどを使い果たしてしまった。途中でメタトロンがいちいち「お前を助けようとしたわけではありません」とか「それではお前が私を復活させたようではないですか」とか文句を言い、そのたびに謝っていたせいもあるが、それ以前にハルユキにも現象のロジックがちゃんと理解できていないので、

説明するにも限界があるのだ。

聞き終わった黒雪姫と楓子は再び顔を見合わせると、うーんと長く唸った。

「……上位エネミーがある程度の知性を備えていることは、四神スザク、セイリユウとの戦いで学んだつもりだったか……」

「ピーイングと呼びなさい、ブラック・ロータスとやら」

「まさかこんなにお喋りで、しかも偉そうだとは思ってなかったわね……」

「偉そうではなく偉いのですよ、スカイ・レイカーとやら」

二人が何か言うたびに、上空に浮かぶアイコンがばたばた羽根を動かしながら口を挟むのが恐ろしくもあり微笑ましくもありで、ハルユキは冷や汗をかきつつ口許を絞らせてしまう。

その気配を鋭敏に感じ取った黒雪姫が、じろりと一瞥くれながら言った。

「……まあ、クロウは妙なのに好かれるタチだから、今更驚きません……」

「え……そうですか？」

「少しくらい自覚しておけ。——で、今後のことだが……」

視線を、頭上三十センチのメタトロンに向ける。

「四型メタトロン。なにはともあれ、私の（子）たるシルバー・クロウを助けてくれたことは礼を言っておく」

「それには及びません、ブラック・ロータス。シルバー・クロウは我がしもべですから」

「……（親）と（主）、どちらの権利がより優先されるべきかは、お前が力を取り戻してから剣で決めるとしよう。それまでは、クロウの近くにすることはやむを得ず認めるが……ひとつ、確認させて欲しい」

「そなたに何を認めてもらう必要ありませんが、言ってみなさい」

「メタトロン。お前もまた、加速研究会と戦う意志を持つ者……そう考えていいんだな？」

黒雪姫の問いかけに、小さなアイコンはしばし沈黙した。

暴風ステージをひんやりと濡った風が吹き抜け、ぬじくれた古木の枝葉をざわざわと鳴らす。どこかで狼の物悲しげな遠吠えが響き、夜空を大きな蝙蝠が横切っていく。

「……そなたたち小戦士たちの諄いに、興味はありません」

素っ気ない口調で、メタトロンが言った。

しかし、すぐに少しだけ音量を増した声が続く。

「ですが、加速研究会を名乗る者どもは、無礼にもこの私を城から引き出して門番の真似事をさせ、忌まわしい虚無属性の疑似ビーイングを生み出し、そして我がしもべシルバー・クロウを潰し去ろうとしました。その償いはさせねばなりません」

「ふむ。少々引つかかる答えたが……まあいい、意志は伝わった。では、四聖メタトロンよ。いまこの時から……」

自分より少し高いところに浮かぶアイコンをしかと見据えた黒雪姫は、朗々と響く声で宣言

した。

「――お前は、我がレギオン、ネガ・ネビュラスの一員だ!!」

3

「ありがとうございます師匠、気をつけて帰ってください」

運転席の楓子に礼を言い、ハルユキは車を降りた。助手席の黒雪姫には、歩道からべこりと頭を下げる。

「先輩も、お疲れさまでした。メタトロンのこと、黙っててすみませんでした……」

「いや、いいさ。説明しづらかったキミの気持ちも解るよ。アレではな……」

苦笑する黒雪姫に、ハルユキも小さな笑みを返す。

ネガ・ネビュラス加入を宣言されたメタトロンは、なぜ私が小戦士の軍団になど！と散々騒ぎまくってから、最終的に機つかの条件つきで了承したのだった。黒雪姫と楓子の二人に引き合わせるだけでもあの有様だったのだ、レギオンのフルメンバーが揃っていたらどんな大騒動になっていたか想像もつかない。

「しかし……奇妙なものだな。ミッドタウン・タワーで第一形態と戦っている時は……いや、その後第二形態と対面した時ですら恐ろしいエネミーだとは思えなかったのに、いまはもう私たちと同じ存在のように思えるのだから……」

黒雪姫の呟きに、ハルユキはこくこく頷いた。

「本当ですね。メタトロンは、僕を守って消えてしまいそうになった時にこう言っていました。おまえたち小戦士も、私たちビーイングも、本質的にはまったく等しい存在だ……って」

「だとすると、なんだかこれからはエネミー狩りがしづらくなってしまうわね」

黒雪姫の向こうで、楓子が少し困ったような微笑みを浮かべて言う。

ここ数日、同じ事を考えていたハルユキはもう一度頷いた。

「そうなんですよ……。今度、メタトロンに、そのへんのことをどう思っているのか訊いておきます」

「おっと、だからと言って、あまり私のいないところでアレコレするなよ。私は彼女がキミの主だなどと、決して認めたわけじゃないんだからな！」

窓越しに伸びてきた手が、ハルユキの胸元を軽くつつく。

「は、はははい！」

「それと、一つ確認したいんだが……メタトロンは、ずっとあの小さなアイコンの姿のままなのか？」

「は、はい。力が回復するまで、本当の姿では出現できないみたいです」

ハルユキがぶんぶん頷くと、ようやく指が車内に引っ返む。

「なら、まあ、よかろう。では、今日はご苦労だったな、ハルユキくん。ゆっくり休め……と言いたいところだが、水曜日からの期末試験に備えて、ちゃんと勉強もするんだぞ」

「それじゃ鴨さん、またね。テスト、頑張るんですよ」

「は、はい……」

いきなりシビアな現実に取り戻されてがっくりくるハルユキの耳に、軽やかなモーター音を残して自動車は環七通りを南に走り去って行った。

鮮やかなカナリアアイエローが車列の向こうに消えるまで見送ってから、少し先にある横断歩道目指して歩き始める。

ふと、聞き覚えのある甲高い咆哮が遠くで響いた気がして振り向いたが、広い歩道には家族連れやカッブルが楽しそうに行き交っているだけで、建物の陰から巨大なエネミーが姿を現すようなことはもちろんなかった。

七夕の飾り付けの下をたくさんさんの買い物客が行き交うショッピングモール一階大回廊を抜け、住民専用エレベータに乗り込むと、ほっと息を吐く。

高円寺駅から徒歩五分という好立地に建つこの大型複合マンションの一室を両親が購入したその年に、ハルユキは生まれた。もちろん母親の妊娠はその前から解っていたわけで、両親は親子三人で暮らすためにここに引っ越したのだ。

しかし、ハルユキが小学校二年生の時に、両親は離婚した。直接の理由は父親の浮気だったらしいが、ハルユキがかろうじて憶えている両親の姿は、仲よさそうに笑い合っている場面が

はとんどだ。

しかし父親は、泣いてすがりつく幼いハルユキを振り払うようにして家を出て行った。それ以来、一度も会ったことはない。協議離婚がスムーズに成立していれば、父親にはハルユキに面会する機会が与えられたはずだ。それがなかったということは、母親が面会を拒否したのか——それとも、父親が会う必要はないと言ったのか。

たぶん後のほうなんだろう、とハルユキは次々に切り替わる階数表示をばんやり眺めながら考える。

離婚するしばらく前のある夜、父親と母親はどちらがハルユキの親権を持つのかを、深夜のリビングルームで議論していた。夜中にふと目を覚ましたハルユキは、廊下で二人の刺々しいやりとりを聞いてしまった。親権を奪い合っていたのか、それとも押しつけ合っていたのか。これも、たぶん——……。

エレベータが穏やかに減速し、ハルユキは物思ひから醒める。最近よく昔のことを考えるのは、きつと先週の文化祭で、(時)と名付けられた生徒会の展示を見たからだ。しかし、以前ほど、鋭い針で胸を突かれるような感じはしない。

母親は、今日も家に帰ってこないようだ。だからといって、見捨てられているとは思わない。

山形で桜桃農家を営む祖父母に聞いた話では、母親は幼い頃から負けず嫌いの頑張り屋で、

成績はずっとトップクラスだったらしい。そして大人になり、外資系投資銀行に就職し、結婚して母親になってからも、常に何かと戦い続けてきた。それが有田沙耶という人の生き方であつて、ハルユキにどうこう言えることではないのだ。

階数表示が23を示すと同時に、エレベータの扉が開いた。

無人の共用廊下に出ると、右へと歩き出す。角を一回曲がり、自室のドアが視界に入った時、その前に小さな人影を見つけてもハルユキはなぜかあまり驚かなかった。

たぶん、意識下では気付いていたのだろう。さつき環七通りで聞こえた音が、エネミーの吠え声などではなく、大型エレクトリックバイクの走行音であることに。

無言で近づくハルユキに気づき、人影はひょいと立ち上がった。頭の両脇で結わえた赤毛を一振りして、ニヤリと笑いながら言う。

「なんだよ、ナナナナンデココニ！ とか言わねーの？」

笑みを返しながら、ハルユキは答えた。

「そういつもいつも驚いてられないよ。何となく、君がここに来てるような気がしてたしね、ニコ」

それを聞いた上月由仁子——二代目赤の王スカーレット・レインは、少し照れたような顔で小さな唇を尖らせた。

「ちっ、さすがにそろそろ行動が読まれるか。次はもうちっど登場方法を工夫しねーとな……」

ペランダの窓プチ破って飛び込んでくるっつーのはどうだ」

「や、やややめて！ 後で死ぬほど怒られるの僕なんだよ！」

ハルユキが慌てて叫ぶと、ニコは満足そうにもう一度笑い、突然両手をくるりと体の後ろに回した。

「あはは、うそうそー あたしがそんなコトするわけないじゃない、おにーいちゃん」
予期せぬ天使モードに脳を一撃され、よろめきそうになるのを危うく踏み留まる。

「そ……それで、今日は、いつたい、なんの……」

するとニコは無垢なスマイルを浮かべたまま、背負っていた大きめのリュックをよいしょと揺すってみせた。

「決まってるじゃないー 今日は、ひさびさの、お泊まり会だよっ！」

……べつに泊まりにくるのは構わないし、いつでも歓迎だけど、でもできれば事前にメールの一本くらい入れて貰えろととっても助かるんだけどなあ。それにひさびさって言うけど、前に泊まっていったのって確かたったの八日前だったような。

などともご言いながらニコをリビングルームに案内したハルユキは、キッチン冷蔵庫を覗いてから大声で訊ねた。

「ニコ、牛乳とダレーブフルーツジュースとウーロン茶と炭酸水とミルタどれがいいー？」

途端、ノーマルモードの怒鳴り声が響く。

「おいコラ、なんで牛乳を二回言った！ あれか、あたしに育てってか？ そんなでレイカーみたくなれつつーのか？」

「それは牛乳飲んでも無理だと思ふよ……」

「ハルユキてめえいまなんつたー でもせつかくだから牛乳くださいー」

「別に何もー そして了解ー」

冷蔵庫から化学強化ガラス製の一リットル入りボトルを出し、牛乳を二つのグラスに注ぐ。ついでに山形から送られてきたばかりの大粒のさくらんぼをざっと洗い、ガラス鉢に盛って、小皿二枚と一緒に運ぶ。

ダイニングテーブルにトレイを置いた途端、ニコの膨れっ面は輝くような笑顔へと変化した。

「おー、さくらんぼじゃん！ しかも超でっかい！」

「言ってなかったっけ、お祖父ちゃんちが山形でさくらんぼ農家やってるんだ。いまちようどシーズンだから、この時期は毎年いっぱい届くんだよ」

「毎年いっぱい？ くー、そんなことなら去年も来るんだった！」

「去年の七月は、僕バーストリンカーになってないし……」

「んなこと関係ねえー ていうか……食べていい？」

「あ、どうぞどうぞ」

ハルユキがガラス鉢をテーブルの真ん中まで押しやると、ニコは嬉しそうに大粒の佐藤錦をひとつ摘み、「いただきますーすー」と叫んでから口に入れた。ぶちつといい音をさせて噛むや、至福の笑みを浮かべる。

「……ニコがそんなにさくらんぼ好きだとは知らなかったなあ」

自分も一粒頬張りながらそうコメントしたハルユキに、ニコは小皿にさくらんぼと種を出してから答えた。

「いちこの次に好きだって言ってなかったっけ。チェリー・ルークと最初に向こうで会った時なんか、そっちがいいからアバター取り替えろつつって困らせたモンさ」

「そっか……。言われてみると、ニコってどっかさくらんぼっぽいよね」

何の気なしにそう答えながら、正面に座るニコを眺める。

ダータダレーのタンクトップに赤のボートネックTシャツを重ね着して、下はびったりしたカットジーンズ。細い体つきと見事な赤毛がさくらんぼっぽいのかなあ……などと考えてから、ようやく相手が頭だけでなく、顔まで真っ赤にしていることに気付く。

「あ、あ、あのなあ、いきなりそーゆーハズカシイこと言うんじゃねーよー」

「へ？　べ、べつに、変な意味とかじゃなくて」

「ったりめーだ！　……でも、まあ、ハルユキがそう言うなら、そーゆーことにしといてやらあ」

顔を赤くしたままぶいっとそっぽを向き、さくらんぼを二粒まとめて頬張る。

何が（そーゆーこと）なのか解らないけど、でも今日さくらんぼが届いててよかったなあ。と思いつつ、ハルユキが牛乳を一口飲んだ、その時だった。

さんこーん、とチャイムの音が響き、視界に來客を告げる小さなウインドウが表示された。反射的に持ち上げた手を、なぜか空中で止めてしまう。

ある種の手感がひやりと背中を撫でたのだ。強いて言うなれば、ジェットコースターが登攀から急降下に転じる寸前の、期待と恐怖が入り混じった浮遊感。

幸い、ニコはさくらんぼに夢中で気付いていない。ごくりと喉を鳴らしてから、応答ボタンに触れる。

ウインドウに、一階オートロツタのカメラ映像が表示される。そこに映し出されているのは、約二十分前に環七を走り去っていったはずの、黒雪姫の笑顔だった。ハルユキは椅子の上で体を九十度回転させ、ニコに向けた背中を丸めて小声で訊ねる。

「せつ、せせせせ先輩？ どじどじどうしたんですか!?」

「いやなに、一度は自宅に帰ろうとしたんだが、そこはかたなく胸騒ぎがしてな。その理由を確かめるついでに、キミの試験勉強を手伝ってやろうと思って、戻ってきたんだ」

——黒の王の超感覚、恐るべし！

内心で戦慄しつつも、どうにか笑顔を作る。

「そもそもそれはどうも、ありがとうございます。えと……し、師匠は？」

「残念ながら、楓子は用事があってな。鴉さんと誰かさんによろしく、とのことだ」

——師匠の超感覚も、恐るべし。

再びぶるりと身を震わせてから、ハルユキは意を決して解除ボタンを押した。

「そ、それじゃ、どうぞ上がつてきて下さい」

「ありがとうございます。では一分後に」

ウインドウが消えると、ハルユキはゆっくり体の向きを戻した。

さすがにニコももうやりとりに気付いていて、指先でさくらんぼの軸をくるくる回しながらじとじとした視線を送ってくる。

「ロータス、じゃなくて黒雪かよ？」

「う、うん、よく解ったね」

「その顔見りや解るよ。まったく、ビビってたんだか喜んでんだか」

ふんと鼻を鳴らしてから、ニコは椅子に背中を預けた。

「しーやーねえ、残りのさくらんぼはアイツにとっというてやるか」

きつちり一分後に玄關のチャイムを鳴らした黒雪姫は、リビングでニコと対面するや、にやりと剣呑な笑みを浮かべた。

「やはりな。こんなことではないかと思つた」

日曜日なので、黒雪姫も私服だ。黒地に白い花柄のレイヤードチュニツクに、五分丈のレギンス。ノースリーブの肩が眩しいが、露貫する余裕もなく、ハルユキは椅子を動めた。

「どうぞ、座ってください。飲み物持ってきますんで……えと、先輩は何を」

「牛乳だよな、もちろん」

ニヤニヤしながらニコが言うのと、黒雪姫はぴくりと眉を動かす。

「嫌いではないが、なんでもちろんなんだ」

「あんたもまだまだ育つ余地がありそうだからさ」

「ど、どこを見て言っているんだ！ 私は自分の成長ステータスに不満はない！」

「ほー。意図的な軽量化ってわけか」

「お、お前も人のこと言えないだろうが！」

「あたしはこれからまだまだ成長するしな」

「ふん、三年後に焦つても遅いんだからな」

「やっぱ焦つてんじやねーか」

「焦ってない！」

二人のやりとりをハラハラしながら聞いていたハルユキは、どうにか隙を見つけて割り込んだ。

「で、せ、先輩は何を」

じろりとハルユキを睨み、黒雪姫は言った。

「牛乳を顧む」

「り、了解です」

しゅばっとキツチンに退避し、詰めていた息をはふーと吐き出す。

ニコと黒雪姫が有田家で鉢合わせするのはこれが初めてではないが——というか、半年前にニコがハルユキのハトコを名乗って潜入してきた時もこんな展開になった記憶があるが、この緊迫感を受け流せるようには当分なれそうもない。

三つ目のグラスに牛乳を注ぎ、新しい小皿と一緒に運ぶ。なぜかニコの隣に座っている黒雪姫の前にグラスを置き、卓上のさくらんぼを勧める。

「どうぞ、よかったら先輩も食べて下さい。これ、僕のお祖父ちゃんちで作ってるさくらんぼなんです」

「ほう、見事な大粒だな。頂きます」

黒雪姫もさくらんぼは嫌いではなかったらしく、嬉しそうに手を伸ばした。一粒食べ終わると、にっこりと微笑む。

「とてもおいしい。品種は何なのかな？」

「昔ながらの佐藤錦ですね。最近はもっと甘いのか、すごく大粒になるのか、遺伝子改良

された新品種がたくさんあるんですけど、お祖父ちゃんとこはずっとこれをメインに作ってるんです」

「そうか……行ってみたいな、キミのお祖父さんのきくらんぼ畑に」

「いいですよ、何なら夏休みにでも……」

そう答えてしまってから、慌てて付け加える。

「あ、で、でも、山形県の東根市ですから、日帰りは無理ですね」

「ン、私は大丈夫だぞ。先方の……迷惑でさえなければ、一泊でも二泊でも三泊でも」

「め、迷惑なんてそんなことぜんぜんないです。むしろお祖父ちゃんもお祖母ちゃんもすごく喜ぶと思います」

「では、お言葉に甘えてしまおうかな」

「ぜひ！ 木からもぎたてのきくらんぼは、物凄くおいしいですよー」

とハルユキが言った途端、がたん！ と大きな音がした。しばらく静かにしていたニコが、椅子ごと前に出たのだ。

「あたしも行く」

「へ？」

「あたしも行きたーい！ もぎたてのきくらんぼ食ーべーたーいー！」

天使モードなのかノーマルモードなのか判別の難しい口調で喚くニコの頭に、隣の黒雪姫が



ほんと手を載せた。

「ニコ、もう子供じゃないだろう？　こういう時は、何て言えばいいのかな？」

「で、てめえ黒雪、自分のじーちゃんちでもねーくせに……」

悔しそうに歯ざしりしてから、ニコはハルユキに向き直ると、右手を載せられたままの頭を深々と下げた。

「ハルユキ、頼む……みます！　あたしも連れててってくれ……ださい！」

「そ、そんなことしなくてももちろんOKだよ、お祖父ちゃんち大きいから何人でも泊まれるし。建物ほちよっと、いやだいぶ古いけど……」

「ほ、ほんとかな？　やった!!」

躍り上がるように体を起こすと、頭に乗っかる黒雪姫の右手をべしっと払い落とす。

「よし、夏休みだなー　もうあたしの心のスケジューラにセットしちったからな、あとから取り消しとかナシだかなー！」

「ひ、日付はこれから向こうとも相談しないと……」

「わーってるよ、でも早めがいいな！　あ、だけど、うーん……」

不意にニコが口ごもったので、ハルユキはばちくりと瞬きした。するとニコは、口許の笑みをはんの少し苦そうなものに変える。

「いや、ただ、ちよっと思ったのさ……。どうせなら、もぎたてのさくらんばを食べる前に、

「奴らと決着をつけちまいてーなって」

「……そうだな。ぜひそうしたいものだ……」

黒雪姫も、深々と頷く。

奴らとは、もちろん加速研究会——白のレギオン（オシラトリ・ユニヴァース）のことだ。今日の七王会議では、ニコが提案した七レギオン合同攻撃方針が採択された。だがそれは、研究会の本拠地が確たる証拠によって明示されない限り発動しない。

「……あの」

残り少なくなったださくらんぼを指先にぶら下げたまま、ハルユキは意識を切り替えて二人の王たちに問いかけた。

「青の王は、誰かが本拠地の情報を持ってきたら、偵察隊を派遣して現地のマッチングリストを調べるって言うてましたけど、それだけじゃ、エテルナ女子学院がある（港区第三エリア）が研究会の拠点エリアだとは確認できないですよね……」

「その通りだな」

黒雪姫が、水滴を指したミルクのグラスに手を伸ばしながら頷く。

「研究会の奴らは全員がオシラトリのメンバーだろうし、そして同時に港区全域がオシラトリの領土だからな。支配レギオン特権で、奴らの名前は通常のマッチングリストには出てこないはずだ……」

「じゃあ……証拠を示すには、どうすれば……」

ハルユキが軽く唇を噛んだ、その時。

椅子の上で居住まいを正したニコの、真剣味を増した声が響いた。

「その前に、いっこ謝らせてくれ」

「え……？」

「つか、このために来たようなモンなんだけども。ハルユキ……それに黒雪、今日の会議で、事前の相談もなしに突っ走っちゃって悪かった」

ツインテールをびよんと揺らして、ニコはテーブルに深く頭を下げた。

基本的に察しの悪いハルユキにも、ニコが何のことを言っているのかは解った。会議の場で、加速研究会への合同集中攻撃を提案した件だ。

確かに、少し唐突な印象はあった。しかし結果としてアイボリー・タワーと白のレギオンにそれなりの圧力をかけることには成功したはずなので、何も改まって謝罪などする必要はないと思えるのだが。

同じことを黒雪姫も感じたようで、淡い苦笑を浮かべながらニコの右肩をぽんと叩いた。

「そう畏まらなくてもいいさ。ニコが言い出さなかったら、私が似たような提案をしていたしな……ただまあ、事前のひとつと言って貰えば、もつとろまぐ連携できたかもしれないとは思うが」

「そこなんだよ」

顔を上げたニコは、厳しい表情のままちらりと窓の外を見やった。

「……正直に言うぜ。今日の七王会議に関して、事前にそっちと相談できなかったのは、うちの内部でもまだ意見が割れてるからだ」

「割れてる……？」

驚き返して咬くハルユキを、ニコはさすが王と思わせる迫力を宿した瞳で見返してきた。

「そうだ。簡単に言えば、これ以上ネガ・ネビュラスと関係を深めるべきじゃねえって主張するメンバーが、いや幹部がいるんだ。合同攻撃の件だけは、会議の直前にどうにか説得できたんだけどな」

「幹部、っていうと……バドさん級の……？」

「ああ。バドと同格の、《三級士》の残り二人がな……。言っとくけど、二人とも、あたしやプロミのことはすげえ大事にしてくれてる。だからこそ、なのかしんねーけどな……二人は、いまネガビュと無期限停戦協定を結んでることだけでも、プロミの立場を危うくしてるって思ってるんだ。そりゃまあ、あんたらは他の五レギオンと正面切ってケンカしてるからな。そのうちプロミにとばっちりが来るんじゃないかって思う気持ちも、レギマスとしては理解できないもねえ」

「なるほど……。それは、二人の懸念ももつともだな。レディオあたりが、いつ我々との停戦

協定に目をつけて、六大レギオンの相互不可侵条約から脱退しろと言ひ出してもおかしくない状況ではあるからな」

「冷静にそう言われてもなあ」

ニコは苦笑すると、椅子の上であぐらをかき、組いくるぶしの上に両手を乗せた。その格好でしばらく黙り込んでいたが、突然どこかぶつさらばうな口調で言う。

「実際のところ、あたしとしちゃ、もうウチとネガビュは一蓮托生くれーの気持ちでいる」

「え……」

眼を丸くするハルユキと一瞬視線を合わせるや、なぜかぶいっと横を向き、いっそう早口になつてまくし立てる。

「だってそうだろ。もし五レギオンがネガビュを総攻撃しようとしたら、そんな時はウチが領土にしてる中野第一がジャマなはずなんだ。でも、明け渡せつて言われてハイハイ応じてるようじゃ、レギオンの看板掲げてる意味ねーしな。結局、そっちと本格的な同盟組んで一緒に戦うしかねーんだよ」

ねーのかな？ とハルユキは内心で考えたが、黒雪姫は実際に口に出して言った。

「いや、もう一つ選択肢があるだろう。五レギオンと同盟を組んで、我々を攻撃するという。それなら、中野第一の支配権を返上する必要もないはずだ」

「……いや、それはできねーよ」

飲み干し、口許を左手の甲でぐいっと拭う。

確かに、いまニコが住んでいる練馬区（のうま区）の全寮制学校と、杉並区（すぎなみ区）の梅郷中はそれほど遠くない。バスを使えば片道二十分程度だろう。しかし、ニコの学校は小中併設のはずだ。他の中学校に進むなら、寮を出なくてはならないのではないだろうか。

そもそも、なにゆえ梅郷中に？ 一応進学校ではあるが、同レベルの中学校なら練馬区にもあるだろう。もしその理由がハルユキやチエリ、タカムと同じ学校に通いたいからだとすれば素直に嬉しいが、同時にニコは——誇り高い赤の王は、そんな心情だけで自分の進路を決めなような気もする。

というように幾つもの疑問を口にしていいのかどうか、ハルユキは迷った。

しかしニコは、全てお見通しだと言わんばかりにハルユキを睨むと、ふうっと溜息をついてから囁き始めた。

「話すとなげーんだけども……。あたしが通ってる『遺棄児童総合保護育成学校』でそこにはちよっとした奨学制度があるんだよ。成績上位の生徒数人に、外部の中学校に進学する機会を与える、つつう……」

「成績上位？」と黒雪姫。

「生徒数人？」とハルユキ。

ニコは一瞬ツインテールをゆらりと連立てかけたが、ふんと鼻を鳴らしただけで表情を元

戻した。

「おう。言っとくけど《加速》でインチキしたわけじゃねーからな。……んで、まあ、今年の枠にあたしも入っててさ。そろそろ、どうするか決めなきゃなんねーんだよ。外部進学やめて育成学校の中学部に行くか、それともどっか外の学校に進むか。そんなの簡単に決めらんねーからバドに相談したらさ、あいつ、一秒考えただけで言っただよな……。なら梅郷中に行けばいい、って」

「ば、バドさんが勧めたの？」

「ああ。先週、そっちの文化祭を見て、色々考えるとこがあったみたいです。中学のうちからあれだけ生徒の自主性に任せてるとこはそうそうないつつてたな」

「生徒の自主性……梅郷中が……？」

ニコの言葉に、ハルユキは大きく首を傾げる。

もちろん他の学校と比べたことではないが、梅郷中がことさらに自由な校風だという印象はない。宿題はたくさん出るし、生徒が何か悪さをすればすぐに管理部の職員が飛んでくる。ダスタ・テイカーこと能美征二が、ハルユキを陥れるべく女子シャワー室に小型カメラを隠した時など、体育館全体に立ち入り禁止の緊急告知が出て大騒ぎになったものだ。

しかし、途惑うハルユキの向かい側で、黒雪姫は表情を変えずに頷いた。

「ま、そこが我が校最大の利点、もとい美点だろうな。ハルユキ君は実感できないようだが、

梅郷中ほどニューロリンカー及びローカルネットを自由に使える学校はそうそうないんだぞ。校内でのフルダイブを禁じている学校もザラにあるからな」

「ちなみにうちの中学部も全面禁止。バドはそのせいでだいぶ苦勞したらしいぜ」と付け足したニコの顔を見ながら、ははあと頷く。

「つまり、フルダイブ禁止の学校だと、バーストリンカーとして色々面倒だから……？」

「ちげーよ！ いやそれも理由のいっこだけど、すげー小さいやつだよ！」

大声で叫んでから、ニコは少し照れくさそうな顔になって続けた。

「なんつーか、これはあたしも感じたことなんだけど、梅郷中ってどっか雰囲気（ふんいき）がユルいんだよな。これは裏めてんだぜ？ ほら、あたし、ハルユキのリアルを割るために杉並の中学校をあちこち見学しただろ。そんな時にも思ったんだ。私立の進学校ってどこも学校ン中がびりびりしてるのに、梅郷中はそういうのあんまりないな、って」

「その理由はきつと、生徒だけの遊戯場所があるからだろうな」

黒雪姫の言葉に、ハルユキははっと眼を見開いた。

今度ばかりは、意味するところがすぐに理解できた。一年生の頃、ハルユキは、休み時間になるたびにそこへ逃げ込んでいたからだ。

「学内ローカルネット……ですね。でも、他の中学校にだって、学内ネットくらいあるんじゃない？」

「あるだろうが、そこに生徒用のVRスペースを設けている学校は少ない。梅郷中は経営母体が民間企業だからな、ニューロリンカー活用教育のモデルケースとしてデータを収集しているようだ。ま、そんな裏事情はどうあれ、自由なアバターで喋りやゲームができるあの空間が、生徒の憩いの場になっていることは間違いないな」

「そっか……。確かにローカルネットじゃ、みんな羽を伸ばして楽しそうにしていますもんね。僕は最近、ちよっとご無沙汰ですけど……」

「それはキミが、ローカルネットにとって代わる場所を見つけたからじゃないか？ 加速世界という、な」

微笑とともに指摘され、確かにそうだと頷く。もしバーストリンカーになっていなければ、たとえば寛谷たちのイジメがなくなっても、ハルユキはいまも昼休みはあの場所へと逃げ込んでいたに違いない。

「……そういう意味じゃ、僕にとっての加速世界は、現実世界から逃避するためのシエルターなんでしょっか……」

その返事に答えたのはニコだった。

「ハルユキだけじゃねーよ。あたしや黒雪、他の全てのバーストリンカーにとってもそうさ。でも、それだけじゃない。あたしたちはあの場所で、逃げずに前へ進むための勇気を見つけることだってできる。外から与えられるんじゃないで、自分の中にな。だから、たとえばつかボ

イント全損して、ブレイン・バースト・プログラムも、加速の力も、自分がバーストリンカーだったっていう記憶さえもなくしちゃっても、心の中に残るものはきつとある。あたしはそう思うよ」

「……………ニコ」

思わぬ言葉に、胸を衝かれるような感覚に襲われながら、ハルユキは二つ年下の友達の名前を呼んだ。

言いたいことはたくさんあったが、どれも簡単には言葉にできなかった。繰り返して唇を噛み締めるハルユキを見て、ニコはにこりと、年相応の幼さを感じさせる笑みを浮かべた。

「文化祭の時も同じこと言っただろ……あたしはずっと、全損の恐怖に怯えてきた。オリジネーターでも、純色でもないあたしは、きつといつか誰かに狩られちゃうだろう、ってな。……………でも、黒雪が先代の……………レッド・ライダーの言葉を伝えてくれたろ？ あんときに思った、いや思い知ったんだ。あたしはスゲー小さかったな、ってさ」

ふと気付くと、時刻はいつの間にか午後五時を過ぎて、雨の窓から差し込んでくる日差しの色はかなり濃くなっている。ガラス鉢に残るさくらんぼの表面に宿った水滴が、陽光を受けてきらきらと輝く。

「あたしは……………自分のことばかりだった」

零れ落ちたニコの聲が、水滴たちを小さく震わせた。

「あたしがしつかりしてねーと領土を取られちまうとか、レギオンメンバーが抜けちまうとか、そんなことばかり考えて自分の弱さとか恐れをひた隠しにしてきた。けどそれって、ほんとにほんとのところでは仲間を信じてねーってことなんだよな。……先代がさ、あとは任せたって言ってくれたろ？ そんなふうに、誰かを丸ごと信じて自分の抱えたもんを預けられるのが、きつと本物の強さなんだよな……」

「……………ニコ…………」

もう一度咳いてから、ハルユキは大きく息を吸い、言った。

「レギオンマスターが弱音を吐いちゃいけないなんてことないよ。辛い時や苦しい時は仲間を頼ればいいんだ。マスターだとか、王だとかいう以前に、みんな同じバーストリンカーなんだからさ。先輩なんて、いままでも何度も僕の前で泣い」

ふみつ。

テーブルの下でつま先を容赦なく圧迫されたハルユキが沈黙すると、代わりに黒雪姫が口を開いた。

「全損は誰だって怖いさ。私など、王運中の集中攻撃を恐れるあまり、二年間も外ではグロバル接続しなかったほどだ。レギオンを解散し、レベル10到達も諦めて、守る物などもう何も残っていなかったはずなのに……それでも私はバーストリンカーであることに随分しがみついていたんだよ。いまにして思えば、何が私をそうさせていたのかさえ思い出せないが……………」

ああ、いや、そうか………」

自分の言葉から何かに気付いたように、黒雪姫は淡い笑みを浮かべた。

「もしかしたら、それもまた梅郷中ローカルネットのおかげだったのかもな。あの小さな仮想世界で待ち続けていれば、いつかきつと誰かが現れて、私を深い暗闇から引き上げてくれるだろうと……」。——そしてその予感はずしかった」

左足のつま先を軽く踏まれたまま、黒い瞳でまっすぐに見据えられ、ハルユキは面映ゆさのあまり首を縮めた。しかし剣の主の視線から逃れることはせず、黙って受け止め続ける。

「あのなあ、今日はあたしが先客なんだから——いいよ、あんたらが見つめ合ってる隙に、残りのさくらんぼは全部いたたく！」

ニコが呆れ混じりの声で叫び、ガラス鉢を引き寄せようとした途端、黒雪姫はあっさりハルユキを精神的、物理的に解放して自分も手を伸ばした。

「おい、全部はずるいぞ！」

幾つか残っていたさくらんぼは瞬時に消滅し、牛乳のグラスも空になる。

ふうっと息を吐いたニコは、ダイニンダチュアの背もたれに深くもたれかかると、満足そうに言った。

「ごちそうさま。パドにも食べさせてやりたかったな……あいつ、限定メニューのフレッシュチェリータルトにのっける用の、おいしいさくらんぼ探してるから」

「そっか。じゃあ、明日帰る時、少しおみやげに持っていてよ」

「いいのか!? わりーな、ありがとう」

体を起こし、べこりと頭を下げてから、穏やかな表情になって続ける。

「……バドが退学先にあんたらのトコを動めてくれた理由だけども。もちろんローカルネットの機能が充実してるとか、文化祭がすげー楽しかったからとかそういうのもあるんだろけど……なんつうか、あいつ、もっと《先》を見てる気がするんだよね。現実世界のあたしと、加速世界のあたしがこれからどうなりたいのか……そういうことを、三年かけてちゃんと考えるために梅郷中に行くのがいいと思ってるんじゃないかって、まあ、これはあたしの想像なんだけども」

ニコの言葉は、抽象的すぎて、ハルユキにはすぐには理解できなかった。

現実世界のこれから、とは進路のことだろうか。いま中学二年のハルユキだが、正直、進路について考えていることはたったひとつだけだ。しかも、黒雪姫と同じ高校に行きたいという、少しばかり主体性と実現性に欠ける希望である。

加速世界でならば、もう少しははっきりした目標がある。加速研究会と白のレギオンを倒して、帝城と《八神の社》も攻略して、青、緑、黄、紫の四王との決戦に挑むのだ。しかしこれも、考えてみれば《レベル10を目指す》という黒雪姫の背中を追いかけているだけなのかもしれない。

——でも、それでいい。僕は先輩と一緒にどこまでも行かつて決めたんだから。

今度はハルユキから黒雪姫に眼を向けると、漆黒の瞳が、全てを包み込むような深い輝きで視線を受け止める。再び見つめ合いモードが発動するす前、ニコがわざとらしい咳払いで場の雰囲気（雰囲気）をリセットする。

「ともかく！ まあ、まだ決定事項ってわけじゃねーから、そういう可能性もあるくれーの気持ちでいてくれればいいよ。もし本決まりになったら、協定のページョンアップが必要だから、そんな時は改めて幹部も集めて会議つづうことで」

すらすらとそう言われてしまうと、そんなに大騒ぎするほどのことじゃないのかな？ と思えてきてハルユキは「うん」と頷いてしまったが、さすがに黒雪姫は即答せず、しばし考える素振りを見せてから、上体ごとニコに向き直った。

「ニコ。お前はさっき、レギオンマスターの責任に触れたな。つまり……梅郷中に進学するという選択肢は、そのことと無関係ではない、と思っただいいんだな？」

今度こそ、ハルユキには完全に理解不能な問いかけだった。

——確か先輩、会議の時にも、緑の王と不思議な話をしてたなあ……。

とハルユキが考えかけたのもつかの間、ニコはぐっと力強く頷いた。

「ああ、そう受け取ってくれて構わねえ」

「解った。では私もそのつもりでいる。どちらがどうする、ということについてはいずれまた

「話そう」

顔を返した黒雪姫は、ハルユキを見ると軽く微笑んだ。

「ハルユキ君、すまないが、たくさん喋ったので喉が渇いてしまった。お茶など淹れて買える綺麗な」

「おにーちゃん、あたしミルクティー！ あんまり苦くないやつねー」

いきなり天使モードに切り替わったニコの無邪な笑顔に、なんだか大事なことを聞きそびれたような気分を味わいながらも、ハルユキは立ち上がった。

「先輩も紅茶でもいいですか？」

「うん、私もニコと同じのでもいい。おっと、砂糖はいらないからな」

「……あたしもいらないよ！」

「小学生は無理しなくていいぞ」

「い、いらないうつつてんだろチメエー」

という二人のやり取りを聞きながら、ハルユキは空になったガラス鉢と三つのグラスをトレイに載せた。続いて、さくらんぼの種と柄が積み重なった小皿を集めようとした、その時。

「あ、そうだ。なあハルユキ、この種って、植木鉢とかに埋めたら芽が出んのか？」

とニコに訊かれ、ハルユキは微妙な角度で頷いた。

「うーん、僕も昔やってみようとして色々調べたり試したりしたんだけど……結論から言うと、

「不可能じゃないけどかなり難しいよ」

「はう？　なら、お祖父さんのところでは、どうやってさくらんぼの樹を殖やしているんだい？」

黒雪姫も興味深そうに訊いてくるので、

「ちよっと待っててください、先にお茶淹れてきますから」

と答えてハルユキは小走りにキッチンに戻った。

冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターをケトルに注ぎ、高速沸騰モードに設定したIHコンロに載せる。急いでいるので茶葉ではなくティーバッグ、と言っても母親が愛飲しているお高いヤツをティーポットにセットし、お湯が沸く間に鉢とグラスを洗う。ナノテクノロジーを応用した超温水加工が施されている食器類は、軽く振るだけで水滴が切れるので、そのまま棚に戻す。

沸いたお湯をゆっくりポットに注ぎ、三人ぶんのカップ、ソーサー、スプーン、牛乳を満たしたミルクビッツチャーと、念のためにシュガーポットを手早く揃えてテーブルに戻る。

「お待たせしました」

と言いながらソーサーを並べ始めると、黒雪姫が笑顔でコメントした。

「ハルユキ君も、ずいぶんと家事の手際がよくなったじゃないか」

「え……そ、そうかな……。最近では、やれることは自分でやるようにしてるんですけど、ちゃんとした料理とかはまだぜんぜんですし……」

すると今度はニコがニヤリと笑う。

「けど、前にあんたらが作ってくれたカレーはけっこう美味かったぜ。パドも気に入ってたみたいだし」

「あの時は僕、じゃがいもの皮を剥いただけだよ……料理の核心部分はほとんどチュと四整宮さんが……」

「へえ。じゃあ黒いのは何をやったのかなー」

「わ、私だってパブリカを切ったぞー！ どっかの遠隔型なみに赤いのをすばすばとなー！」
などというやりとりの間に紅茶の用意が整ったので、ハルユキは咳払いして二人の注意を引いた。

「えーと、それで、さくらんぼの種だけど……」

「あ、それぞれ。農家じゃどうやってんだ？」

「生産農家だと、苗木を買ってきたり、あとは接ぎ木ですね。食用さくらんぼの種は発芽率が悪いので……。でも、絶対不可能ってわけじゃないみたいです」

「ほう、コツがあるのかな？」

「そうですね……」

ハルユキは、テーブルに残してあった小皿から、黄褐色の種を一粒摘み上げた。

「僕が前に試したのは、この種をよく洗ってから、乾燥させないように冷蔵庫でしばらく保存

して、根が出てきたやつを土に植える……つていうやり方なんですけど、根が出たのもほんの少少で、それを植えても発芽までいきませんでした。もしかしたら、土が合わなかったのかもしれませんけど」

「ふうん。でも、根っこが出るとこまでは行つたわけだ」

そう言うのと、ニコは左の掌に右の掌をばちんと打ち付けた。

「よしやろう、いまやろう！」

「……………は？」

「うむ、即断即決はネガ・ネビュラスのモットーだからな」

「……………い、いやでも、冷蔵庫で保存まではウチでできますけど……………その後はどこに植えるんですか？」

「それはおいおい考えようじゃないか。まずは洗うんだつたな、ちよつと台所を借りるぞ」

バドさん並みのせっかちスキルを発動させた黒雪姫が、小皿を持って立ち上がるうとするので、ハルユキは慌てて押し留めた。

「あ、いえ、手で洗つたくらいじゃぬるぬるがちゃんと取れないんで……………お茶を飲んでからにしましょう」

「そうか。では、いただきます」

黒雪姫は、ルビー色の紅茶が注がれたティーカップにミルクを慎重な手つきで垂らすと、ゆ

つくりかき混ぜた。対照的に、ニコはミルタビッチャーから景氣よく注ぎ、ぐるりと一度かき回しただけで口に運ぶ。

自分は砂糖も入れた紅茶を一口飲んでから、ハルユキは改めて二人に訊ねた。

「それにしても、ニコも先輩も、なんで突然さくらんぼの栽培に興味を持ったんですか？」

「んなの決まってるだろー！ 樹が育ったらもぎたてのを食べ放題じゃん！」

「あ、あのねえ、もし芽が出てても苗を育てるのがまた難しいし、もしちゃんと育っても花が咲いて実^みになるまで五年とかかかるんだよ！」

「待とうじゃないか、五年くらい」

さちりと答える黒雪姫を、ハルユキは陡然^{トウゼン}と見やった。

「我々で……いや、レジオンのみんなで世話をすればいいさ。いつか実^みになるのを楽しみにしながら。そうだ、植える場所は、ホウの小屋の隣^{となり}がいいんじゃないかな。裏庭だが、あそこは日当たりがいいし」

「……………」

どう答えていいのか、しばしハルユキは迷った。

五年間。いまのハルユキには途方もなく長いと思える時間だ。五年後、ニコは十七歳に、ハルユキは十九歳に……そして黒雪姫は二十歳になっている。

その頃^頃まで、パーストリンカーであり続けられるのか。加速世界での対戦に、いまと同じよ

うに心を燃やしていられるのか。そうであって欲しいと思うけれど、絶対の確信は持てない。もしかしたらブレイン・バーストというゲームそのものがクリアされて、全バーストランカーが加速世界の記憶をなくしてしまっているのかもしれない。

不意に、少し前にニコが口にした言葉が、耳の奥で甦った。

心の中に残るものはきつとある。あたしはそう思うよ。

——そうだ。たとえブレイン・バーストと、それにまつわる記憶を奪われても……現実世界で得たものまでが全部なくなるわけじゃない。

先輩が、僕をいじめの泥沼から救い出してくれたこと。

ニコが、親戚に化けて家に潜り込んできたこと。

チユやタタ、楓子師匠や四壁宮さん、バドさん、カレンさん、輪さん……みんなといろんなところに行つて、たくさん笑ったこと。それらの記憶は、心のいちばん深いところに、永遠に残り続ける。

土に根を張り、日差しを受けて枝葉を広げる、さくらんぼの若木のように。

「……そうですね、ホウの家の隣なら、僕が毎日面倒見られますし」

黒雪姫に頷きかけてから、ハルユキはニコに眼を向け、続けた。

「ニコ、来年になったら梅郷中においでよ。それで、飼育委員会に入ろう。そしたらニコも、ホウとさくらんぼの樹の世話ができるからさ」

するとニコは、自分で言い出したことなのに、驚いたように両眼を見開いた。

すぐにそっぽを向き、長い睫毛を何度も瞬かせながら、いつもの口調ではあるがほんの少しだけ震えを帯びた声で言い返してくる。

「あのなあ、まだ本決まりじゃねーつつつたる。それにあたし、放課後はパドの店の手伝いがあったかな。もしそっちのガッコ行くことになったら委員会入ってやつてもいいけど、あんまり長い時間は無理だかなー」

それを聞いた黒雪姫が、声を出さずに微笑み、左手でニコの背中をぼんと叩いた。

「ま、入学してくる可能性があるのなら、準備だけは早めにしておかないとな。というわけで——今日はこれからスーパードモードな勉強会だ！」

「え、ええええ!?」

とハルユキが叫び、振り向いたニコもすっかりいつもの調子で喚いた。

「おい、ちよつと待てよ黒雪、あたしや今日は、レトロゲーム大会のつもりで……」

「そうですよ先輩、先週仕入れたダイブキツクしかできない格ゲーをですわ……」

「あのなあハルユキ君、少なくともキミはそんなことを言っていていられる状況ではないだろう！三日後はもう期末テストなんだぞー」

「……………そ、そうでした……」

項垂れるハルユキの前で、黒雪姫は音高く両手を打ち合わせると言った。

「では、まずさくらんばの種を洗ってしまおうじゃないか。スポンジなどあると便利そうだなー」

「……………はい、持ってきます……………」

ハルユキは立ち上がり、キッチンスポンジを求めて台所へと嫁立った。

「はふほわあああ………むぐ」

たつぷり五秒以上もかけて長いあくびをしてから、ハルユキは仮想デスタトップ右下の時計を見やった。

七月八日月曜日、午前六時五十分。天気は薄曇りで、早くも気温、湿度ともに急上昇しつつある。目の前の環七通りを駅方向に歩いていく人々の足取りも、どことなく重い。

ハルユキが、いつもより一時間も早く家を出た理由は、いったん自宅に戻ってから登校する黒雪姫とニコを見送ったからだ。二人は数分前にバスとタクシーでそれぞれ北と南に走り去り、突発的なお泊まり会改めスーパード勉強会はお開きとなったが、せっかく黒雪姫が教えてくれるのだからと深夜二時ごろまでがんばってしまったせいで多少の寝不足感はない。

見送りに出るならそのまま学校に行ってしまおうと登校の準備をしていたのだが、もう一度家に戻って三十分くらい寝ておこうか、いやいやそんな焼け石に水だとしてばし煩悶してから、二度寝の誘惑を断ち切って歩道を南に歩き始める。

これが火曜日ならば、恒例となったアッシュ・ローラーとの（朝対戦）があるのでばっちり目が醒めること請け合いなのだが、残念ながら今日は月曜日だ。ISSキットの精神干渉から

解放されたばかりの且下部輪の体調に配慮して先週はお休みにしたため、明日が久しぶりの朝対戦となる。

——確か、いつこ前の対戦で負けたのは僕だから、明日はアッシュさんがスターターだよな。あの時は、バイクごと砂に潜って僕の足の下からミサイル発射する作戦にやられちゃったんだ……次も（砂漠）ステージだったら要注意だなあ……。

などと考えながら、中央縦高架下の道を右に曲がろうとしたハルユキの背中を。

「お——っす！」

という威勢のいい声とともに、誰かがすばーんと叩いた。

「あいつて！」

驚き加減だった体を思い切り反らせつつ、ハルユキに対してこうもパワフルな挨拶をぶちかます唯一の人物の名前を、振り向く前から叫ぶ。

「な、何すんだよチユ！」

「しよぼくれた歩き方してるから、気合い入れてやったのよ！」

と胸を張るのは、予想通り倉嶋千百合だった。上はＴシャツ、下はジャージという格好で、大きめのスポーツバッグを斜め掛けにしている。

「……お前が朝から元氣すぎるんだよ……」

ぼそぼそ答えてから、幼稚園の横に並んで歩き始める。

陸上部の朝練に出るチユリが、毎朝これくらいの時間に登校していることをきっぱり忘れていたハルユキは、黒雲（クロクモ）たちと一緒にいる時に鉢合（ひしあ）わせしなくて良かった！ とこっそり安堵（あん堵）の息を吐いた。しかしその途端（とたん）、隣（とな）から質問（しつもん）が飛んでくる。

「ハル、今日何かあったっけ？」

「へっ？ な、何かって？」

「だって、いつもは予鈴（よる）ギリギリのくせに、なんでこんなに早いんだよ」

「お、オレだって、たまには早く出る時くらいあるよ」

「ふう〜〜〜ん」

という声は不意（ふい）にたっぶり、ちらりと盗み見た横顔（よこがほ）も猜疑心（さいぎしん）たっぶり。

意味もなくバツグを背負（せお）い直（ただ）し、ここは期末テストの話題（わだかま）で乗り切るか、それともその後に控えた陸上大会の話（はなし）がいいか、はたまた今週中（こんしゅうちゅう）と予報（よほう）されている梅雨（つゆ）明け（あけ）の話（はなし）を出すべきかと、いつしか厭気（えんき）の飛んだ頭（かぶ）で考えていると――。

助け船（たすけふね）は、まったく予想外（よそご）の所（ところ）から飛んできた。

バシイイイイッ！ と頭（かぶ）いっぱい（びっぴ）に響（ひび）いたのは、間違（まちが）いなく加速音（かそおん）。続いて視界（しがい）に、挑戦者（てんしんしや）現（あら）るのメッセーヂ（message）が出現（しゅげん）する。

――ら、乱入（らんにゅう）!? 月曜（げつよう）なのになんで!? まさか輪（りん）さんが曜日（よふ）を間違（まちが）えたの!? だとしても、時間が早（はや）すぎるような!?

意識の半分は混乱に見舞われつつも、もう半分は自動的に対戦モードに切り替わる。

火の粉舞い散る仮想の暗闇を落下したハルユキが、デュエルアバター（シルバー・クロウ）となって降り立ったのは、やけに弾力のある地面の上だった。

周囲を見回すと、道路も、建物も、四十五度傾いたスクウェア・バターンに覆われている。一つの正方形は八十センチほどもあり、それらが規則正しくこんもり盛り上がりつつある様は、まるで巨大なキルティングでできているかのよう——いや、それそのものだ。ここは自然系本属性の（緩衝）ステージ。あらゆる地形オブジェクトが分厚く丈夫なクッション材に包まれていて、容易には壊せないし激突ダメージも少ないレアステージである。すぐ近くの環七通りを走る車両まで、丸っこいぬいぐるみのような形をしている。

いまのところ、建物の上にギヤラリーの姿はない。まだ時間が早いのと、なぜか人気のある（アシュトロ戦）の曜日ではないせいだろう。

状況を確認したハルユキは、すかさず視界右上に浮かぶ対戦者の体力ゲージを注視した。輪が曜日を間違えたのでなければ、別れたばかりのニコが黒雪姫が何らかの理由で乱入してきたのではと思ったのだが、しかしそこに表示されているのは、まったく予想もしていなかったアバターネームだった。

【Chocolate Puppeter】。レベルは55。

「ち、チョコ……じやなくて、ショコラ・パペッター？」

ハルユキの驚愕を、真後ろで響いた声が増幅させた。

「シヨコちゃんか、どうして?」

「うわあ!」

慌てて飛びのくハルユキに、黄緑色の三角帽子を被った《時計の魔女》ことライム・ベルは、呆れたような視線を投げ掛けてくる。

「さっきまで隣にいたのに、なんでそんなに驚くのよ」

「い……いや、まさか、ギョラリリーに入ってるとは思わなくて……」

「お互い自動観戦登録してるんだから、入ってないほうが驚きでしょ。ていうかアンタこそ、領土内なのになんで乱入されてるのよ」

「いや、その……輪さん、じゃなくてアツシユさんからの乱入を拒否しちゃわないように、最近登校の時だけ乱入許可にして……」

「ふうふう……ん」

語尾はやたらと伸びたものの、幸いチユリはそれで納得してくれたらしく、再び視線を乱入者の体力ゲージへと戻した。

「レベルは4から5に上がってるけど……間違いないシヨコちゃんだよね。先々週、世田谷で会った……」

「うん……」

頷くが、それ以上は何も言えない。

シヨコラ・バベッターは、ハルユキとチユリが無制限中立フィールドの世田谷第二戦域を訪れた際に遭遇したバーストリンカーで、(フチ・バケ)という小規模レギオンのマスターである。

しかし当時、レギオンメンバーのミント・ミトンとプラム・フリッパーは、世田谷を根城とするマゼンタ・シザーの手でISSキットに感染させられてしまっていた。シヨコラまでをも感染させるべく襲来したマゼンタとハルユキは戦い、ハサミの技に苦戦しつつもどうにか撃退したのだ。

その後、ミントとプラムに寄生するISSキットもチユリのシトロロン・コールで浄化され、フチ・バケの三人は友情を取り戻したはずだ。なのに、どうしていま杉並に現れ、しかもハルユキに乱入してくるのか。

「……まさか、シヨコちゃん、ISSキットに……」

チユリの掠れ声に、ハルユキは強くかぶりを振った。

「そんなわけねーよ！ ISSキットは全滅したんだ。今更、新しい感染者が出るなんて有り得ないー」

叫びながら、視界下部に表示されるガイド・カーソルが指し示す南の方角を食い入るように見詰める。

戦術ステージの地面や建物は、オフホワイトやベージュ、ライトグレーにライトブラウンといった明るい色に統一されている。だから全身が焦茶色のシヨコラ・バベッターはよく目立つはずなのだが、いまのところ視界には捉えられない。

悉らく、この杉並第二戦域と、ブチ・バケの拠点である世田谷第二戦域との境界線近くから乱入してきたのだろう。だとすれば、高速移動能力を持たないはずのシヨコラが接触してくるまで、もうしばらくかかるはずだ。

「どうするの、クロウ？」

チユリの不安そうな問いかけに、ハルユキは大きく深呼吸してから答えた。

「ここであれこれ悩んでも仕方ない。どうするかは遭遇してから決める。もし本当にキットに感染しちゃってたら、なんとかして浄化する方法を考えよう。その時は、ベルにも協力してもらおうと思うから、心の準備だけはしといてくれ」

「……………うん、解った」

尚も不安そうなチユリに力強く頷きかけてから、ハルユキはすぐ近くにあった高製橋の橋脚に歩み寄った。巨人サイズのキルティンダに覆われたそれを、一発殴ってみる。

アバターの拳は分厚いタフシェン材に深々と埋まり込んだが、すぐにぼよんと弾き返されてしまった。合成レザーのような感度の表面には、ほとんど傷もついていない。

「こりゃ、地形破壊で必殺技ダメージ溜めるのは無理だな…………」

「あたしもこのスナージ見るの初めてだけど、聞いた話じゃ銃とか剣とかドリルでも壊せないらしいよ」

「うへ、ってことは物理攻撃はほとんど無効なのか」

とハルユキが応じ、それに対して何かを言おうとしたチユリの姿が、いきなり音もなくかき消えた。

回線切斷——ではない。ガイドカーソルも同時に消滅している。つまり、まだ遠くにいると思っていたシヨコラ・パベッターが十メートル以内に接近してきたため、ギヤラリーのライム・ベルは強制的にテレポートさせられたのだ。しかし、シヨコラはいつたいどこに――。

ハルユキが、ぐらりと周囲を見回したのとは同時に。

すぐ近くの環七通りを走っていたぬいぐるみバスの屋根から、小柄なシルエットが飛び降りてきた。

地面で激しくバウンドし、近くのビルにぶつかって再びバウンド、くるくる宙返りしてからハルユキの眼前に降り立つ。そんな派手なアクションをしても、ダメージはまったく受けていないようだ。

大きな前つばのあるボンネット型の帽子。四方に広がるフレアスカート。そして、艶やかなチョコレート色の装甲。シヨコラ・パベッターに間違いない。

「……………」

素早く身構えながら、ハルユキはシヨコラの胸部装甲を食い入るように凝視した。

もしISSキットに寄生されてしまったのなら、胸にあのおぞましい黒目玉が貼り付いているはずだ。しかし、シヨコラの装甲がもともとかなり暗い色なので、すぐにはキットの有無を確認できない。

眼を凝らしながら、じり、じりと前進するハルユキ。

その動きに反応したように、両手を構えるシヨコラ。

やはり精神干渉を受けているのか、と幽嘆みしかけた——その時。聴覚を、甲高い叫び声が貫いた。

「な……なんのつもりですの、この変態!!」

「へっ……へ、へんたい?」

ハルユキが慌てて視線を持ち上げると、左腕で胸元を隠したシヨコラが、右手の人差し指をびしっと突き付けてくる。

「わざわざこのわたくしが出向いて差し上げたというのに、会った途端にじろじろとどこを見ているのですか、いやらしい! 失望しましたわ、シルバー・タロウ!」

「なっ……ち、ちがつ……」

ハルユキは慌てて頭と両手をぶんぶん振ったが、どこか上の方から、更なる罵倒が降り注いでくる。

「そーだそーだ、エロいぞー！」

「これからはあ、シルバー・エロウと呼んであげましょねー」

そんな史上最悪の二つ名を押しつけようとするのはどこのどいつだと思線を持ち上げると、環七を挟んだビルの上に、三つの人影があった。

ハルユキから見えていちばん左に立っているのは、両手に大きな手袋をはめた、明るい水色のF型アバター。ブチ・バケのメンバー、ミント・ミトンだ。

真ん中には、手足に巨大なキヤンディーを嵌めたような形状のF型アバター。赤紫色の装甲からして、同じくブチ・バケ所属のプラム・フリッパードろう。そしてその右にはちやっかりタイム・ベルの姿もある。

「へ、姿態でもエロくもない！ 僕はただ、ショコがSSキットに感染しちやっただんじゃないかって心配して……」

「そんなわけじゃないですわ！ あと、その呼び方、ちよつと慣れ慣れしすぎますわよ！」
びしびしと指差しまくるショコラに、ハルユキは再び抗弁する。

「し、ショコがそう呼んでいいって言ったんじゃないか！」

「そ……それはそうですけど……」

「だいたい、そのアバターネーム、普通に読めば（ショコラ・バベッター）じゃなくて（チョコレート・バベッター）だと思っただけど！」

「う、うるさいですわねー ショコラのほうが可愛いしバベスターのほうが呼びやすいからですわ、なにか文句があるんですの?」

両腕を振り上げるショコラとそこまで言い合いを続けてしまってから、はっと我に返る。

起伏の少ないショコラの胸部落甲を改めて注視するが、ISSキットらしき物体は見当たらない。言動も、精神干渉を受けている様子はないようだ。

しかし、であるならば――。

「も、文句はないけど……ショコ、じゃあ、なんでいきなりこんな朝っぱらから僕に乱入を? 君たちだって、今日は学校でしょ?」

「それは……」

何かを言いかけたショコラは、いったん口を引き結んでから、改めてハルユキに右手の指を突き付けた。

「それは、私に勝ったら教えて差し上げますわ!」

「えっ、対戦するの?」

「あつたりまえですわー 手加減ナシで行きますわよ!」

人差し指を突き出していた右手を拳に握りながら、す、と重心を落とす。パンプスを履いた小さな両足が、深く地面の緩衝材に沈み――。

次の瞬間、ショコラは猛烈なスピードで突っ込んできた。



「うわっ！」

ハルユキは慌てて両腕を交差させ、ガード姿勢を取る。しかしショコラの小さな拳はガードをすり抜け、下あごにクリーンヒットする。

ガアーン!! という衝撃音を頭の芯で聞きながら、ハルユキは上体を仰け反らせた。懸命に体勢を戻そうとするが、それより早く、再びショコラが床のクッションを踏みつける。

次の攻撃は、初撃を上回る勢いの飛び膝蹴りだった。ハルユキはまったく反応できず、みぞおちをクリーンヒットされて吹き飛んだ。

背中から地面に落下し、クッションの弾力ではよーんと跳ね返る。ハルユキが浮いている間に素早く両合いを結めたショコラが、上から踵落としを浴びせてくる。

今度はどうにかガードしたが、またしても地面に叩き付けられる。起き上がり小法師の如く跳ね戻ったところに、ショコラの左回し蹴りが狙い澄ましたように襲いかかる。

「ハイイッ!!」

鋭い気合いとともに繰り出された蹴りは、ハルユキの右側頭部をしたたかに撃ち抜いた。視界に星屑を散らしながら、真横に吹っ飛ばす。

なんと四発も連続で喰らってしまっただが、地面に激突さえしなければ体勢を回復できる。いったん距離を取ってから反撃のチャンスを一

ぽよん。

とハルユキの左半身が、いつの間にかそこにあった中央線高架橋の橋脚を覆うキルティンダ・クツシヨンに埋まり込んだ。

激突のダメージはないが、有無を言わせぬ圧力によって勢いよく弾き返され。

「ハイヤアアッ!!」

見事なタイミングで放たれたシヨコラの右正拳突きが、目の前に迫った。

体力ゲージは、すでに三割近くも削れている。どこかで連続攻撃をブレイクしないと、このまま逆転不可能なところまで押し切られかねない。

シルバー・クロウより小さくて軽いシヨコラの打撃に、なぜこうも翻弄されてしまうのか。

それはシヨコラが、地面の反動を利用して蹴りや突きの威力と速度をブーストし、同時にハルユキの体勢を崩し続けているからだ。つまり彼女は、この戦術ステージでの戦い方を熟知しているのだ。

すでに必殺技ゲージはかなり溜まっているが、背中の翼を広げて空中へと逃れるよりも早くシヨコラの突きが届いてしまう。胸でのガードも、必殺技（ヘッド・バット）での迎撃も間に合わない。

肉迫するダークブラウンの拳を凝視しながら、必死に逆転の一手を模索する。ラツシュを止める有効な手段は、弱点への素早い一撃。しかし、たったの一回、しかも味方として戦ったシヨコラの弱点など――。

その利形、ハルユキの脳裏に、とある記憶が甦った。

無意識のうちに、口を限界まで開く。バイザーの下端がスライドし、露出したアバターの口で、シヨコラの拳を連え撃つ。

これが、シアン・バイルのような大型アバターの拳なら、アバター素体の顔面を痛撃され、体力ゲージがたつぷり減るだけで終わっただろう。

しかし、クロスガードをすり抜けるほど小さなシヨコラの拳は、ハルユキが限界まで開いた口にすぽっと入り込んだ。衝撃がほとんどなかったのは、シヨコラが直前で拳を引こうとしたからだろう。それを裏付けるように、甲高い悲鳴がステージいっぱいに響き渡った。

「ひゃああああああっ!!」

連続攻撃をストップしたシヨコラは、左手でハルユキの顔を押さえながら右拳を引き抜こうとするが、ここで離されたらまたラッシュが始まってしまう。ハルユキは無我夢中で自分の口から生えているシヨコラの右腕を掴み、体を揺って地面に引き倒す。

「な、な、何をしているんですの!? 対戦中にこんなの、反則ですわぁーっ!!」

「えええんあいつっていつあああいいー!」

手加減なしって言ったじゃないか、と言いつ返したつもりだったが、口にシヨコラの右手が詰まっているので不明瞭なもぐもぐ音にしかならない。そして、なんだか口中が甘い。というかおいしい。

「やあつ、べ、べろべろするなあ——っ!!」

シヨコラの悲鳴に、ギヤラリ—たちの叫び声が重なる。

「こら—っ、チヨコに何してるんだよ——っ!!」とミント・ミトン。

「うらやましい、じゃなくてするいですわあ——」とプラム・フリッパ。

「エロいぞクロウ——!!」とライム・ベル。

断じてエロくない、これは頭腦的な作戦なんだ、と自分に言い聞かせながら、ハルユキが尚も口をもぐもぐさせていると。

「んっ……も、もう許しませんわ……!」

ハルユキに押さえ込まれながらじたばたもがいていたシヨコラが、無事な左手を突き出し、叫んだ。

「——(カカオ・ファウンテン)!!」

指先からピンク色の光が降り注ぎ、すぐ近くの地面にチヨコレートの泉を湧き出させる。

「からの……(パベット・メイタ)!!」

泉からぬうつと出現した、細っこい体に丸っこい頭が載ったシンプルな形状のアバターは、シヨコラ・パベッターが生成した自動戦闘人形だ。

「このべろべろ野郎をやっつけなさい、チヨベット!」

シヨコラの命令を受けたチヨコレート・パベット略してチヨベットが走り出すのを見て、ハ

ルユキはやむなくショコラの右手を解放した。地面に倒れたままはおはあ言っている人形使いはとりあえず放置して、チョコベットのから片付けるべく立ち上がる。

このチョココ人形に単純な物理攻撃が効かないことは、以前の戦闘で学習している。弱点は熱もしくは凍結プラス打撃、もしくはは——食べてしまうこと。

ギヤラリが少なくて本当によかった！　と思いつつ、ハルユキはチョコベットのパンチを左腕でガードした。人形とは思えない強烈な一撃だが、ショコラと違ってクッションの弾力を利用していないのでどうにか耐えられる。動きが止まったチョコベットの右腕をすかさず掴み、露出したままの口で、

「あんぐー」

と拳を丸ごとかじり取る。

ご主人様の装甲ほどではないが、なかなかおいしい。そして驚いたことに、必殺技ゲージがわずかながら充填されていく。

「……………」

口のないチョコベットが、無言で少しずつ後退する。

「……………」

同じく無言のまま、ハルユキもじりじりと前に出る。

不意に、チョコベットが後ろを向いた。ダッシュしていく先にあるのは、チョコレート泉。

大きさが平減したものの、まだ熱茶色の液体はたっぷり残っている。

悉く、泉に入ると損傷が回復するのだろうかと思感したハルユキは、

「待てっ……」

と叫びながら、思い切り地面のタツションを踏んだ。すると予想外に強い反動でタツシュが加速され、チョコベットの追いついたのはいいが、勢い余って一緒にチョココの泉へと突っ込んでしまう。

どぼっ、という黏っこい感覚が全身を包む。口にも液体チョコレートが流れ込んでくるので、慌ててバイザーを閉じる。しばらくジタバタもがいてから、ようやく立ち上がる。

薄茶色に染まった視界の中央では、予想どおり右手が修復されたチョコベットが身構えるところだった。いいき、微らでも食べてやる！と決意しながらハルユキも構えたが、敵の様子がなんだかおかしい。攻撃態勢を取ったくせに、なぜかそのまま固まっている。

「……………」

ハルユキが首を傾げると、チョコベットも同じ方向に頭を倒す。

攻撃されない理由は、三秒後に判明した。ハルユキのべるべるアタツタから立ち直り、猛然とタツシュしてきたチョココが、急ブレーキを掛けるや叫んだのだ。

「ど……どうなってますのこれは!? どちらがわたくしのチョコベットですか?」

その言葉を聞いたハルユキは、反射的に自分の体を見下ろした。銀色に輝いていたシルバ

ー・タロウの装甲は、全身くまなくチョコレートでコーティングされて焦茶色に変わっている。そしてそうになると、丸い頭に細い体というフォルムは、チョコベットと大変よく似ているのだ。どうやらシヨコラだけでなく、オートで動くチョコベットも、自分そっくりのタロウを攻撃対象と認識できなくなったらしい。

「ず、ずるいですわよー！ さっきと正体を現しなさい！」

そう言われても、とシヨコラに叫び返しそうになってから、ハルニキはたと気付いた。

確かに少々ずるい気もするが、これはチャンスではあるまいか。もう少しだけ接近できれば、シルバー・タロウの必勝パターンに持ち込める。

チョコベットっぽい動きを意識しながら、ゆっくり体の向きを変える。チョココの泉から出て、すたすたとシヨコラに歩み寄る。

「えっ、そ、そこに止まちなさいチョコベット！」

命じられた途端、びたりと立ち止まる。

「………ということは、あちらがシルバー・タロウ………？」

シヨコラが、泉に残る本物のチョコベットに視線を向けた、その瞬間。

「こっちでした！」

叫びながら、シヨコラに飛びかかる。華奢なアバターを両手でがっちりホールドし、背中の翼を展開。地面の弾力も利用して、一気に離陸する。

「きつ、きたないですわよおおお——っ！」

と喚くシヨコラと一緒に、たちまち高度二百メートルまで上昇。対戦時間はまだ半分も経過していないが、この後のことも考えると、そろそろ決着させる必要がある。

「はっ、離しなさい、この！」

「言われなくてそうするよ！」

ばっ、と両手を開く。シヨコラは空中でばちくりと瞬きしてから、真っ逆さまに落下する。

「きやあああああああ——……」

と悲鳴をフェードアウトさせながら遠さかるシヨコラを、ハルユキは急降下で追いかけた。

この（持ち上げて落つことす）戦法は、最も単純かつ最も効果的なシルバー・タロウの勝ちパターンだ。地面への落下は、ほとんどのデュエルバターに多大なダメージを与えられる。

だが、この緩衝ステージでは、恐らく落としただけでは勝てない。

ハルユキの予想どおり、地面に激突したシヨコラは、クワシヨンに深々と埋まってから猛烈な勢いで弾き返されてきた。

「……………あああああ——っ！」

いったん聞こえなくなった悲鳴が、再びフェードイン。急激に近づいてくるシヨコラの頭に、右手のチョップを叩き込む。スカアーン！と乾いた衝撃音が轟き、チョコレート色の帽子が真っ二つに砕け散る。

急降下と急上昇の相乗効果でインパクトが増幅され、シヨコラの体力ゲージが一気に半分を下回った。再び落ちていく人形使いを空中で追いつき、一足早く着地すると、ハルユキは落ちてくるシヨコラを両手で受け止めた。

相手がきょとんとしているうちに、急いで提案する。

「えーと、ひとまず、これでドロップってことでしょうか。そっちも、何か話があつて杉並まで来たんだらうし」

「……………」

たつぷり五秒以上も沈黙してから、シヨコラ・バベッターは、トレードマークの帽子を失った顔をつんとそむけながら答えた。

「ま、そうしてあげてもいいですわ」

対戦が終了し、現実世界に復帰したハルユキは、急いでニューロリンカーのグローバル接続を切った。アッシュ・ローラー以外の相手に乱入されるのも基本的には歓迎だが、さすがに朝から二連戦もしたら、授業中に居眠りしてしまいそうだ。

ふう、と息を吐いた途端、隣から呆れ成分多めの声が届く。

「……ハル、あんた、さっきの戦い方……」

「聞こえない！ 何も聞こえない！」

耳を塞ふさごうとしたハルユキの右手をがしつと捕まえると、チユリはにやにや笑いながら言つた。

「あたしたち以外のギヤラリーがいなくてよかったねえ？　もし誰かに見られてたら、すんごい二つ名がついてたところだよ」

「う、うるさいなあ。対戦では臨機応変、使えるものはなんでも使えつて先輩や師匠も言つてたし」

「だからって、対戦中に相手をペロペロするのはどうかと思ふなあ」

「……………すみませんチユリさん、先輩たちにはソレ内緒にしまして下さい……………」

「えんじ屋のジュラート食べたら口が固くなるかもなあ」

高壁下を歩きながらしばらくそんなやり取りを続けてから、二人同時に真顔に戻る。

「それにしても……………」

ハルユキが咳くと、

「ピッタリだね……………」

チユリが頷いた。

引き分けの提案に応じたシヨコラ・パベッターは、残り時間を使って突然乱入してきた理由を語った。それは驚愕すべきもので、ハルユキは「僕らのマスターに伝えるよ」としか言えなかった。

実際、黒雪姫がどう対応するのか、現段階では想像もできない。まずは一刻も早く報告し、指示を仰ぐ必要がある。

同じことを考えたのだろう、チユリが突然「よし！」と小声で叫んだ。

「ハル、学校まで走ろ！」

「え、ええん？」

「早くつければ、始業前に黒雪先輩と話し合えるじゃん」

「……き、今日は、先輩も遅いんじゃないかなあ……」

「なんでそんなことが解るのよ」

というチユリの問いには、「な、なんとなく」と答えるしかない。黒雪姫がほんの二十分前に有田家を出たばかりだから、とはとても言えない。

「ひ、昼休みでも大丈夫だよ。だいたいチユは朝練があるんだろ？」

「そーだけだよー。早く教えてピクタリさせたいんだもんー」

「まあ、これには先輩も驚くだろうけどな……。ともかく、昼休みなら、もしかしたら師匠たちも遠隔アクセスがート経由で会議に参加できるかもだし」

「うーん、まあ、そのほうがいいかもね」

とチユリが同意したので、こっそり胸を撫で下ろす。こんな蒸し暑さの中を走ったりしたら、学校に着く前に脱水で倒れてしまいかねない。

しかし幼馴染はハルユキの安堵を見逃さなかったらしく、にんまり笑いながら言った。

「んじや、ジョギングの代わりに、学校まで単語帳ゲームやろ」

「え、えええー……」

「ここで憶えた単語が明後日のテストで出るかもしれないでしょ！ ほら、始めるよー」

チユリが右手をきつと走らせると、ハルユキの視界にアドホック接続リクエストが現れる。アクセプトするやいなやアプリが起動し、『Crunch』という単語が表示されると同時に、五秒のカウントダウンが始まる。

「……………噛み砕く！」

時どと、ちゃんと正解のチャイムが鳴ったのだが、チユリはぶひゅつと噴き出した。なぜ？ と隣を見やってから、さっきの対戦で、ハルユキがチョベットの右手をばりばり噛み砕いたシンを思い出しているのだと気付く。

「お、お前なあ、ちゃんとやれよー」

「ご、ごめんごめん。えーと……」

チユリは自分の単語帳アプリに目を落とし、そこに表示された『Tic Tac』という単語を見るや、今度はお腹を抱えて爆笑した。

四時間目の終了を告げるチャイムが鳴り、教師が前のドアから出ていくやいなや、ハルユキは立ち上がって、無垢武の席に向かった。素早く周囲を見回し、誰も聞いていないことを確かめてから小声で話しかける。

「タタ、メールで知らせた件だけども」

「緊急ミーティングだろ」

タタムは、メガネをきらりと光らせながら続けて言った。

「何か、すごいことがあったみたいだね」

「まあな、タタもさっと驚くと思うよ」

「それは楽しみだな」

にやつと笑うと、タタムは弁当の包みを片手に立ち上がった。

「ミーティング開始まで、あと十五分か。ハルは学食だろ？　じゃあ、ぼくも向こうで一緒に食べるよ」

「そっか、悪いな」

応じながら、ちらりとチユリに目を向ける。もう一人の幼馴染はクラスの仲良しグループと

弁当を食べるようだったが、大丈夫というようにアイコンタクトしてくるので、軽く頷き返す。会議は黒雪姫がスターター、ハルユキがレシーバーとなつて対戦ステージで行われる予定なので、最長でも一・八秒だ。それくらいなら、たとえ誰かと食事中でも、心の準備さえしておけば怪しまれることはない。

「よし、行こうぜ」

ぽんとタタムの背中を叩き、教室を出ようとした、その時。

「有田くん、黒くん、ちよつといい？」

後ろから声を掛けられ、ハルユキはびくつと振り向いた。

そこに立っていたのは、長めの髪を右側でサイドテールに結わえ、おでこを半分出した女子生徒だった。生沢真優という名前の、C組のクラス委員長だ。

タタムと一瞬顔を見合わせてから、最初に名前を呼ばれたハルユキが恐る恐る答える。

「う、うん。何……？」

「話したいことがあるんだけど、よかつたら、お昼ご飯一緒に食べさせてくれない？」

「は、はあ……」

と不明瞭な返事をしつつ、頭を限界スピードで回転させる。

こういうシチュエーションは、小学生の頃に一、二度経験がある。自宅マンションのエントランス広場などでタタムと一緒にいると、数名の女子が近づいてきて、「黒くん、ちよつと話

があるの」などと言いながらハルユキを暴魔（まじまじ）そうに睨（にら）むのだ。

「……あの、生沢さん、もしタタに用があるなら僕は遠慮（えんよ）するけど」

気を回したつもりでそう提案（ていせん）すると、生沢委員長はばちくりと瞬（まじ）きしてから、猛烈（もくれつ）な勢いでかぶりを振った。

「ちっ、違（ちが）うってば、そういう話（はなし）じゃなくて」

「え……違（ちが）うの？」

「違（ちが）うの！」

言い合っていると、タタムがほんのり苦笑（くせう）しつつ口（くち）を扶（たす）んだ。

「とりあえず、続きは食堂（じきやう）に行（い）ってからにしよう。早くしないと、ご飯（ごはん）食べる時間（じかん）がなくなっちゃうよ」

そして、ミーティングの準備（じゅんび）をする時間（じかん）も。

黒書姫（くろしよひめ）がハルユキに乱入（らんにゅう）してくるまで、あと十二分。移動時間（いどうじかん）を考えるともうギリギリだ。

「解（わか）った、じゃあ、行（い）こう」

ハルユキの言葉（ことば）に、生沢も「うん」と頷（うなづ）いた。よく見ると、右手（みぎて）に小さな巾着袋（きんちやくぶくろ）を持っていて、中身（うちみ）は弁当（べんとう）と飲み物（飲みもの）らしい。

少し離れた席（せき）で胡散臭（うさんくさ）そうにこちらを見ているチユリに、オレだつて何がなにやらだよ！ という意志（いし）を込めた視線（しせん）を投げ掛けてから、ハルユキは二人（ふたり）と一緒に教室（きやうし）を出（で）た。

梅郷中の学生食堂は、中学校にしてはかなり広い。しかも奥の窓際には、おしやれなカフェかと見紛うばかりのラウンジまで併設されている。

食堂とラウンジは観葉植物が詰むトレリスで遮られていて、利用できるのは二年生と三年生だけという不文律がある。ということはハルユキたちも使えることは使えるのだが、今日は食堂の長テーブルにしておくべくだろう。なぜならもしかすると、ラウンジのいちばん奥にある丸テーブルに……。

そこまで考えた時、生沢が嬉しそうな声を出した。

「あつ、ラッキー！ 出遅れたのに、ラウンジのテーブルいっこ空いてる！」
びよんと一歩前が出るや、

「私が場所とつとくから、二人は買物してきて！」

と言いついて小走りでラウンジの中へと消えていく。

「……………生沢さんで、ああいうキヤラだったのか…………。クラス委員長だし、もっとマジメでカタイ人かと思ってた…………」

ハルユキが眩くも、タカムは軽く笑いながら言った。

「確かに、某飼育委員長さんもとってもマジメでカタイらしいね。さあ、時間ないから急ごう。ぼくは飲み物だけだけど、ハルは？」

「……………オレはマジメだからカレー」

「じゃ、先にラウンジに行ってるよ。あと五分だぞ」

「楽勝楽勝！」

タカムと別れ、サービスカウンターの列に並ぶ。文字通りのメニュー・ウインドウを開き、月曜日はコレ！と決めている週替わりカレーを選択。ニューロリンカーにチャージしてある電子マネーから四百二十円が引き落とされる。

今週のカレーは、素揚げしたオクラやナス、ズッキーニがトッピングされた夏野菜カレーだ。あと二週間で夏休みか、そしたらみんなで山形旅行だ、おじいちゃんに連絡しておかないと、でもその前に期末テストか……などと考えながらカウンターで熱々のカレーが載ったトレイを受け取り、セルフサービスのお冷やを注いでから、急いでタカムを追いかける。

ラウンジの入り口にあるアーチをくぐったところで、ハルユキはふと立ち止まった。

いちばん奥、窓際の丸テーブル。こちらに横顔を見せて、ハードカバーの紙製書籍をめくる一人の女子生徒。

漆黒のロングヘアに窓から差し込む白い光が当たり、シルエットの輪郭を幻想的に浮き上がらせている。

まるで、八ヶ月前のあの日に戻ってしまったような……………。

ばんやり立ち尽くしていると、不意に女子生徒——黒雪姫が顔を上げ、ハルユキを見た。ふ、

と柔らかな微笑みを浮かべてから、時間がないぞと言わんがばかりに肩をすくめる。

ハルユキは慌てて黒雪姫と、その隣でにこにこしている生徒会書記の若宮恵に会釈してから、ラウンジの右端で席を取っているタカムたちの所へ移動した。テーブルにトレイを置いてから、空いている椅子に腰掛ける。

まだ弁当の蓋を開けていない二人に、

「遅くなってごめん」

と謝ると、委員長は真顔でかぶりを振った。

「ううん、ぜんぜん。こっちこそ、急がせちゃってごめんね」

「それで……話って、どんな？」

せつがちな問いを口にするハルユキの右肘を、タカムが軽くつついた。

「時間もないし、食べながらにしようよ」

その言葉に視界右下を見ると、黒雪姫に指定された時間まであとたったの三十秒だ。会議が終わるまで待つてもカレーが冷めてしまうわけではないが、湯気を上げる皿を目の前にして、体感で三十分もお預けは悲しすぎる。

「そ、そうだな。じゃあ……いただきます」

二人がいただきます、と声を合わせるや、スプーンで夏野菜カレーをたっぷりすくい取る。

一口で頬張り、スパイシーな辛さとズッキーニの歯応えを堪能しつつもぐもぐと吞み込

み、ふうつと息を吐いた、その直後。

本日二回目の加速音が、ハルユキの聴覚を前から後ろへと駆け抜けた。

「えーと、今度は……（原始林）ステージか」

口の中に残るカレーの後味が急速に消えていくのを感じながら、ハルユキはぐると周囲を見渡した。

撫野中の校舎は、超大型の古代樹に姿を変えている。学食とラウンジは広大なうろとなり、足許にはふかふかとしたコクが生え、テラブル代わりの巨大キノコが直径一メートルはある笠をそこかしこに広げる。

そして、そのキノコの一つに、漆黒のデュエルアバターが腰掛けていた。

「あ、先輩！」

右手を振りながら、ハルユキはキノコの間を縫って駆け寄ろうとした。だが。

しゅぽっ！

という衝撃音とともに、眼前を青白い光が煌いだったので、悲鳴を呑み込みながら急ブレーキを掛ける。ヘルメットのバイザーから小さな火花が飛び散り、体力ゲージがほんのドットだけ減少する。

「の、のわあい」

ハルユキが飛び退くと同時に、幾つもの巨大キノコが根元からばらばらと倒れ、砕け散った。対戦相手である黒の王ブラック・ロータスが、まっすぐ伸ばした右腕の剣を凄まじいスピードで何度か回転させ、周囲のキノコを切断したのだ。あとには、直径五メートルもの空間ができている。

「ン、どうしたハルユキ君？ 会議場を作っただけだが」

という声は、そこはかとなく冷ややかだ。まさか、まだメタトロンの件で怒っているのだろうか。それともニコ襲来の件で……。

「突っ立っていないで、座ったらどうか。私は何も気にしていないぞ？ わざわざラウンジに私の知らない女子生徒を連れてくるのも、一緒に楽しくお昼を食べるのも、それはキミの自由だからな」

——その件かつ……！

黒の王おむずかりの理由を察したハルユキは、必死に説明を試みた。

「ち、ちやうんです先輩！ あれは生沢さん、あ、うちのクラスの委員長なんですけど、彼女のほうから僕とタタに話があるって言ってきて……」

「ほう。その話とは？」

「そ、それを聞く前に、この会議が始まっちゃって……」

「ほう。では私が大切な話のジヤマをしてしまったというわけか」

「い、いえ、そーゆーことでは……」

バイザリの下で、假想の冷や汗をだらだら流していると――。

「鴉カラスさんをいじめるのはそれくらいにしてあげたら、ロータス？」

笑いを含んだ声が、広いホールに響いた。

見ると、ハルユキから見えて左の奥にある入り口から、観戦者であるレギオンメンバーたちが連れ立って入ってくる場所だった。

先頭は、車椅子に腰掛けた《鉄腕》スカイ・レイカー。

その右に、《劫火の巫女》アーダー・メイデン。

左には、《純水無色》アクア・カレント。

そして三人の後ろに、ライム・ベルとシアン・パイルが並んでいる。

楓子に諫められた黒雪姫は、無事なキノコの一つに寄り掛かると、腕組みをしながら言った。

「では、これくらいにしておいてやろう」

はっと息を吐き、隣となりにのキノコに座ったハルユキの耳に、追加のひと言が届く。

「もちろん、あとでキツチリ説明して貰うがな――」

「ハ、ハイ、それはもう……まあ、僕も何の話なのか見当も付かないんですけど……」

などと言葉を交わしているうちに、レイカーを除く四人もそれぞれキノコに腰掛け、会議の準備が整った。

——と思ったのだが、開会を宣言するはずの黒雪姫は、もったいぶった口調で言った。

「では、クロウ。我がレギオンの、八人目のメンバーを呼んでくれたまえ」

「あ、そ、そうですわね」

とハルユキが答え、楓子も頷いたのだが、他の四人はそれぞれに驚きを表現した。

「い、いつのまにひとり増えたの!?」

と叫ぶチユリに、まあまあと手を挙げておいてから、精神を集中する。深くイメージし——大切な仲間には、そっと呼びかける。

数秒後、音もなく出現した純白のアイコンを見た途端、チユリとタタムが「ええええっ!?」と叫んだ。

そのアイコンを、ハルユキが「大天使メタトロンさんです」と紹介した途端、謎とあきらま再び驚きの声を上げた。

メタトロンの復活と現状をハルユキが説明し、本人から大変に偉そうな挨拶があったところで、残り時間は二十五分となった。

「……とつてもびっくりですけど、ターさんのしわざと思うと、なんだか納得なのです……」
という謎のコメントに、チユリがやれやれとばかりに頷く。

「まあ、ハルは昔からヘンなのに好かれるからね……」

途端、ハルユキの左肩に乗ったアイコンが、鋭い声を出した。

「ライム・ベル。ヘンなのとは、よもや私のことではないでしょうね？」

「えっ、あ、あはは、いやまあその……」

ごによごによと誤魔化してから、チユリは大きく咳払い。

「それはともかく！ 黒雪先輩、今日この会議を開いてもらったのは、ちよつと……じやなくてかなりピッタリな話があるからなの！」

「ほう、では、チユリ君に報告して貰おうか」

「はいい！」

びよんと立ち上がるライム・ベルをハルユキが眺めていると、頭の中にメタトロンの思念音が響いた。

「シルバー・クロウ。先ほどからあの者たちが用いている呼称は何なのですか？」

「へ？ あ、そうか。あれは、僕たちが現実世界……えーと、ロウ・レベルの更に下というか、外にある世界で使ってる名前だよ」

「ふむ。つまり（ロウエスト・レベル）ですね」

「……………ま、まあ、そういうことかな……」

「そこでお前は（ハル）と呼ばれているわけですか」

「うん。なんなら、君もそう呼んでくれてもいいけど……」

「……検討しておきましょう」

そんなやり取りを交わしている間に、会議場の中央まで進み出たライム・ベルが、ぐらりと一同を見回してから説明を始めた。

「えーと、前に報告した世田谷第二エリアの（フチ・バケ）ってレギオンの話、みんな覚えてるよね」

こくこく、とハルユキを除く五人が頷く。

「今朝、そのマスターのシヨコちゃん……シヨコラ・パベッターがいきなりハルに乱入してきた、あたしもギャラリーに入ったんです。最初はぼっこぼこにやられて、これは負けかなーって思ったんだけど……」

「ぼ、ぼっこぼこってほどじゃないだろ！ 緩衝ステージ初めてだったから、戦い方が解らなくて……」

「もう、ハルは静かにしててー！——でも、途中からハルがべろべろしたり、もぐもぐしたりして、どうにかドローになったんです」

「べろべろ……？」と楓子。

「もぐもぐ……？」とあきら。

幸いチユリは、詳しい説明はせずに次に進んだ。

「で、ここからが本番なんです。シヨコちゃんと、あとフチ・バケのメンバーのミント・ミト

ンとプラム・フリッパ―も来てたんですけど、その三人がですね……」

少し間を置いてから、チユリは大声で核心的情報を口にした。

「うちに……ネガ・ネビュラスに、入れて欲しいって言ってきたんですー」
しーん。

と静まり返った会議場で、ハルユキはその時のことを思い出していた。

正確には、ショコラはまず、「レギオンに入って差し上げてもいいですよ」と言ったのだ。だがすぐにミントがショコラの頭を押さえつけながら、「そうじゃなくて、入れて欲しいんだよ!」と訂正し、プラムが突然の加入要請に至った理由を説明し始めた。

どうやら〈ブチ・パケ〉の頭脳担当、つまりタタムのボジションらしいプラム・フリッパ―は、どこかのんびりした口調で語った。

「あのお、わたしたち、噂で聞いたんですー。ネガ・ネビュラスが、ISSキットの本体を、破壊してくれたって。だから、三人で相談して、決めたんですー。このあいだ、わたしたちとタルちゃんを助けてもらったお礼に、あなたたちと一緒に戦おうって……」

ハルユキを回想から引き戻したのは、隣に座る黒雪姫の唸り声だった。

「ううむ……なんともはや、だな。その申し出はありがたいが、彼女たちは知っているのか? 我々のレギオンが、どのような状況に置かれているのか」

「そのことも、しっかり相談したうえで申し出だそうです」

チュリに代わって、ハルユキが答えた。

「ネガ・ネビユラスに協力すれば、他の王たちのレギオンからはどうしたって睨まれる。それならいっそ、ブチ・バケとして外部から協力するよりも、ネガ・ネビユラスに入ってしまったほうがいい。そうすれば、ネガ・ネビユラスがいちばん苦勞しているところで力になれるはず……シヨコラさんたちは、そう言っていました」

「……そこまで、考えてのことか……」

黒書姫の呟きに、再び楓子とあきららが言葉を繋げる。

「わたしたちがいちばん苦勞しているところってというのは、つまり……」

「領土戦、なの」

それを聞き、一同深々と頷く。

毎週土曜日の夕方に開催される領土戦争で、杉並区に存在する三エリアを全て防衛するのはそう容易いことではない。幸いこれまでは一度も領土を失墜していないが、人数が足りなくてあわやという状況に立たされたことなら何度もある。

しかし、仮にブチ・バケの三人が加入してくれば、ネガ・ネビユラスは総勢十名となる。三つのエリアに、チームの最少人数である三人を配置しても一人余る計算だ。数の上では、どのエリアも対等に戦えることになる。

「……どうするのですか、サツちゃん？」

謎の問いかけに、黒雪姫はしばらく沈黙してから、ぼつりと言葉を発した。

「……せっかく結成したレギオンを解散するというのは、とても重い選択だ」

「そうね……」

楓子が頷く。

「シヨコラさんたちは、本来は最低四人必要なレギオンマスター・クエストを、たった三人でクリアしたんでしょう？ よほど強い絆で結ばれていなければできないことだわ」

「うむ……。レギオンマスターの資格まで喪失するわけではないから、いずれ再結成することは可能だが……。一度の解散によって失われてしまうものも確にある。領土戦が楽になるからという理由だけで、彼女たちの申し出を受けていいものかどうか……」

いつになく前切れの悪い黒雪姫に向かって、チユリがびよんと一歩飛び出した。

「先輩！」

「な……。なんだ、チユリ君？」

「ふつーだったら真っ先に言いそうなこと、言わないんですわ。その三人は信用できるのか、って」

笑みを含んだ声でそう訊ねるチユリに、黒雪姫は虚を衝かれたように何度かアイレンズを瞬かせてから、こはんと咳払いした。

「そ、それは、私はチユリ君とハルユキ君を信用しているからな。キミたちが信じられる相手

なら、私も疑ったりしないさ」

「なら、もう、丸ごと信じちゃおうよ、先輩！」

チユリは、大きく両手を広げる。

「シココちゃんたちも、ブチ・バケを解散するのはもちろん悲しいはずだよ。でも、それ以上に、三人は会ったことのない黒雪先輩……黒の王ブラック・ロータスの力になりたいと思ってるんだよ。なら、少なくとも、会って話を聞いてみるくらいしてもいいんじゃないかなー」

「……………なんだか、チユリ君のほうが、よほどレギオンマスターの資質があるんじゃないかと思えてくるよ」

苦笑混じりにそう言くと、黒雪姫はゆっくりと頷いた。

「そうだな……。直接会い、決意のほどを聞いたうえで、申し出を受けるかどうか考えるべきかもしれないな……」

チユリに背中を押されても、まだ黒の王に本来の切れ味は戻らないようだ。

もしかしたら、かつて一度レギオンを——旧ネガ・ネビュラスを消滅させてしまったという記憶が、まだ黒雪姫の心に重くのし掛かっているのかもしれない。それゆえにレギオンの拡大を躊躇っているのだとしたら、言葉だけでその重石を取り除くことはできないのかも……。

とハルユキが考えた、その時。

いままですら沈黙していたメタトロンの立体アイコンが、左肩からふわりと飛び立った。

翼をばたばたと羽ばたかせながら、黒雪姫の前方上空まで移動する。そこで、小さな天使の輪を強く輝かせるや——。

「情けないですね。王を名乗ろうという者が、いつまで下を向いているつもりですか」
「な……なんだと!?」

黒雪姫が叫び返し、他の六人はびくつと上体を引いた。その状況で、メタトロンはなおも黒の王への叱咤を続ける。

「兵の百や二百、軽々と率いてみせるのが王というものでしょう！　なのに、たったの三名で何を迷っているのです！　加速研究会を叩き潰すというお前の言葉を信じたからこそ、（四聖）の石柱たるこの私が力を貸して……」

「そ、そ、それくらいで！」

しゅばつと飛び出したハルユキは、両手で空中のアイコンをキャッチすると、元のキノコテールに正座で着地した。「無礼者！」と暴れるメタトロンを背中の後ろに隠しつつ、黒雪姫に釈明する。

「あ、あのですね、メタトロンは無制限フィールドの全エネミー、じゃなかったピーニングの親玉みたいなモノですから、ちよつと口ぶりが偉そうですけども……」

「偉そうではなく偉いのです！」

「ああもう、少し黙っててお願いだから！」

「ならばまずこの手を離しなさい、私に許可なく触れるなど何度言えば解るのですかシルバ―・クロウ！」

「ふ……はは、あはははは……」

という笑い声が黒雪姫のものだと気づき、ハルユキは顔を上げた。

黒の王ブラック・ロータスは、細身のアバターを渡わせながらしばらく笑い続けていたが、やがて硬さの抜けた声で言った。

「はははは……。——まったく、キミにはかなわないな、ハルユキ君。我々を骨の髄まで震え上がらせたあの大天使メタトロンでさえ、キミにとってはもう友達なんだな……」

「え、いや、それはどうなんでしょう」

「誰が友になど！ 私にクロウの主です！」

「ふふ……。私も、恐れてばかりいてはだめだな。刃でしかないこの手でも、傷つき傷つけることを恐れずに差し出していかなければ、道は開けない……ということか……」

大きく頷き、一歩、二歩と前に出る。

「チユリ君、伝言ありがとう。シコロ・バベッターたちの申し出は確かに受け取った。近々会談の場を設け、そこで彼女たちの最終的な意志を確認したい」

「はい、じゃあ、そう伝えておきますね！」

嬉しそうに頷き、チユリは自分のキノコテーブルまで下がる。

ようやく大人しくなったメタトロンを左肩に戻し、ハルユキは黒雪姫の発言を待った。

「これまで、改まって説明したことはなかったが……」

そんな前置きに続いて、黒の王は、自らの言葉を噛み締めるように語り始めた。

「（ネガ・ネビュラス）」という我々のレギオン名は、オリオン座の馬頭星雲や、みなみじゅうじ座の石炭袋のような、いわゆる暗黒星雲をイメージして付けたものだ。正確には「ダータ・ネビュラ」らしいが、それでは特定の色が強くイメージされすぎるから……。とは言うものの、当時まだ小学生だった私が、華やかな原色で彩られた加速世界の銀河を暗黒で塗り潰してやろうという野望を抱いていたことは確かだ」

「あら、いまはどうなの、サツちゃん？」

微笑みを湛えた楓子の問いかけに、黒雪姫は軽く両肩を上下させる。

「それはまあ、いままも野望を捨てたわけではないが。——ともあれ、最初はそんな、どちらかと言えばネガティブな意味合いで名付けたレギオン名だが……第一期ネガ・ネビュラスが私の暴走のせいで崩壊してしまったのちに、私は知った。暗黒星雲というのは、単なる宇宙の黒いシミなどではなく……星雲を構成する物質が寄り集まって、いつかは新たな恒星を生み出す、いわば（星の揺りかご）なのだとな。レギオンの仲間たちも全領土を失い、ローカルネットに閉じこもっていた私には大いなる皮肉のように感じられたが、しかしそれは真実だった。復活したネガ・ネビュラスには、こうしてかつての、あるいは新たな仲間が次々に加わり、もうい

ちど私に戦うための力を与えてくれたのだから」

全メンバーを、一人ずつ順番に見詰めてから――。

「――みんな、この場で改めて、レギオンの行動指針を確認しておきたい」

毅然とした声でそう告げると、黒の王は、しゃきん！ という涼やかな音とともに右手の剣を斬り払った。

「我々ネガ・ネビュラスは、加速研究会及び、その隠れ裏である白のレギオン、オシラトリ・ユニヴァースと対決する！ いずれ時宜を得たその時には、オシラトリの本拠地たるエテルナ女子学院のある港区第三戦域を、領土戦争にて攻め落とす！ その瞬間に奴らの乱入拒否特権は失われ、マツチングリストにブラクタ・バイスやラスト・ジグソーの名前が出てくるはずだ。それをブルー・ナイトに確認させ、六レギオンによる合同攻撃作戦を発動させる。そこに至るまでは、かつてないほど厳しい戦いの連続となるだろうが……我々なら乗り越えられると、私は信じている。以上だ！」

黒雪姫の敢然たる言葉にいてもたってもいられず、ハルユキは床に飛び降りると叫んだ。

「ば……僕、がんばります！ いえ、みんなで、がんばりましょう！」

おー！ という掛け声が、チユリや楓子たちから上がった。左肩のメタトロロンも、声は出さなかったものの、頭のリングを強く発光させた。

そんな中、いままですっと何かを考えている様子だったタタムが、落ち着いた声を出した。

「マスター、発言しても？」

「もちろんだ、タタム君」

促され、キノコから立ち上がったシアン・パイルは、会議場の真ん中まで進み出る。

「いま、マスターが宣言した行動指針に、ぼくも異論はありません。加速研究会を消滅させるには、本拠地への総攻撃は避けて通れない道ですから。けれど……ぼくの役目として、敢えて言わせてもらいます。領土戦で港区エリアへ攻め込むには、クリアしなければならぬ大きな問題が二つあると思うんです」

「ふむ。続けてくれ」

「はい。まず一つ目は……すでに領土を持っているレギオンが領土戦で攻撃できるエリアは、自軍の領土と隣接してはなくてはならないということ。言うまでもなく、ぼくらの領土である杉並エリアと、研究会の本拠地である港区第三エリアは遠く離れています。現状では、ネガ・ネビュラスがオシラトリ・ユニヴァースの領土に宣戦することはできません」

「あ……」

その基本ルールを繪圖に忘れていたハルユキは、小さく声を漏らした。だが、他のメンバーはとうに気付いていたらしく、無言でタタムの説明を待っている。

「そして二つ目は、この杉並エリアの防衛をどうするのか、ということ」

再び声を上げそうになったが、今度はどうにか堪える。

それもまったくそのとおりだ。港区エリアを総攻撃するには、領土戦の行われる土曜日夕方にレギオンメンバー全員が現実世界の港区まで移動せねばならず、その間は杉並エリアの守りが空っぽになってしまうのだ。

黒雪総はゆっくりと頷き、言った。

「確かに、その二つは巨大な問題だ。……だが、タカム君ならば、解決法にも気付いているのだろう？」

問われたタカムは、フェイスマスクをわずかに伏せた。

「……はい。二つの問題をいっぺんに解決する方法が、たったひとつだけあります。それは、杉並エリアを放棄すること。全ての領土を失えば、あらゆるエリアを自由に攻撃できるようになりますし、防衛に戦力を割く必要もない……。——ですが」

そこできつと顔を上げ、毅然とした口調で言い切る。

「ですが、ぼくはその方法には反対です！ この杉並エリアは、八ヶ月前のあの日、マスターとハルが六大レギオンとの戦いを宣言した場所です。それ以来、領土をただの一度も奪われることなく、今日までみんなで守り続けてきたんです。レイカーさんや、メイデンさんや、カレントさんがレギオンに戻ってきてくれたのも、杉並に黒の旗が立ち続けていたからだとぼくは思います。たとえ研究会を倒すという大義のためでも、そしてたった一週間のことだとしても、戦わずして領土を放棄したら、きつと何か大切なものが失われてしまう。ここは、この杉並は、

ぼくらの場所なんです、マスター！」

炎のように熱い意志がこめられた声が、広いホールに長々と反響した。

いつも理知的かつ現実的なタムだが、本当はこんなにも、ネガ・ネビュラスのことを……そして黒雪姫のことを大切に思っているのだと改めて気付かされ、ハルユキは胸がつまるような思いだった。それはチユリや楓子、麗、あきらたちも同じだったらしく、皆が深々と、力強く頷く。

熱気を帯びた沈黙を最初に破ったのは、ハルユキの左肩に乗っている純白の立体アイコンだった。

「その青いのは、なかなかいいことを言いますね」

偉そうにもほどがあるが、これはメタトロンの最大級の讃辞だ。最強クラスの神獣級エネミーは、小さな羽根をばたばたと動かしながら続けた。

「スギナミとやらが前たちの領土ならば、いかなる理由があれ、放棄するなどと断すべき行いです。守るために兵が必要ならば、増やせばいいだけのこと。そして、隣接する領土でなければ攻められないというのなら、隣にある土地を攻め落とし隣接させればいいのです」なるほど。

と思ってしまうから、ハルユキはいやいやいや！ と内心で叫んだ。

杉並エリアと港区エリアを隔てているのは、泣く子も黙る渋谷エリアだ。加速世界最大規模

のレギオン、グレート・ウォールを率いる緑の王のしろしめす地。攻め落とすなどは、冗談でも口に出せない。

しかし、何たることか。

今度もまた、黒雪姫は「ふむ」と頷いた。

「正論にして正攻法だな」

「え、ええええ？ は、本気ですか先輩？」

たまたまハルユキが叫ぶと、黒の王はひよいと肩をすくめてみせる。

「そこまで驚かなくてもいいだろう。グレウオの連中は、ほとんど毎週のようにこっちを攻めてくるじゃないか」

「そ、それはそうですけど、でも参加メンバーはいつもミドルレベルの人たちばかりで……手加減されてると思いますけど、本気で杉並を攻め落とそうって感じでもないじゃないですか」

「ならば、こちらもハルユキ君たちに攻め込んでもらうか」

「え、えええええ？」

「はは、冗談だ」

黒雪姫は軽く左手を持ち上げ、タムとハルユキを下がらせると再び前に出た。

「メタトロンの意見は正論ではあるが、実現するとなると余りにも時間がかかりすぎる。研究

会の連中がいつまでも大人しくしているとは思えないし、可能ならば今月中にケリをつけて、すっきりした気分で夏休みを迎えたいところだ。そこで今回は、交渉によって問題を解決したいと思う」

「交渉……って、あ、もしかして、先輩や師匠はそのために緑の王と……?」

黒雪姫と楓子が、すでに緑の王グリーン・グランデとの会談をセッティング済みであることをようやく思い出したハルユキは、もう何度目か解らない驚きの声を上げた。

「目的の半分、ですけどね」

頷いた楓子が、車椅子ごと音もなく進み出て、黒雪姫の隣に並んだ。

「いま我々が言ったとおり、わたしたちは、緑の王との会談を次の日曜日……十四日の午後三時に予定しています。参加可能なメンバー全員で渋谷第二エリアに行って、向こうの幹部と港区エリア攻撃について話し合うつもりよ。そう簡単に協力が取り付けられるとは思わないけれど、そこは交渉次第ね……。何か、事前に訊いておきたいことがある人はいるか?」

と楓子が視線を巡らせた途端、物凄く勢いでチユリが右手を挙げた。

「はい! はいはいはい!」

「な、なあに、チーコ?」

「渋谷第二ってことは駅の周りでしょ!? センター街とか、道玄坂とか、渋谷ラヴィンタワーとか!」

「そ、そうね」

「じゃあ、会談のあと……じゃ時間が遅すぎるから、会談の前にみんなで買い物とか観光とかお茶とかすることを提案しま——す！」

「……………ど、どうかしら、サツちゃん？」

「……………ま、まあ、いいんじゃないか？」

マスターとサブマスターが、顔を見合わせつつそう言った瞬間、チユリはびょーんと飛び上がった。

「やった!! 今週の日曜ですね、楽しみ!!」

「あのなあチユ、遊びにいくんじゃないんだぞ」

ハルユキは、喜色満面の幼馴染に、念のため釘をさした。

「それに、お前様か、次の週末って陸上の大会なんじゃ……………」

「あたしが出るのは土曜だもん! 日曜はいちにち休みでーす！」

「あ、そ、そうなの……………」

すかさずタタムも言葉を挟む。

「ちなみにハル、ぼくが出る剣道の大会も土曜だからね。さっきあんなこと言っておきながら申し訳ないけど、次の領土戦はまたぼくとチーちゃんが不参加になっちゃうから、よろしく頼むよ」

「そ、そうなの……………」

少々がっかりしてしまふ——防衛が大変だからではなく単純に寂しいからだか——ハルユキだったが、すぐに、大会に出る二人をちゃんと応援しないと、と思い直す。

いっぽう黒雪姫は平然と頷き、タカムたちをねぎらった。

「三エリアともきっちり防衛するから、安心して大会に行ってくれよ、タカム君、チユリ君。……………」しかし、キミたちも大変だな。たった二週間のあいだに、文化祭、期末試験、部活の大会と行事が立て続けで」

「ほーんと、大変ですよー」

チユリが、三角帽子を深々と傾ける。

「先輩が、副生徒会長長の権限で、せめて文化祭をもうちょっと早くしてくれればテスト対策が楽になるんですけど」

「まあ、私も文化祭の十日後にテストという日程はいかがなものかと思うが、残念ながら期限切れたな。私が生徒会役員でいられるのは、九月の次期役員選挙までだ」

「あ、そっか……………」黒雪先輩、もうすぐ副会長じゃなくなっちゃうんですね……………」

そうか、そうなんだよな……………」とハルユキも頷く。副生徒会長ではない黒雪姫はなかなか想像できないが、少なくとも中学校生活に於いて、永遠に続くものなど何もないのだ。そう、あたたった九ヶ月でその日が来る。黒雪姫が、梅郷中からいなくなってしまふ日が……………」

しょんばりと肩を落としかけたハルユキの脳裏に、いつになく穏やかなメタトロンの思念が響いた。

「……お前たち小戦士は、ロウエスト・レベルで、いろいろなことをしているのですわ」

「……うん。現実世界には〈学校〉ってところがあって、僕らはみんな、そこに毎日通って勉強してるんだ」

「ほう。訓練施設のようなものですか」

「ま、まあ、そうかな」

と答えてから、これは「そこに連れていけ」と言われるパターンかも、とハルユキは内心で身構えたのだが。

「……私とて、ビーイングたるこの身では、ロウエスト・レベルに降りるすべはないことくらい承知しています」

「……………」

「ですがタロウ、お前に話を聞くことはできます。主としてしもべに命令します。次にミーン・レベルを訪れた際は、私に語りなさい。ロウエスト・レベルがどのような場所なのか、お前がそこで日々いかなる時間を過ごしているのか、その全てを」

「え……す、す、全て？ ああ……ものすごく時間がかかると思うけど……」

「どれほど時間がかかろうと、私が気にすると思いませんか？」

「……そうだった、このピーイング様は御年八千歳だったんだ、と今更ながらに思い出す。

「わ、解ったよ。じゃあ、できるだけ早く無制限フィールドに行くから……」

「あまり待たせないように」

「は、ハイ」

というような会話を長々と続けてしまったが、どうやらメタトロンとの思念によるやりとりは音声によるそれよりも時間が圧縮されるらしく、顔を上げててもまだチエリと黒雪姫の会話は終わっていなかった。

「……では、チエリ君のたつての希望でもあることだし、日曜は早めに渋谷へ行って、グレウオとの会談のために英気を養うとするか」

「やった！ どーしよ、すっごい楽しみー」

はしやぐチエリに、楓子が苦笑混じりの声をかける。

「チーゴ、あくまで主目的は緑のレギオンとの交渉ですからね。……とは言うものの、渋谷はわたしの地元。ここは、わたしが一肌脱ぐしかなさそうね」

「えっ、姉さんが案内してくれるの？」

「遊びに行くにも、きちんとした計画があるかないでは時間効率が全然違いますからね」

人差し指を立ててそう言うそぶく楓子だったが、ハルエキの耳は遠くあきらのひそひそ話を聞き逃さなかった。

「フリーねえ、とってもノリノリなのです……」

「レイカーがああなったら、もう誰にも止められないの」

「何か言いましたか、ういいうい？」

「と、とっても楽しみなのです！」

長年コンピを組んだ《ICBM》と《絆色弾頭》の息の合ったやり取りに、皆が明るく笑う。それが収まると、黒雪姫が残り時間をちらりと確認し、ミーティングの締めに入った。

「……さっきも言ったが、白のレギオンとの戦いは、想像以上に辛く苦しいものになると思う。単純にメンバー数を比べても現状では覆しがたい差があるうえ、白の王ホワイト・コスモスや幹部集団《七連星》の戦闘力は底が知れない。加えて、奴らはまだ《冥禍の鎧マークⅡ》を手中に握っている。文化祭の日に現れたコスモスの口ぶりからして、回収した《鎧》を何らかの目的のために使う気にいることは確実だからな……」

その言葉に、ハルユキは強く奥歯を噛み締める。

鎧をその身に宿したままのウルフラム・サーベラスが、再び研究会に利用されることを想像しただけで体が震える。その前に、彼を解放しなくてはならない。それが、四度の対戦を経てサーベラスと友達になったハルユキの役目だ。

「——だが、我々は、これまでも厳しい戦いを幾度も勝ち抜いてきた。皆の力を結集すれば、砕けぬ壁はないと私は信じる。共に戦おう……我々が愛し、信じるもののために！」

黒雪姫が右手の剣を高々と突き上げると、レギオンメンバー全員が同じように右手を掲げ、ありったけの声で叫んだ。

会議が終了し、現実世界に戻ってきた途端、再びハルユキの口にカレーの風味が広がった。右手にスプーンを握ったまま、そういえばお昼ご飯の真っ最中だったんだ、と思い出す。

目の前にあるのは、まだ熱々の夏野菜カレー。場所は、学食一階のラウンジ。隣の椅子には、弁当を前にいただきますのポーズをしているタカム。そして正面には……。

「そのカレー、そんなに美味しかった？」

不意にそう訊かれ、ハルユキは両眼をぱちぱちさせた。前を見ると、髪を横結びにした女子生徒が微笑んでいる。クラス委員長の生沢真優だ。

——そういえば、生沢さんに誘われて一緒にラウンジに来たんだった。それにしても、なんで急に僕とタクを。そんなに仲が良いわけじゃない、というかいままではとど話したこともなかったのに。

などと考えていると、右手に小さなサンドイッチを持った委員長が、にこにこしながら続けて言った。

「有田くん、カレーひと口食べたと思ったら、目えつぶって止まるんだもん。だから、美味しいのかなーって」

「あ、う、うん。けっこういけるよ」

「ふうん、私もこんど食べてみようかな」

……これはもしかして、ひと口どうですか、とか勧めるべき場面なのか？ でも生沢さんはスプーン持っていないし。サービスカウンターから新しいスプーンを取ってくる？ いやいや、そこまですると逆に引かれるのでは？

再び思考の迷路に陥りかけたハルユキに、隣のタカムが声を掛けてきた。

「ハル、ちょっと味見させてくれよ。ばくの卵焼きとミニコロツケあげるから」

「へ？ いいけど、でもお前、スプーンは……」

「あるよ」

タカムはにやりと笑うと、弁当箱の蓋から形状変化素材のスプーンとフォークを取り出した。普段は薄い板状だが、掘ると生体電流を検知してそれっぽい形に変わるすぐれものだ。瞬間、親友から何らかのテレパシーが伝わった気がして、はっと気付く。

「あ……生沢さんも、味見してみる？」

ハルユキの申し出に、委員長はにっこり笑うと言った。

「いいの？ じゃあ、私もサンドイッチひとつあげる。あ、でも、スプーンないや……」

「委員長、これ使って」

すかさずタカムが非常用のスプーンを差し出す。

こういう時の対応力じゃあ一生タタには敵わないだろうなあ、と思いつながら、ハルユキもカレーの皿を前に出した。生沢は二人に礼を言ってから、サンドイッチが入っていたリサイクル容器の蓋にカレーを少し取り分け、空いたところに正方形の可愛らしいサンドイッチを載せてくれる。

タタムともトレードを終えると、三人は再び「いただきます」と唱和した。

「あつ、ほんとだ、おいしい。いつものボークカレーよりスパイシーだね」

「揚げナスともよく合うよ」

「タタ、お前はほんとにナスが好きだなあ」

そんなことを言い合いながら、委員長からもらった薄切りチキンとレタスとチーズのサンドイッチを、少しどぎまぎしながらひと口かじった時。

ふと右斜め前方から視線を感じ、ハルユキはそちらに顔を向けた。すると、かなり離れたテーブルから、ハードカバーの本で顔を半分隠すようにしてこちらをじっと見ている黒雪姫と眼が合った。

反射的に強張った笑みを浮かべ、ちやうんですーと思念を送る。だが、何がどう違うのか、ハルユキにも解らない。そもそも、まだ委員長に何の話も聞いていないのだ。

これは早めに本題に入ったほうがよきそう！と直感したハルユキは、右手のサンドイッチを次のひと口で食べ終え、話を切り出そうとした。しかし。

「有田くん、サンドイッチどうだった？」

先制でそう訊かれ、唯睡にこっくこっく頷く。

「す、すごくおいしかったよ。味付け、普通のマヨネーズじゃないよね」

「うん、ハーブを何種類か、細かく刻んで混ぜてるの。摘み立てだから、香りいいでしょ」

「へえ、家で育ててるの？」

「そうだよー、プランターだけだね。スイートバジルと、イタリアンパセリと、ローズマリーと……」

などという会話を交わす間も、委員長の後方から届いてくる黒雪姫の眼光が、じわじわと鋭くなっていく。もはや待ったなし！ と悟ったハルユキは、右足のつま先で、タタムの左足をこつんとつついた。

幸いタタムも黒雪姫の視線に気付いていたらしく、軽く咳払いしてから口を開く。

「それで、委員長。ぼくたちに話って、何なのかな？」

「あつ、そうだったね。えーと……すっごく突然な話で、驚かせちゃうかもしれないんだけど……」

椅子の上でびんと背筋を伸ばした生沢は、タタムとハルユキの顔をまっすぐ見ながら、よく通る声で告げた。

「有田くんと黒くんに、お願いがあるの。私と一緒に、次の生徒会役員選挙に立候補してくれ」

ないかな」

ええ——っ？

と口から飛び出しかけた叫び声を、辛うじて押し戻す。

——セイトカイヤタインセンキョ？ そんな名前のハーブあったっけ？

などという**迷走的思考**を**送らせる**時間は、ほとんど与えられなかった。タカムがわずか二秒で驚きから立ち直り、冷靜な声で生沢に確認したからだ。

「それはつまり、生沢さんが生徒会長に立候補するにあたっての執行部メンバーを、ぼくらに頼みたいってことかな？」

「うん、そう」

委員長は、真顔でこくりと頷く。

梅郷中学校の生徒会役員選挙は少しばかり変わっている。普通は、生徒会長、副生徒会長、書記、会計という四つの執行部ポストにそれぞれ候補者が立ち、投票も四人ぶん行われるのだが、梅郷中の場合は最初から四人がセットになって立候補するのだ。具体的には、生徒会長に立候補する生徒が自分のスタッフを三名集め、チームで選挙活動を行うことになる。

つまり、眼前の生沢真優は、ハルユキとタカムに副会長か書記か会計のどれかをやって欲しいと、そう言っているわけだ。しかし——。

「普通は、気心の知れた友達同士で立候補するって聞いたけど」

タタムの指摘に、ハルユキもこくこく首を振る。すると生徒は、真剣な表情のまま答えた。
 「私、それはあんまり良くないと思うんだ。生徒会役員は遊びでなるものじゃないんだから、スタッフとして信頼できるかどうかを第一に考えてメンバーを集めるべきでしょ？ いまの執行部もそういう人選だったみたいだし」

「……………でも、それならなおさら、なんで僕？」

右手で自分を指差しながら、ハルユキは呆然と訊ねた。

タタムだけなら解る。転校してきてすぐに剣道部のホープとなり、次期部長が確実視され、成績も常に上位。容姿や身長も含めて、一緒に選挙活動をするのにこれ以上の人選はないと、友達ながら太鼓判を押せる。

そして同時に、黛拓武が備えているそれらのプラス要素の全てを、マイナス要素の塊である有田春雪が打ち消してしまおうという確信もあるのだ。

もし、タタムの友達だからというそれだけの理由で声を掛けられたのなら、自分だけは全力で辞退しようとハルユキは決意した。だが生沢は、予想外の言葉を口にした。

「それはもちろん、有田くんとなら一緒に生徒会をやっていけると思ったからだよ」

「……………な、なんで？」

再び、そう問い返すことしかできない。すると、今度はくすりと笑われてしまう。

「そんなに不思議がることないよ。有田くん、飼育委員長として立派に活動してるじゃない。

専門委員会の役員が、生徒会役員に立候補するのはよくあることだよ。いまの生徒会長さんだって、前は放送委員会の副委員長だったんだよ」

「……………そ、そうなんだ……………」

そういえば僕は委員長だった、と運まきながら気付く。しかしハルユキが飼育委員長に任命されて、まだ一ヶ月と経っていない。仕事も、裏庭の飼育小屋で、アフリカオオコノハズクのホウを世話しているだけだ。それを活動実績と言っていていいものかどうか。

しかし生沢は、ハルユキの退路を塞ごうとするかのように言葉を重ねる。

「それに、このあいだの文化祭で、うちのクラス展示を有田くんが一人でがんばってバージョンプアップしてくれたでしょ。あの時、私、すごく反省したんだ。C組の委員長やってるくせに、心のどこかで、クラ展なんて形だけ間に合えばそれでいいやって思ってたことに気がついたから……………」

「そ、そんな、あんなの大した手間じゃなかったし……………僕こそ、みんなになんの相談もなく、展示を自分の趣味で改造しちゃって……………」

「いや、あの《三十年前の高円寺》って展示、ぼくはすごく好きだったな」

などとタタムが真顔で言い出すので、そこでそんなフォロー入れたら逆効果だよ！ と内心で叫びながらハルユキはもう一度足をつつこうとした。しかしタタムは視界外の攻撃をするりと回避し、発言を続ける。

「教室の壁や天井にARマッピングするっていうアイデアも良かったし、それをたった一晩で実装する技術も大したものだよ。お客さんも気に入ってくれてたじやないか」

「いや、けど、生徒会の《時》の展示に比べたらあんなの……」

「確かにあれもすごかったけど、有田くんが作った展示は等倍速で時間が流れてるところが好きたっとなー」

思い出すように視線を上向けながら、再び生沢が口を開いた。

「昔、うちの家族が住んでたマンションを見ながら、いろいろ考えちゃったもん。いま十四歳で、大人になるのなんてずっと先だと思ってたけど、ほんととは《もう十四歳》なんだなーとか。あのね、私が役員選挙に出ようと思ったのは、あの展示を見たからっていうのも少しだけあるんだよ」

「え……え？」

「もちろん当選できる自信なんてないけど、でも、やらなかったことを後悔するよりも、落選してがっかりするほうがずっといいな、って思うんだ」

「……………」

生沢真優のその言葉に、わずかではあるが心が揺さぶられるのをハルユキは感じた。役員に立候補する気になったわけではまったくないが、気付けぬうちに、口からひとつの問いが発せられていた。

「……あの、生沢さんは、どうして生徒会長になりたいと思ったの？ たしか、書道部でもが
んばってるんだよね？」

「えっと……それは……」

すると、生沢はなぜか少し顔を赤くしながら俯き、空になったリサイクル容器を丁寧に折り
たたみながら、小声で答えた。

「あのね、笑われるかもしれないけど……私、いま副会長をやってる三年の黒雪姫さんに、す
ごく憧れてるの。あの人に少しでも近づきたくて……あ、近づいていうのは仲良くなりたい
とかじゃないよ。生き方の話。黒雪姫さんの、いつも凛としてて、びしっと背中が伸びてて、
大人っぽく落ち着いてるところ、すごくいいなって思うんだ」

その黒雪姫さんは、いま君の十メートル後ろで、なんかじとーっとこっちを睨んでいるん
だが。

という思考はもちろん口に出さず、ハルユキはこくりと頷いた。

「そっか。その気持ちは解るよ……それに、すごく真つ当な立候補の動機だと思ってる」

ハルユキは本心からそう思ったのだが、それを聞いた生沢は、なぜか顔を伏せてしまう。

何かマズイことを言ってしまったのだろうかと憶てたが、数秒後に小声で発せられたのは、
意外な言葉だった。

「……あのね、ほんとのこと言うね。有田くんに立候補をお願いした理由、きつき説明したけ

ど、それで全部じゃないんだ。ほんととは、ずるい打算もあったの」

「え……だ、打算？」

「うん。有田くん、黒雪姫さんと仲がいいでしょ？ だから、有田くんが一緒に立候補してくれれば、黒雪姫先輩が選挙活動に協力してくれるかも、って……。そんな小賢しいこと考えるようじゃ、あの人に近づきたいなんて言う資格ないよね……」

「えっ………と………」

言葉に詰まったハルユキは、助け船を求めてタタムを見た。だが、幼馴染はアイコンタクトで、自分でなんとかしてみせろと伝えてくる。

「………あの、生沢さん。たぶん、それくらいのしたたかさがないと、選挙なんて勝てないんじゃないかな。それに、黒雪姫先輩も、相談されたら言うと思うよ。利用できるものは利用しろって」

「………そうかな………」

顔を上げた生沢に、深く頷き掛ける。

「もちろん、仲間との信頼関係がいちばん大事だけどさ。生沢さん、いま僕らに本当の気持ち打ち明けてくれたでしょ。そういう人なら、リーダーとして信じられるって、僕は思うよ」

「………ありがとう、有田くん」

サイドテールをびよこんと揺らして、生沢真優は勢いよく頭を下げた。二秒ほどして背中を

伸ばすと、改まった口調で言う。

「私も、有田くんと、^{タケコ}盛くんとなら、立派な執行部を作れるって改めて思ったよ。どの役職に立候補してもらうかはこれから相談しないとだけど、でも、二人なら、どんなポストでも安心して任せられる。ありがとうね……一緒にがんばろう！」

「う、うん！」

と力強く答えてから、今更のように、あれ？　なんでこうなった？　と愕然とするハルユキだった。



昼過ぎまでは薄曇りを維持していた空模様だったが、六時開目の授業中に少しずつ雲行きが怪しくなり、ホームルームが終わる頃には小さな水滴を散らし始めていた。

今日はこのまま夜まで降り続くという毎時予報だが、グラウンドで大会前の調整をしているであろうチユリのためにも、もうしばらく小雨ばらばらのままでいてくれと祈りながらハルユキは旧校舎裏の職場に向かった。飼育委員の仕事は、もちろん雨が降ろうが風が吹こうが休みにはならない。

飼育小屋の前に着ると、金網越しに小さな同僚に挨拶する。

「おっす、ホウ」

すると、最近ようやくハルユキを世話係と認めてくれつつあるアフリカオオコノハズタは、翼を二、三度わさわささせて挨拶を返してきた。

ホウが定位置の枝に止まっているうちに健康チェックを済ませるべく、仮想アスクトップの飼育委員会アイコンをタップ。管理アプリの体重測定ボタンを押すと、枝に仕掛けてある重量センサーと無線で接続し、ホウの体重が記録される。ここに引っ越してきた頃と比べれば、かなり適正値に近づいてきたようだ。

「うん、いい感じだな。けど、これから暑くなるからなあ……。夏バテしないでくれよな」

その声をかけると、ホウは首をくるくる動かして空腹を訴えた。しかし、《超委員長》こと四壁宮蔵でなければ餌やりはできない。

「すぐに四壁宮さんが来るから、もうちょっと我慢な」

というハルユキの言葉を理解したわけでもなからうが、お預けをくったホウは耳羽を伏せて後ろを向いてしまう。

メタトロンがこいつを見たら何て言うかなあ……などと考えながら、ハルユキは小屋の扉を開けて中に入り、水遊び用の容器と床に敷いてある耐水紙を捲いて外に出た。汚れた紙を水道でざっと洗い、正式名称《バードバス》というらしい容器にもきれいな水を満たして、小屋に戻す。

再び外に出て、中庭の道具置き場から竹箒とちりとりとデッキブラシを持ってきた時、正門方向から近づく足音が聞こえた。

「イインチョ、ちーっすー」

ウェービーなロングヘアを頭の後ろでくくりながら歩いてくるのは、飼育委員の井岡玲那だ。なんと今日は体操服姿での登場である。おまけに、首にはカラフルなスポーツタオルまで掛かっている。

「ち、ちーす。気合い入ってるね」

ハルユキがそうコメントすると、玲那は少し照れくさそうに口をすばめた。

「六時間目が体育だったからそのまま来ちゃった。こっちのほうが、汚れんの気にしないで掃除できっからさ。つーわけで、掃き掃除はあたしがやるし」

「よ、よろしく」

飼育委員会発足当日は「マジだるー」「意味わかんないしー」を連発していたあの井関さんが――と内心で感じ入りながら、ハルユキは指とちりとりを手渡した。自分はデッキブラシを装備し、飼育小屋の外壁にホースで水を掛けながらこしこし埃を洗い落とす。

掃除があらかた終わった頃、今度はたたたとという小刻みな足音が聞こえた。

顔を上げるより早く、視界にアドホック接続リクエストが表示される。OKボタンを押すやいなや、

「UIV 遅くなってごめんなさいなのですー」

という文字列がチャット窓に打ち込まれた。

前庭方向から小走りに近づいてくるのは、真っ白いワンピースタイプの制服に赤茶色のランドセルを背負い、右手に大ぶりのトートバッグをぶら下げた四壁宮崎だった。どうやら松乃木学園から傘も差さずに走ってきたらしく、濡れた前髪は額に貼り付き、制服もかなり雨を吸っている。

「超イインチョ、そんなに急がなくてもいいって！ ホウも大人しく待ってっから！ つーか

びっしょじゃん！」

慌てたように玲那が叫び、竹箒を放り出して、廊に駆け寄った。校舎の軒下まで移動させると首のタオルを外し、濡れた頭を包み込んで、濡れた手つきで水気を拭き取る。

びっくり顔でされるがままになっていた話は、玲那の両手から解放されるや、ばばっと左手を肉かせた。

「UIV ありがとうございます、井関さん。なんだか」

とそこまで表示された発言のラスト四文字が、戻ってきたカーソルで消された。

「なんだか、何？ 言っちゃいなくて」

笑顔の玲那に促され、今度はおずおずと指が動く。

「UIV なんだか、お母さんみたいなのです」

「あはははは」

もしかしたら初めて聞くかもしれない明るい笑い声を響かせた玲那は、タオルでランドセルまで拭いてやりながら言った。

「こっちこそ、超イインチャオなのに子供扱いしてわりーね。幼稚園行ってる妹がいつからさ、濡れてつと反射的に拭きたくなる的なの？」

……そうだったんだ。けど、だいぶ年が離れてるような？

というハルユキの思考を読んだわけでもあるまいが、タオルを首に戻しながら振り向いた



玲那が、肩をすくめて補足した。

「妹つつても、同じなのはチチオヤだけなんだけども。すげー元氣よくて、風呂上がり裸で走り回るんだよね……って、なんでこんな話してんだっつ。つか、ホウが腹へらしてっし。イインチョコ、餌やり準備！」

「ら、ラジャー！」

下克上な命令を受けたハルユキは、慌てて謎に駆け寄ると大きなバツダを預かった。三人で餌育小屋の中まで移動してから、謎が左腕にレザーガントレットならぬファルコンダローブを装着するのを手伝う。

その間に玲那がバツダから保冷タッパーを取り出し、蓋を開けた。謎が左手を高くかざすと、待ちかねたとばかりにホウが止まり木から飛び立ち、ぐるりと小屋の中を一回りしてから謎の手首に舞い降りる。

玲那が保持するタッパーから、謎は赤みの強い肉片を一切れずつ取り出し、ホウに与えた。コノハズタは尖ったくちばしで肉片をついばむと、顔を持ち上げて美味しそうに呑み込む。

ホウを引き取ってからの二十日間、毎日のように繰り返してきた給餌だが、いまま食事するホウを見ていると色々な考えが頭に浮かぶ。生きるということ、生かされているということについて、うまく言語化できない何かが心の奥底から湧き上がってくるのだ。

不意に、昼休みに聞いた生沢真優の言葉が、耳に響く。

やらなかったことを後悔するよりも、落選してがっかりするほうがずっといい。

生徒のその考え方はとても立派だと思うが、正直、生徒会役員に立候補することを想像するだけで息苦しくなってくる。成り行きで肯定的な返事をしてしまったものの、自分に選挙演説だの公開討論会だのができる気はまったくしない。

そもそも、こんなふうには怖じ気づいている時点で、立候補する資格などないのではと思えてならない。生徒会役員には、全校生徒の学生生活をより良いものにするために働きたいという熱意ある者が選ばれるべきだ。心のどこを探したって、そんな崇高な使命感は一ミリグラムも見つからない。いままですっと、自分のことだけでいいればいいだったし、たぶんそれはこれから変わらない……。

その時、最後の一切れをタッパから取り出そうとしていた隣が、その手をびたりと止めた。少し首を傾けてから、ばばっと片手でホロキーボードを叩く。

「UIV 有田さん、ホウさんにご飯をあげてみますか？」

「え……ええ？ でも、ホウは、四整宮さんの手からじゃないと何も食べないんじゃないの……。」

「UIV いままではそうでしたが、なんとなく大丈夫な気がしたのです」

「き、気がしたって……」

「UIV 私のカンは当たるのです！」

そんな会話を交わす間も、ホウは早くそれくれろと言わんがばかりにかつかつとくちばしを鳴らす。同じチャット窓を見ている玲那までが、ハルユキの脇腹をつつきながら囁く。

「やってみればいいじゃん！ イインチョコがやんないなら、あたしがチャレンジしたいし」

「わ、解ったよ……」

小声で答えると、ハルユキは意を決して右手で肉片を摘んだ。思ったより弾力のあるそれを、謎の左手首に止まっているホウに恐る恐る差し出す。

ホウは、まず顔をくりつと動かし、ハルユキを見た。次に肉片を見ると、顔を近づけ、戻し、また近づけ――。

指子抜けするほどあつかりと、ハルユキの手から肉片をついばみ、吞み込んだ。

「あ……食べた……」

「U・V ホウさん、おいしいって言ってるのです！」

笑顔になった隣が左手を高く持ち上げると、ホウはふわりと飛び立つ。小屋の中を三度旋回してから、止まり木に戻る。

満腹になった途端、昼寝タイムに突入しようとするホウを、三人は微笑みながら静かに見上げた。

コノハズタの左胸には、以前の飼い主が個体識別用マイタロチップを乱暴に挟り出した時の傷がくつきりと残っている。そのまま捨てられたホウは、出血で死にかけながらも松乃木学園

まで飛び、地面に横たわっていたところを誰に保護された。

それ以来、誰以外の人間を激しく警戒するようになってしまったホウだが、今日初めて、ハルユキの手から餌を食べたのだ。だからといって、ホウが全面的に自分を信頼してくれたとはまだまだ思えない。それでも、少しずつ変わりつつあることだけは確かだ。ホウも、ハルユキも、たぶん玲那も——もしかしたら誰も。

もつと変わる、のだろうか。

たとえば、大勢の人の前で、自分の考えを喋れるくらいに。

——もしメタトロンがここにいたら、たかがその程度のことで何を怯えているのですかとか言いそうだな。

そんなことを考えながら、ハルユキはうつらうつらしているホウをじっと見上げ続けた。

さすがに制服に着替えて帰るらしい井関玲那が、「ほんじやまた明日」と手を振りながら教室に戻っていき、二人きりになった誰とハルユキは、どちらからともなく顔を見合わせた。

虹彩にはんの少し緋色が走る大きな瞳でじっとハルユキを見詰めながら、誰は促すように軽く首を傾ける。どうやら、胸中の迷いをすっぱり見抜かれていたらしい。

「えと……四葉宮さん、ちょっと時間あるかな」

「U・V もちろんなのです」

すかさずそんな回答がウインドウに流れるので、ハルユキはちらりと空を見上げた。雨はまだ小降りで、しばらくはこれ以上崩れることはなさそうだ。

「じゃあ、ちよつとそこに座ろつか」

大きなタスノキの下に設置されたベンチを指さすと、謡は笑顔で頷く。スポーツバッグからウェットティッシュを取り出し、ハルユキのぶんも座面を拭いてから、ちよこんと腰掛ける。

「あ、ごめん、ありがとう」

懇縮しつつ、ハルユキも隣に座った。

ネガ・ネビユラス最年少メンバーにして最大の良心と言っている謡と二人きりで話ができる機会は意外に貴重だ。ほぼ毎日ホウの世話で顔を合わせるのだが、なぜか謡の世話を焼きたがる——その理由は今日判明したわけだが——玲那が帰り道の途中まで一緒に歩くことが多く、最近はなかなか内緒の話はできない。

いっそ井関さんがバーストリンカーになつちやえば、と一瞬考えてから、ラインストーンでキラッキラにデコられたニューロリンカーを思い出してそれはナイとかぶりを振る。そもそもこれから謡に相談しようとしているのは、加速世界がらみの話ではない。

いちど喧嘩いしてから、ハルユキは「生徒会役員選挙立候補もちかけられ事件」のあらましを説明し、どうすれば生沢さんが諦めてくれるか意見を求めた。

四つ年下の小学生は、可愛らしく首を傾けてから、素早くキーボードを叩いた。

「UIV その案件を相談するなら、もっと適任な人がいると思うのです」

「え……だ、誰？」

「UIV 少し待って下さい」

チャット窓にそう打ち込んだ議は、ハルユキには見えない仮想デスクトップをしばし操作すると、こくりと頷いた。

「UIV では、いまから相談に行きましょう」

「え……ど、どこに？」

その間に答える代わりに、議はベンチから勢いよく立ち上がるとハルユキのシャツの袖を引つ張った。促されるままにハルユキが立つと、ランドセルを背負いバッグを持って、ホウに別れの挨拶をしてから正門方面に歩いていく。

学校の外に出るのかな、と思いながら追いかけたが、旧校舎裏から前庭に出た議は、右方向に百八十度旋回して昇降口に向かった。来客用スリッパに履き替え、まだそれなりに生徒の残っている新校舎一階の廊下を学食とは反対方向に進む。やがて立ち止まった議の前にあるドアを、ハルユキは見上げた。掲示されているメタルプレートには、『生徒会室』の文字。

——それは確かに、生徒会役員選挙について相談するのに、あの人以上の適役はいないかもしれないけど！ でも今はまだちょっと心の準備が！

とハルユキが内心で叫んだ時にはもう、議はドアを音高くノックしていた。

「遅い！」

というのが、ハルユキと謡をソファセットに座らせた副生徒会長の第一声だった。

「す、すみません、飼育小屋にいたんで、ぐるっと旧校舎を回らないとここまで来られなくて

……」

慌てて弁解するハルユキを、黒雪姫は氷点下の視線で貫く。

「そのことではない。ラウンジでの一件についての説明が遅いと言っている」

「あ、そ、そうですね……大変すみません……」

確かに昼休みのミーティングが始まる直前に、黒雪姫は「あとでキッチリ説明して貰う」と言い、それに対してハルユキは「ハイ、それはもう」と答えた。昼休みのあとは授業があったし、そのあとは委員会活動があったわけだが、メールの一通も出さなかったのはハルユキの怠慢だ。

しかしいっぽうで、メールでは説明しきれない案件であることもまた事実なのだ。

「そ、それじゃ改めて、生沢さんが僕とタタをお昼に誘った理由について、説明しますです」
咳払いしてから、ハルユキは十分と少々を費やして、生沢真優の恐るべき要請について再度語った。

聞き終えた黒雪姫は、腕組みをしながらソファに上体を預け、

「なるほどな……。そういう話だったか……」

と呟いた。

「はい……。それで、どうすればうまいこと断れるか、先輩に相談したくて……」

「ン、まあ、いいんじゃないか？」

「……は？ いいって、何がですか？」

「もちろん立候補が、だよ。やってみたまえ、何事も経験だ」

「………はいい？ そ、そんなかるーく言われても!!」

「たかだか役員選挙如き、かるーく考えておけばいいのだ。命まで取られるわけなし」

「そ、そりやそうですけど、寿命は縮みますよ絶対！」

という黒雪姫とハルユキのやり取りを、謡はにこにこしながら聞いている。どうやら、黒雪姫のこの反応も予想していたらしい。

「お茶を淹れてやるから、少し落ち着け。二人とも、カフェインレスコーヒーでいいかな？」

「UIV ミルクたっぷりをお願いなのです」

「ば、僕もそれをお願いします……」

頃くと、黒雪姫は生徒会室の片隅に設けられている簡易キッチンカウンターに向かった。意外に手慣れた手つきでカップ三つとコーヒーポット、シュガーポット、ミルクジャーを用意し、戻ってくる。

「どうだ、役員になれば放課後にお茶し放題だぞ」

「そのわりに、書記の若宮さんも、生徒会長さんも、会計さんもないんですが……」

「さすがに期末テストの二日前だからな。いつものウィークデーなら恵がそこに座って優雅に本を読んでいるよ。会長君と会計君のコンビは忙しくてあまりここに来ないが」

「は、はあ……。とりあえず、頂きます……」

黒雪姫がカップに注いでくれたコーヒース対ミルク7のカフェオレに、シュガーポットの中に詰まっている色とりどりのフレーバーつき甘味タブレットから赤茶色のやつを選んで落とす。軽くかき混ぜて飲むと、香ばしいナッツの風味が口に広がる。

左に座る譲も、コーヒース対ミルク9のカップに乳白色のタブレットを投入し、ひと口飲むとキーボードを叩いた。

「U—V バニラ味だったのです」

「僕のはアーモンド味かな……」

「私はシナモン味が好きだな」

そうコメントした黒雪姫は、8対2の大人向けフレーバーコーヒースに口をつけてから、話を本題へと戻した。

「……ハルユキ君。キミは忘れているようだが、ほんの一ヶ月前にも、私とキミは生徒会役員選挙の話をしているんだぞ」

「えっ？ そ、そうでしたっけ……」

と答えながら、頭の奥にアーカイブしてある黒雪姫との全会話ファイルを高速サーチする。三秒ほどで、とあるシーンがヒット。場所は有田家ローカルネットのVRスペースで、日時はヘルメス・コード縦走レースの二日前だ。

確かに黒雪姫はハルユキに次期生徒会役員への立候補を提案し、それに対してハルユキは、「むむむむりむりむりですよー」と答えている。その後すぐに会話は低軌道型宇宙エレベータの解説へと移行し、問題の全話は記憶の表層から零れ落ちてしまった。理由は、どう考えても冗談だと思えなかったからだ。

「……思い出しましたけど、先輩、まさかアレ……本気だったんですか……？」

「もちろん本気だったさ、キミのカフェオレに入っているミルクの割合くらいにはな」

——ということは七割本気だったわけか。あな恐ろし。

ぶるりと身震いしながら、改めて黒雪姫の真意を問う。

「で、でも……この際、当選落選の話はさておいてですね、その、なんで僕に……？ 生徒会長はもちろん、副会長も、書記も、会計も、僕にちゃんと務まるとはまったく思えないんです……」

確かに生徒会役員は、飼育委員会での活動と文化祭でのクラス展示を引き合いに出し、ハルユキにも役員が務まると言ってくれた。だが実際のところ、飼育委員に立候補してしまったのは

いつものオッチョコチョイスキルが発動したからだし、クラス展示も技術的にはたいして高度なことはしていない。黒雪姫や生沢が立候補を勧めてくれる理由が、自分ではどうしても納得できないのだ。

働き加減になるハルユキを見て、真向かいに座る黒雪姫は、優しい微笑みを浮かべ——口ではかなり逆バクトルなことを言った。

「キミに役員が務まるかどうかは、この際二の次だ。私が立候補を勧めているのは、もちろんバーストリンカーとして様々なメリットがあるからだ」

「……………へっ？」

「そもそも、私が副会長をやっているのもそれが理由だと、いままでにも何度も言っているだろう？ 生徒会役員になれば、学内ローカルネットへのアクセス権限が拡大される。全校生徒の名簿を参照できるし、いまでは私がアレしたヒミツの外部アクセスゲートを開くことさえ可能だ。あとは、この生徒会室をレギオンの作戦司令室として利用できるしな。ただまあ、会長職だけはお勧めしないが。各専門委員会や部活動や学校管理部との交渉だの何だので、現会長の上岡君はとっても大変そうだからな」

「……………あの、副会長は、そーゆーことしないでいいんですか？」

「上岡君からの候補者チーム参加要請を承諾する時に、仕事を裏方の事務処理メインにして貰ったからな。ちなみに書記の恵の仕事は各種広報文書の作成、会計の西君の仕事は実は会長

のサボート全校で、会計業務は私がやっている」

「そ、そうなんですか……。じゃあ、真の役職を掃除と買い出しとお茶くみにして賣ったりすることもある……？」

「さすがに最初からそんなことを要求したら、その生沢さんとやらの信頼を失ってしまいかねないな」

苦笑すると、黒雪姫は軽い音を立ててカップをソーサーに戻した。

「しかし、その点では、生沢さんが会長志望というのは好都合だぞ。本来は会長並みに忙しい副会長候補も他に探してもらって、タカム君が会計、ハルユキ君が書記に立候補すれば、とりあえずもう一年間、ネガ・ネビュラスの拠点としての梅郷中の防衛は安心できる」

「な、なんで僕が書記なんですか？」

「だってキミは本が好きだろう？ いまどき自室に本棚があつて、紙の本が並んでいるような生徒はなかなかいないぞ。まあキミの場合はレトロゲームも並んでいるが」

「あれは父親が置いていった本ですけど、まあ、嫌いじゃないです……。でも、それと書記の仕事と、何か関係あるんですか？」

「文章というのは、子供の頃から本をたくさん読んでいないとなかなか書けない……と恵が言っていた。私も、キミの書いた広報文を読んでみたいしな」

そんなものを書ける気もまったくないが、いままでのように反射的に口から出ようとする

否定の言葉を、ハルユキはぐっと呑み込んだ。

生沢のように、人間としての黒雪姫に近づきたいという向上心も。

あるいは、梅郷中学校の生徒たちの役に立ちたいという公徳心も、残念ながら自分の中には見つけられない。

しかしだからと言って、バーストリンカーとして拠点を防衛するため……という動機からの立候補は果たして許されるのだろうか。副会長として立派に職責を果たしている黒雪姫ならまだしも、何の能力もないハルユキがそれをすれば、生沢真優と全校生徒を欺くことになるのでは……？

唇を噛むハルユキの左腕に、小さな手がそつと触れた。

微笑みを浮かべた四壁宮誼は、そのままハルユキの皮膚をキーボード代わりに叩いた。視界に、桜色のフォントが、ゆっくりとした速度で浮かび上がる。

「UIV 有田さん、大切なのは、がんばるかどうかだと思うのです」

「え………」

「UIV 動機はどうあれ、もし有田さんが生徒会の役員になったら、きつと一生懸命仕事をします。ホウさんのお家をがんばって綺麗にしようとしてくれた時みたいに。そして、それが、いちばん大事なことで私は思います」

「……………そうかな……」

議の笑顔から視線を外し、ぼつりと呟く。

辛いことや苦しいことはすぐ嫌になつて、逃げ出したくなつてしまふ。それがハルユキの、有田春雪という人間に対する自己評価だ。仮に黒雪姫がローカルネットのスカッシュゲーム・コーナーに引きこもるハルユキを見つけてくれなければ、いままあの惨めな日々が続いていたはずだ。飼育小屋を掃除した時だって、議が来るのがあと少し遅ければ結局途中で投げ出してしまつていたかもしれないのだ。

けれど、それでもいい、と議は言っているのだろうか？ 立派な動機や使命感がなくても、たとえ最後までやり遂げられなくても、何かを為そうと努力することがいちばん大事なのだと、そういうことなのだろうか？

「結果なき努力に意味があるのか……。キミはいま、そう考えているんだろう？」

胸中の自問を黒雪姫にずばり言い当てられ、ハルユキはハッと顔を上げた。

現副生徒会長は、漆黒の瞳を中庭方向の窓に向け、穏やかな声で続けた。

「……まだ小雨が降っているが、今頃グラウンドではチユリ君が大会前の走り込みをがんばっているだろう。だが、仮に大会で優勝できなかった……あるいは目標タイムに届かなかったとしたら、いまのチユリ君の努力は無意味なのか？」

「……………」

そんなことは絶対にない。頭の中でそんな考えが弾けたが、声に出すことはできず、ハルユ

キは両手を握り締めた。

「ハルユキ君、いろいろ言つたが、私はキミに役員への立候補を無理強いするつもりはまったくないよ。断りにくいというなら、私から生活さんに話をしてやつてもいい。だが……キミは自分に能力がないからと言っているが、本当にそれが理由なのか？」

「え………」

ハルユキが思わず眼を見開くと、顔の向きを戻した黒雪姫が、頭の奥まで貫き通すような視線をまっすぐに投げ掛けてくる。

「もしキミが、選挙に落選してはじめの思いをすることを恐れているのなら……そんな動機で風込みして欲しくない。なぜなら、たとえ落選しても、チームを組んで選挙活動ががんばったという経験は、きつとキミの大きな糧になると思うからだ」

「……………僕みたいのが立候補して、みんなに笑われたり、馬鹿にされたりしても……それでも、ですか」

「笑わないよ」

黒雪姫は、凍とした声でそう言い切った。

「梅郷中は、前に出てがんばる者をみんなで後ろから笑うような腐った学校ではないからな。たとえ不心得者が一人や二人いたとしても、そんな奴こそ笑っておけ」

「……………」

黒雪姫の言葉は、ハルユキの心に強く響いた。

——この人は、梅郷中が好きなんだ。さっきは、立候補したのはレギオンのためって言うってたけど……でもきつと、それだけじゃない。学校を良くしたいっていう気持ちだって、ちゃんとあつたはずなんだ。

——僕は、どうなんだろう。この学校が好きなんだろうか。入学したのは、母さんがここに決めたからだけど……いじめられてた頃は、ここに入ったことを毎日後悔してたけど……
——でも、いまは、たぶん。

ハルユキは大きく息を吸うと、途切れ途切れの言葉で答えた。

「あの……、僕には、まだ、決められません。自分がどうしたいのかも、よく解らないんです。でも……考えてみます。ちゃんと、真剣に、考えてみます」

「ン、それがいい」

微笑みながら、黒雪姫はゆっくりと頷いた。隣で、益もこくこくと頭を動かす。

「立候補者の登録期限は夏休み明けだからな。タタム君とも、よく相談して決めるといい。と言っても、生徒さんも候補者勧誘の都合があるだろうから、早いに越したことはないが。——さっきも言ったが、無理強いはいしないよ。キミが真剣に考えて答えを出してくれるのなら、それでいいんだ」

「UIV また相談したくなったら、いつでもうえるかむなのです！」

「誰がそう付け加えると、黒雪姫も「もちろん私もだぞ!」と対抗した。一瞬睨み合ってから、明るい笑い声を響かせる。」

そんな二人を見て思わず口許を綻ばせながら、ハルユキは胸の奥で呟いた。

——もちろん、僕は、この学校が好きだ。だって、黒雪姫先輩や、四葉宮さんに出会えたんだから。」

「はい、相談させてもらいます。タクともちゃんと話し合って、一学期中……いえ、来週中には決めたいと思います」

そう口にしたハルユキに、黒雪姫はニヤツと笑ってみせた。

「ならば、明後日からの期末テストは好成绩でクリアして、心配事を少しでも減らさないとな。また勉強合宿をやるというなら付き合うちにやぶさかではないが」

「い、いえ、もうたつぷり見てもらいましたから!」

「ン、そうか? なら、コレも不要かな?」

肩をすくめながら、黒雪姫が指先で圧縮ファイルのアイコンをくるくるさせる。

「……なんですか、ソレ?」

「私が二年生の時に、過去問十年分のデータから作った全科目の予想問題集だ。ちなみに全問正解すると、バタフライ・ポイントが二百点加算されるおまけつきだぞ」

「に、にひやく!」

バタフライ・ポイントとは、黒雪姫の自作アプリからたまに出現する小さな魔を捕まえると一点加算され、千点溜まった時に何かが起きると言われている謎のポイントだ。がんばって溜めてはいるが、ようやく三百ポイントそこそこ。しかしここで二百ポイントを獲得できれば、一気に五百の峠を越えられる。

「や、やります！ ください！ ぜひくださいー」

「では、挑戦してみたまえ」

黒雪姫がびんと指を弾くと、アドホック接続を経由してファイルが受信される。へへえーと押し頂くハルユキの隣で、謎が不満そうに口を尖らせる。

「UーV サッちゃん、小学四年生用の問題集はないのですか？ 私はまだ五百ポイント溜まっていけないので、ターさんに追い抜かれてしまうのです」

「ム、そ、そうか。では、夏休み向けに作ってやろう」

「UーV やったーなのです！」

両手を打ち合わせてから、謎は少し首を傾げ、ぼちぼちとキーボードを叩いた。

「UーV ……それ、よく考えたら、夏休みの宿題が増えるだけなのです……」

今度は、黒雪姫とハルユキが声を揃えて笑う音だった。

「ヘイ！」

大排気量Vツインエンジンがどぶろおおんと吠え猛る。

「ヘエイ！」

極太のラジアルタイヤがどよきゆきやあんと路面を焦がす。

「ヘエエエエエ————イ!!」

前輪をわずかにリフトさせながら、あちこちトゲトゲしている大型アメリカンバイクが闇を切り裂いて加速する。

「来たぜ来たぜエ、世紀末ステエエ————ジー スペシャル・エフエクスで、俺様の戦闘力一・五倍だぜえええ————ッ!!」

「そ、そんなエコヒイキな特殊効果ないし！」

反射的に突っ込みを入れながら、ハルエキは猛スピードで迫り来るバイクを待ち構えた。

「それに、一・五倍ってちよつと微妙だし！」

「黙らっシャラアア————ッブ!! ンなことは、俺様のオー! ブランニュー必殺技をオー!

見てから言いやがれえええ————ッ!!」

……また、なんか新しいやつ？

と一応警戒するハルユキの視線の先で、懐懐ヘルメットがトレードマークの世紀末ライダーことアツシュ・ローターは、勢いよくシートから飛び上がる。右足をハンドルバーに、左足をシートに置いて、サーファアのような体勢に移行。

「それって、いつものVツイン準じやないですか！」

「デイファレエ——ントツ！ 目ン玉かつぼじってよく見やがれツ！」

「かつぼじるのは耳の穴ですよ！」

「じやあ両方かつぼじれえ——い！ 行つくぜえええ、新・必殺！（マックスVツイン準）」

——ツ！！

なんだかちよつとだけかつこいような気がしなくもない技名発声——と言ってもシステムに登録されている本物の必殺技ではなく、勝手にネーミングしているだけなのだが——とともに、アツシュは体を前傾させた。途端、前輪のブレーキローターから火花が飛び散り、急減速すると同時に後輪が白煙を噴き上げて高速空転。

んなことしたら前に吹っ飛ぶ——と思ったのだが、アツシュが体を右に倒すと車体も倒れ、後輪がスライドして前に出る。前輪の接地点を中心に、ぐるんぐるんと水平回転しながら、バイクはなおもハルユキ目掛けて突っ込んでくる。ひび割れたアスファルトの路面に、タイヤが真っ黒な液形を刻みつける。

——おお、これはほんとにすごい。マックスターンしながら前進してる。

現実世界では絶対に不可能であろう高等技術に、思わず拍手しそうになるが堪える。多少速度が落ちたとはいえ、バイクはもう目の前まで迫っている。

バイクが高速水平回転しているので、右か左に飛び避いての回避はやや難しい。ならば、あとは真上にジャンプして避けるしかない。充分に引きつけてから、

「とおっ！」

掛け声とともに、ハルユキは全力で跳んだ。軽量のシルバー・タロウは、翼を使わなくても三メートル近く垂直跳びできる。バイクの上に立っているアッシュの頭も軽々飛び越えられる——はずだったのだが。

「——新・必殺バート2ツ！ 《ジャックナイフ・ギロチン》ッ!!」

新たな技名が響き渡ったその瞬間、バイクの水平回転が垂直回転に切り替わり、鋼鉄の巨体は弾かれたように倒立する。ハルユキの眼前に、白煙をまといつて高速回転するリアタイヤが迫る。

絶妙なタイミングの奇襲に回避も防衛も間に合わず、ハルユキはせめてお腹を引っ込めながら体を前に倒した。辛うじて直撃は免れたが、太いタイヤがアバターの腹部に接触し、膨大な火花を発生させる。

「うわっちやちやちやちや——」

悲鳴を上げながらも、回転に逆らったら背中までケズられると直感し、タイヤに体を預ける。すると、まるでカタバルトのように体が引つ張られ、前方にすばーんと射出される。

ひりひりするお腹を押さえて水平飛行しながら、体力ゲージを確認。いまの接触で一割以上も減少し、残りは約六割だ。

いっぼう、前転倒立状態に突入したアメリカンバイクは、バランスを取り戻せずそのまま前に倒れていき――。

「フッ!? ノオオオオオ――ッ!!」

という甲高い悲鳴を振りまくライダーを巻き込んで、がちやーんと逆さまにクラッシュした。向こうの体力ゲージも、同じく六割まで減少。

翼で姿勢を制御しつつ着地したハルユキは、バイクの下敷き（くさし）になってじたばたがいているアッシュ・ローラーに追い撃ちを入れにいくか、それとももう一つの戦場に救援にいくべきか、少し迷った。

自分の体力ゲージの下には、チームメンバーのミニゲージが並んでいる。

一番上には、シヨコラ・バベッター。その下に、ミント・ミトン。更にその下に、ブラム・フリッバー。

彼女たちが、レギオン（ブチ・バケ）のメンバーだったのは、昨日までのこと。二〇四七年七月十二日金曜日の午後五時をもって、ブチ・バケは解散した。そして同日同時刻、三人は、

レギオン（ネガ・ネビュラス）への加入を果たしたのだ。

それから二十四時間後となる、七月十三日土曜日の夕方。ハルユキは、シヨコラ組の三人とチームを組んで、杉並第三エリアの防衛戦に出撃した。

攻撃側は、緑のレギオン（ダレート・ウォール）から三名。おなじみアツシユ・ローラーと、彼の弟子であるブツシユ・ウータン、そして——オリーブ・クラブ。

右上に並ぶウータンとオリーブの名前を感慨深く見詰めてしまつてから、ハルユキは慌てて双方の体力ゲージをチェックした。ステージ中央の（要塞拠点）を獲り合っているシヨコラたちとウータンたちは、人数の差にもかかわらず、ウータン組がやや優勢のようだ。

しかし、それも仕方がない。いままで領土を持っていなかったシヨコラたちにとっては、これが初めての領土戦なのだ。拠点の使い方や前進後退のタイミングなど、領土戦ならではのテクニクが身についていないことを思えば、むしろ善戦していると言つていいだろう。

バイクの下からようやく遠い出そうとしているアツシユをもう一度見やり、

「すみませーん、中央行つてまーす！」

と声を掛けてから、ハルユキは翼を広げて離陸した。

「ドント逃げんなキヤラス野郎おっ——！！」

という怒りのシャウトに軽く手を振り、華々しいライトエフェクトに包まれている要塞拠点目指して一直線に飛行。

二十分後。

仲良くレッドゾーンに突入したアッシュたち三人の体力ゲージを見ながら、ハルユキは敵軍に呼びかけた。

「あの、アッシュさん！」

「あんだキヤラス野郎！」

という返事は威勢がいいが、アメリカンバイクは前後輪ともパンクしてマフラーから黒煙を上げている。ウータンとオリーブも、バイクの近くにへたり込んだままだ。

「ダメモトで提案するんですが、そちらはみなさん真っ赤ですし、こちらはまだ黄色なうえに要害拠点押さえていますし、ここは勝負アリということにしませんか」

「ブルシー——ットー！ 残りワンドットからの大逆転が！ 俺様たちラフバレー・ローラーズのハート・アンド・ソウルなんだっつうのアンダスダン!!」

なんですかそのチーム名、という質問を省略し、ハルユキはヘルメットの後頭部をかりかり掻いた。

「は、はあ、解りました」

背後でびしっと身構えているシヨコラたちをちらりと見てから、

「それじゃ、最後まで戦闘を……」

「でもまあ、おめーがどうしてもつーならまあいいや」

「は……はい？」

「んじや、今日のところはドローってことで」

「は……はい？」

「んで、どうすんだよ？ あと五分しきやねーぞ」

「は……はい……」

ハート・アンド・ソウルをそんな簡単に放り出していいんですかとか、口で引き分けにしても残りゲージ量からシステムがこっちの勝ちに判定するんですがとか色々突っ込みたかったが、確かに時間もないのでハルユキはこくこく頷いた。

「えと、ちよつと話がしたくて……」

「んじやその拠点で話すか。おらウー、オリー、移動すんぞ」

「へーいでヤンス……」

「うっす、兄貴」

立ち上がった二人と一緒に、パンクしたタイヤでまたまた走っていくバイクを、ハルユキは追いかけてようとした。すると後ろから、つんつんと背中をつつかれる。

振り向くと、そこには実に微妙な表情を浮かべたショコラが立っていた。

「……………信用していいんですの、あのガイコツ頭？ 話し合いに応じるフリをして、襲いか

かつてきたりしませんの？」

「う、うん、大丈夫。そんな腹芸が使える人じゃないから」

「それはまあ、納得できますわ」

シヨコラのコメントに、ミントとブラムがこっくり頷く。

さすがアツシユさんは人徳があるなあ。と考えながら、ハルユキも歩き始めた。

円形の要塞拠点の一角に、七人が輪になって座ると、ハルユキは改めて頭を下げた。

「すみません、大事な領土戦なのにわがまま言つて」

「それはいいから、話つてなんなんだよ？」

両手を広げるアツシユから視線を外し、横に座るブツシユ・ウータンとオリーブ・ドラブを見詰める。二人の胸部装甲には、もちろん何も貼付いていない。

「えと、話つていうか……ただ、ひと言伝えておきたくて。あの……レギオンは違いますけど、

ウータンさんとオリーブさんが無事に戻ってきてくれて、嬉しかったです」

ハルユキがそう言うのと、アツシユは何だそんなことかと言わんがばかりに肩をすくめ、ウータンとオリーブは照れくさそうに頭を掻いた。

「あのなあ、あつたりまえのオフコースだろ。ダレウォはちつとヘンなもんに手玉出したからつつつて追い出すようなケチくせえレギオンじゃねーし、ウーとオリーもいつまでもうじうじ引きこもつてるようなダークルーツ野郎じゃねーよ」

「だ、ダークルード……って何です？」

「暗い根っこ、つまりオクラだよ！ テストに出るからリメンバーしとけ！」

「……………絶対出ないし……………ダークとかゆうからＩＳＳキット関係の何かかと思つたじゃないですか、人騒がせな……………」

ぶつぶつ言うハルユキに代わって、ショコラが遠慮がちに口を開く。

「……………あのお話からすると、そちらのお二人は、《あれ》に感染してしまつていたんです……………」

オリーブと顔を見合わせたウータンは、恐れを振り切るように強く頷いた。

「そうでヤンス。オイラとオリーブは、ＩＳＳキットに手を出してしまつたんス」

続いてオリーブが、大きな両手を握り締めながら言う。

「しかもオレは、アッシュの兄貴まで裏切つて、狩ろうとして……………でも兄貴は、そんなオレを許してくれた。ＩＳＳキット本体が破壊されてから、毎日何十回もマツチングリストをチェックして、オレに会いにきてくれたんだ。だからオレは、バーストリンカーでいられる限り、ずっと兄貴について行くって決めたんだ！」

「オイラもクスー！ チーム・ラファレリー・ローラーズはエターナルにネバー不滅クスー！」

二人が感極まつたように右拳を突き上げると、アッシュ・ローラーは照れくさそうな唸り声を上げた。

「あのなあ、ンな偉そうなモンじゃねえよ。結局俺様だつてキットに感染しちゃったんだしさ。ま、あれだ。フィニッシュよければオールライトだろ」

「それでヤンスねー」「さすが兄貴！」

わっはっはと笑う三人を、まあ確かに終わりをければなあ、と思いながら眺めていると、いままで黙っていたミント・ミトンが、小声で発言した。

「あのさ、ウータンくん、オリーブくん、試いていいかな」

「も、もちろんでヤンス」

「二人は……悩んでないの？ ISSキットを作った奴らや……二人にキットを渡した人のことを」

「……………」

ウータンたちが何かを答えるより早く、ハルユキは鋭く息を呑んだ。

ISSキットに寄生され、仲間を裏切ってしまったのはウータンとオリーブだけではない。ミントとプラムも、同じ経験をしているのだ。なのに、二人をまるで気遣いもせずにキットの話題を出してしまった。この四人チームのリーダーを任されておきながら、そんな配慮もできないなんて。

体の向きを変え、謝ろうとしたハルユキの右肩を、シヨコラが軽くつついた。小さなフェイスマスクを近づけ、囁きかけてくる。

「大丈夫ですわ、クロウ。ミンミンとプリコも、もうあの目のことは乗り越えています」

「でも、なら、なんであんなことを……」

「それは……」

シヨコラの囁き声は、ブッシュ・ウータンのきっぱりした答えに遮られた。

「キットの誘惑に負けたのは、オイラたちの責任なんス。もちろん、加速研究会なんて連中はとつとといなくなって欲しいツスけど……」

「でも、オレたちにキットをくれたアイツのことは、恨んじやいないよ」

そう続けたオリーブ・ダラブが、楕円形のアイレンズを世紀末ステージの暗い空に向けた。

「ただ……ちよつと心配だな。アイツにも、オレたちみたいに、戻れるところがあればいいんだけどな」

その言葉を聞いたブラム・フリッパが、ゆっくりと頷いた。

「わたしも、そう思いますう。いま、どこにいるんでしょうか……」

皆と一緒に、ハルユキも夜空を見上げた。

心の中で、ISSキットによる加速世界の均質化を目指し、ネガ・ネビュラスとの最終決戦に敗れて去っていったバーストリンカーに呼びかける。

あんたはいま、どこで何をしているんだ……マゼンタ・シザー。

七人はそのまま、残り対戦時間がゼロになるまで、それぞれの思いを抱えたまま無言で座り

続けていた。

領土戦ステージから現実世界に帰還したハルユキは、自分の部屋のベッドに横たわったまま、ふうーっと長く息を吐いた。

ホウの世話を終えてすぐに下校したので、領土戦は自宅からの参加だ。ゆっくりと瞼を開けると、夕焼けの色に染まった天井が目に入る。今日は一日いい天気で、予報では明日も晴天が続くらしい。

早く帰ってきたのは、土日のぶんの宿題を今夜中に終わらせてしまおうと思ったからだ、が、少し開けた窓から吹き込んでくる乾いた風が気持ちよくて、なかなか起き上がるタイミングが測めない。よしあと十数えたら起きる、いや二十、やっぱり三十にしよう、などと考えながら往生際悪くゴロゴロしていると――。

視界中央に、メール着信を知らせるアイコンが点滅した。差出人はチユリ。急いで右手を持ち上げ、開封する。

『移動前で時間ないからメールでごめんね。領土戦おつかれさま！ あたしは準決勝で負けちゃったけど、自己ベスト出たからまあ満足かな。明日、楽しみなね。寝坊すんなよ！』
という文面を二回読んでから、ハルユキは返信ボタンを押した。



決勝戦には進めなかったようだが、チユリが出場したのは東京都大会なので、準決勝進出は立派なものだ。中学校体育連盟のホームページで大会動画を観ておこう、と頭にメモリながらホロキーボードを叩く。

「チユも大会おつかれさま。自己ベストおめでとう！ 領土戦は、シヨコたちががんばってくれたおかげで全エリア防衛したよ。詳しいことは明日話す。そっちも早く寝ろよ！」

送信ボタンを押してメーラーを終了すると、ハルユキはよしーと気合いを入れた。スリーカウントで起きる、一、二……とそこで数えたところで、今度はボイスコールが着信する。

同じく部活の大会に出ていたタタムからだ。体の力を抜き、応答ボタンにタッチ。

「おす、タタ」

「やあハル、領土戦おつかれさま。どんな感じだった？」

幼馴染の言葉に、思わず苦笑しながら答える。

「まずはそっちの結果から教えてくれよ。大会、どうだった？」

「ああ、うん。団体戦も個人戦も、どうにかベスト8までは行ったよ」

タタムが出場していたのは、都大会の予選となる東京都第3ブロック中学校夏季剣道大会で、たしかベスト8に入れば出場権が得られるはずだ。

「おお、じゃあ次は都大会だな。おめでとうー」

「ありがとう。かなり厳しいだろうけどね」

「そう言わないで、全国まで行ってくれよ。……チエは、準決勝まで行ったみたいだな」

「うん、ぼくもメダル貰ったよ。明日は、自己ベストのお祝いしてあげないとね」

「お前にもな。ああ、こっちも領土戦は全部防衛したからさ。それで……オレとシヨコたちが守ってたエリアに、ダレウオのブッシュ・ウータンとオリーブ・クラブが来たよ。二人とも、元氣そうだった」

ハルユキがそう伝えると、タカムはほっとしたように「そうか……」と呟いた。

「良かった。彼らはレギオンに戻れたんだね」

「うん、アツシユさんが頑張ってケアしたみたいだ。三人でラフバレー・ローラーズとかいうチームまで結成してたよ」

「はははは、それはぼくも戦ってみたかったな」

愉快そうに笑うタカムに、少し遠ってから、ハルユキは告げた。

「それで……戦闘が終わったあとに、シヨコたちも交えて少し話をしたんだけどさ。ウータンやオリーブ、それにミントやブラムも、あの人のことを気にしてた」

「あの人の……マゼンタ・シザー、だね」

「ああ。マゼンタさんは、ISSキットを広めようとしたんだし……とくにミントやブラムやアツシユさんはハサミでむりやりに寄生させられたんだから、恨む権利はあるだろうけどな。でも、これはオレもだけど、あの人のことを加速研究会の奴らと同列にはどうしても考えられ

なくてさ」

「……………ぼくにはもともと、マゼンタさんを悪く言う権利はないよ。自分から世田谷エリアに行つて、ISSキットを分けてくれつてお願いした身だからね……」

静かにそう呟くタタムに、ハルユキは思ひきつて問いかけた。

「なあタタ、お前も……マゼンタさんが心配か？」

「うーん……心配っていうのは少し違うかな。あの人も、ぼくらに心配なんかしてもらいたくないだろうし。……ただ、このまま加速世界から消えて欲しくない、とは思うよ。あんなに強いんだから、次はISSキットなんてものに頼らないで、自分の力で戦つて欲しい……そんな感じかな。それは、ぼく自身が進まなきゃならない道でもあるしね……」

「データサイドに落っこちかけたのは、オレも同じだよ。ていうか、オレのほうが重症だったもんね」

「なんだか、変な白慢だなあ」

二人で、力なく笑う。

少しずつ夕陽の金色を濃くしていく天井を見上げながら、ハルユキはぼつりと言った。

「なあタタ、突然だけどさ……明日のグレウオとの会談の前に、オレたち二人とも、レベルを6に上げないか？」

「ほ、本当に突然だね。その提案は、マゼンタさんの件と関連してるの？」

「してるようなしてないような……。あのさ、現状じゃ加速世界にレベル10は一人もいないんだから、オレたちのレベル5がちょうど真ん中ってことになるだろ？　ザ・ミドルレベルって言うかさ」

「まあ、そうだね」

「だから、オレ、どっかでレベル6になることにビビってたんだよな。6はまだハイランカーとは言えないけど、でも（上のほう）ではあるわけだし。次にレベル上げならもう言い訳してもらえないっていうか……。実際、レベル6だと、7とか8の人たちもけっこう遠慮なく乱入してくるみたいだし」

「……うん、確かに、言われてみればほんとに気後れは感じてるかもしれない。実際、もう安全マージンは充分あるのに、レベルアップのことは考えないようにしてたしね……」

「効率良くポイントを増やしたいなら、ハイランカーから乱入されにくい5で止めておいたほうがクレーバーなのかもな。でも……マゼンタ・シザーはレベル6でずっと戦い続けてたんだって思ったら、オレもいつまでもビビってられない気がしてき……」

「ぼくらの約束もあるしね」

「ああ、そうだよな」

そこで、二人はしばし口を閉ざした。

ハルユキとタタムは、二人ともレベル7になったら、とことん本気でとびきり全開な対戦を

すると約束している。恐ろしくもあり、楽しみでもあるその戦いを実現するためには、いつまでもミドルレベルに甘えてはいられないのだ。

「よし、じゃあ、ハル。いま上げよう」

「えっ、いま?」

「思いついたが吉日^{きふじつ}って言うだろう? どうせ、明日の会談まであと二十四時間もないんだ。なら、いまでもいいじゃないか」

「……………そ、そうだな。1ポイント消費しちゃうけど、それは今度タッグ戦でもして取り戻そうぜ」

ベッドの上で、体をまっすぐに伸ばす。レベルアップ操作をするには、初期加速空間^{初期加速空間}に入っ
たうえで〈インストール〉を開かなくてはならない。

「じゃあ…………スリーカウントでダイブするぞ」

「オーケー」

タタムの返事を聞いてから、大きく息を吸う。

「スリー・ツー・ワン…………」

二人、声を揃えて。

「バースト・リンク!!!」

夕陽に染まる天井も、ビルトインの大型書架^{大型書架}も、空を漂う光の粒子までもが透き通った青

に変わる。

桃色プタアバターの姿でびよんと飛び出したハルユキは、ベッドの奥にあるライティングデスクに着地した。ちらりと室内を見回すが、ボイスコール中のタタムとは直結していたわけではないので、自分以外には誰もいない。

正確には、ベッドの上に生身のハルユキが寝転がっているが、この部屋には当然ながらソーシャル・カメラがないため、ニューロリンカーの内蔵カメラで捉えられない部分は推測補完されている。生ハルユキの顔もたいへん適当な造形になっていて、見ているとげんなりしてくるので、ぶいっと顔を逸らして仮想デスクトップの「B」のアイコンを叩く。

開いたインスタ・メニューから、ポイント操作のタブに移動。更にレベルアップ操作画面に移動してから、現在の保有バーストポイントと、レベルをさらに上昇させるための消費ポイントを見比べる。東京ミッドタウンでの戦いでメタロイド第一形態を撃破した時にかんりのポイントが加算されたせいもあって、タタムが言っていたとおり安全マージンは充分だ。

それでもレベルアップボタンを押すには勇気が必要だったが、ここで怖じ気づいたら加速に消費したポイントが無駄になってしまう。プタアバターの、小さなひづめのついた右手を振り上げ、思い切りボタンを叩く。

クールかつエキサイティングなファンファーレが鳴り響き、現在のレベルを示す5の数字が炎に包まれて燃え尽きる。炎はしばしウインドウの中で躍つてから、数字の6を描き出し、消

える。

……………上げちゃった。

と思ったのもつかの間、自動的に切り替わったインストの画面を、ハルユキは食い入るように凝視した。そこには、バーストリンカー人生で最大の楽しみの一つと言っていていいであろう、〈レベルアップ・ボーナス選択メニュー〉が表示されている。オブションの数は、これまでと同じ四つ。

左上には、レベル6必殺技〈ディジット・バシユート〉。

右上には、同じくレベル6必殺技〈バレット・ブルーフ〉。

左下には、強化外装〈ルシード・ブレード〉。

そして右下に、飛行アビリティ性能強化。

ハルユキは、いままでのレベルアップで与えられた四回のボーナスを、全て飛行アビリティの強化に注ぎ込んだ。先日の対戦でショコラ・バベッターに使った〈持ち上げ落っこし作戦〉はその強化があつてこそ可能な技だし、スピードを出さなければ最大四人のアバターを抱えて運べるなど、シルバー・クロウのポテンシャルを最大限に引き出す選択をしてきたと信じている。

しかし、だからといって、煩惱を断ち切って即座に右下のボタンを押せるほど悟りを開いているわけでもない。

「う、うおお……なんか必殺技も強化外装も全部かつこよさそう、じゃなくて強そうだなあ……」
 毎回言ってるけど、お試し期間がちよつとでもあればなあ……」

短い腕を組み、うーむうーむと唸る。

十秒後、出した結論は――。

「……じっくり考えて決めよう。ポーナスはあとからでも取れるし。うん、そうしよう」

眩き、インスト・メニユーごと消す。

ふうっと息を吐き、加速時間を確認すると、まだ二十五分も残っている。せっかくポイントを使ったことだし、残り時間を有効に利用しようとして決めて、仮想デスタトップから宿題アプリを起動させる。

「こんなことなら、タクを呼んで直結すればよかった」

独りごちながら、いちばん大変そうな数学の宿題を開く。しかし、昨日返却されてきた期末テストが過去最大級にいい点――といってもチユリといい勝負でタカムには遠く及ばないが――だったので、勉強そのものへの苦手意識は少しだけ消えている。

「よし、この加速中に、五問……いや四問解く！」

自分にそう宣言し、最初の二次方程式を睨む。

二十五分後――現実時間では一・五秒後、加速が終了したハルユキは、開いたままの宿題ア

ブリのセーブボタンを押しながらハフ——と溜息をついた。途端、

「その数れようは、レベルアップ・ボーナスの選択に迷いまくったか、中で宿題をしてきたかのどっちかだろ」

頭の中に、笑いを含んだタタムの声が響く。

ボイスコールの回線が繋がったままであることを忘れていたハルユキは、慌てて答えた。

「し、宿題だもんね。ボーナスは十秒で決めたー」

「へえ、どんなの取ったんだい？」

「いや、後回しにするって決めた。そういうタタは、ボーナス取ったのか？」

「もちろんぼくも後回しさ。これからは、自分でよく考えて取るって決めたからね」

タタムは、レベル4までのボーナス三つを、《親》の命令で全て必殺技にしてきた。それを悔いたこともあったようだが、だからこそ、これからは自分の頭でとことん考えることにしたのである。

「そうだな。もし明日時間あったら、先輩や師匠たちにも相談してみようぜ。まあ、あの人たちのことから、直球なアドバイスは絶対くれないと思うけどさ」

「ははは、間違いないね。でも、楽しみだな……おっと、だからってレベルアップ・ボーナスのことばかり考えてぼーっとしたりするなよ、ハル。明日のグレート・ウォールとの会談は、ネガ・ネビュラスの今後を左右するような重要イベントなんだからね。集中しないと」

「うん、解^{わか}ってる。一言一句聞^きき逃^{のが}さないよ」

「それに、状況によつては、もしかしたら………」

「え？　もしかしたら……？」

「あ、いや、もしかしたら、ぼくたちも発言を求められるかもしれないからね」

軽く何かをごまかされたような気もしたが、こういう時のタタムを追及してもたいてい無駄なので、ここは頷^{うなづ}いておくことにする。

「そうだな。ともかく……明日は渋谷エリアに入ったその瞬間^{しゅんかんとく}から、ぼっちり気を引き締めて行こうぜ、タタ」

「うん、グローバル接続は切ると思うけど、お店とかのローカルネット経由で乱入されないとも限らないからね。何があつてもマスターを守るのがぼくらの役目だよ、ハル」

「おう。がんばろうぜ！」

「がんばろう！」

と言ひ交わし、タタムには見えないがぐっと右手を握^{にぎ}り締^{しめ}めると、ハルユキは通話を終了させた。

そう。明日、黒雪姫^{クロユキヒメ}は、加速世界最大のレギオンたるグレート・ウォールの支配地に生身で乗り込むのだ。しかもそれを、向こうの幹部たちも知っている。よもや緑の王本人^{おうじん}が闇討^{くみう}ちを仕掛けてくるとは思わないが、あらゆる可能性に備えるのが、主に仕える騎士^{きし}の役目だ。

明日は、杉並すぎなみを出てからまた解つてくるまで、絶対に油断しない。そう心に刻み込みながら、ハルユキは数学の宿題を再開した。

絶対に、油断しない。

そう決めていたはずなのに。

それが、なぜ、どうして——！！

「……ほんと、どうして、こうなっちゃったの……」

眩^{くら}きながら、ハルユキは全身の力を抜き、透明な浮き輪に体を預けた。

涼しげな水音と、子供のはしやぐ声が鼓膜^{こまく}をくすぐる。窓から差し込む日差しが周囲の水面に反射し、きらきらと不定形の輝^{きらめ}きを生む。摂氏二十八度に保たれた水が、背中や手足に心地良い冷たさを伝えてくる。

七月十四日日曜日、午後一時。

ハルユキは、だぼつとしたサーフパンツ一枚の格好——もちろんニューロリンカーは着けたまま——で、二十五メートルプールの片隅にぶかぶか浮かんでいた。

南側の壁は全面が窓になっていて、地上百五十メートルの高さから、渋谷や代官山^{しろや}、目黒^{めくろ}の街並みが一望できる。

「……すげーなー、オレこんな高いところにあるプール初めて」

ハルユキが眩くと、近くで同じように浮遊しているタカムが頷いた。海パンはスポーティなスパッツタイプで、さすがにメガネは外している。浮き輪もビート板も使っていないが、運動万能なだけあって、手足をゆっくり動かすだけで浮力を得ているようだ。

「ぼくも初めてだよ。これだけの量の水が高層階にあると思うと、ちよつと不安になるよね」
「えと……このプールで、水が何トンくらい？」

「縦が二十五メートル、横は八メートル、深さは一・五メートルくらいかな……。それで計算すると容積がちょうど三百立方メートル、つまり重さは三百トンだね」

「さ、三百トンで！ よく床が抜けないなあ」

「さすがにこのビルは大丈夫だと思ふよ。ラヴィン・スクエアが開業したのはオリンピックの頃だったはずだし」

そう言つて、タカムも意外の重さを見上げる。

（渋谷ラヴィン・スクエア）は、二十七年前の東京オリンピックピクタと同じ年にオープンした、渋谷駅周辺の再開発地区だ。駅の東側にそびえる高さ二百三十メートル、地上四十六階建てのオフィスビル（渋谷ラヴィン・タワー）を中心に、駅西側には百八十メートル級の複合タワーマンションが二棟、そして南側には同じく高さ百八十メートル、地上三十四階建ての商業ビル（サウス・タワー）が存在する。

明治通りを挟んで建つ、二〇一二年開業の渋谷ヒカリエがやはり高さ百八十メートルだから、

合計五種もの高層ビルが狭い範囲に密集しているわけだ。名称の（ラヴィン）はLavineではなく、峡谷を意味するRavineからつけられたらしい。

ハルユキたちが浮かんでいるプールは、サウス・タワーの上層階に入っている、二重の意味でお高いホテルの中にある。基本的には宿泊客専用施設で、しかもチェックアウトとチェックインの狭間の時間帯なので、ハルユキたち以外の利用者はほとんどいない。プールサイドのデッキチェアに大人が三、四人、水の中に小学校低学年くらいの子供がほぼ同数といったところだ。

高層ビルの高級ホテルというロケーションからは、二週間前に激闘を繰り広げた東京ミッドタウン・タワーを思い出さざるを得ない。ビルを守る大天使メタトロンの猛攻をいくぐってISSキット本体を叩くため、現実世界からホテルの高層階に宿泊し、そこから無制限フィールドにダイブするという作戦が七王会議で検討されたのだ。

しかし、一泊三万円からというギガ・プレミアムな宿泊料の壁によって、その作戦は却下されてしまった。もっとも、真正面からメタatron第一形態と戦わなければ、本体としての彼女と出会うことはできなかったのだ。

ともあれ、高級ホテルなどという場所とは縁遠いはずのハルユキが、お値段的には大差ないであろうこのホテルのプールに、しかも宿泊客でもないのになぜブカブカしていられるかというところ――。

「うっわー、すっ……ごおお——い！」

という聞き慣れた歓声が頭の後ろ側で響き、ハルユキは浮き輪をぐるりと反転させた。

ロッカールームから小走りに駆け出してきたのは、ショートパンツタイプのセパレート水着を着たチエリ。その後ろには、ネガ・ネビュラスの女性陣プラスワン——つまり黒雪姫、楓子、そしてゲスト参加の目下部輪の四人が、色とりどりの水着姿で続く。

彼女たちの、露出度多めの嗜好を自覚するのはこれが初めてというわけではない。文化祭の時、二年B組で営業していた（CAFEどうぶつ王国）なる道コスプレ喫茶店で、ハルユキの誤操作によって女性陣全員がたいへん面積の少ないアニマル水着姿へと変身してしまった事件は記憶に新しすぎるところだ。

しかし、あれはつまるところニューロリンカーが作り出した実体なきAR映像であり、肉眼に飛び込んでくる本物の光学現象は、やはりディティールとテクスチャ、そしてインパクトが格段に違う。

——いや、いま見ているものが現実の光景だと、なぜ言い切れる？ ニューロリンカーがハッキングされて、本来有り得ない映像を脳に流し込まれているのでは？

「……………タタ、あれって本物かな？」

ハルユキが眩くと、隣のタタムがいつもならメガネのテンプルが存在する場所に指先を移動させ、すかっと空振った。しかし当人はそれにも気付かない様子で、

「……………視界スکشヨを操ってみれば解るんじゃないかな。本物なら、無許可撮影の警告が出るはずだ」

「なるほど。よし、試してみよう。オレたちの視覚がハッキングされてたら大変だからな」

「じゃあ、ぼくは動画でチェックを……」

「コラ、その二人——なにこによこによやってるの！」

しかし幸い——と言うべきであろう、ハルユキとタタムが仮想デスタトップを操作するよりも早くスタートデッキに到達したチユリが、久々の超火力チユリビームを水中の二人に照射しながら叫んだ。

「あつ、まさか、スکشヨ操ろうとしてたんじゃないでしょうね！」

（驚愕）
幼馴染の直撃力に戦慄しつつ、タタムと同時に首を振る。

「してないよ」

「じゃあ、その空中の微妙なところにある手はなんなのよ」

今度は手首をぶらぶら振り、

「準備運動だよ」

「それって普通、水に入る前にやるもんでしょ」

「あなたもよチーコ、泳ぐならちゃんとストレッチしてからね」

という声とともに、チユリの後ろから現れた櫛子が、水中の二人を見てにつこり微笑んだ。

水色のバレオつきビキニに、義足のナノポリマー皮膚を保護するための極薄ニータイツがよく似合っている。

いまの真空服レイカースマイルはどういう意味なんだろう、と考えつつハルユキが強張った笑みを浮かべていると、楓子の隣に黒雪姫が立った。こちらは、黒地にすみれ色のちようちよ模様様がプリントされた、シンプルなビキニ姿。

極冷気タロユキスマイル——は幸い発動することなく、ハルユキを見て真顔で言う。

「その浮き輪、気持ちよさそうだな。私物かい？」

「は……ハイ、きのうのメールに水着持参て書いてあったんで、念のため……」

「そうか……あとでちよっと私にも貸してくれないか」

「ど、どうぞどうぞいくらでも」

そんなやり取りをしていると、黒雪姫の後ろから謎がびよこんと顔を出す。水着は、胸元に大きなフリルがついた、オレンジ色のワンピース。腰には早くも、赤い水玉模様の浮き輪を装着している。

「U—V 私も持ってきたのです！」

満面の笑みで浮き輪を左右にぐるぐる動かしてみせる謎を、後ろからいきなり楓子が浮き輪ごと抱え上げた。

「もうっ、浮き輪つきだなんて反則ですよ、ういうい！」

「UIV 何が反則なのですか？」

両手でキーボードを打ちながら両足をじたばたさせる顔を、楓子は意外な腕力を見せてぶんぶん振り回す。

「可愛すぎるからに決まっています♡ このままプールに投げ込んじやいたいくらい！」

「UIV や田中てくdWさいいいいい」

「おいおい、そのへんにしておけフリーコ。投げ込む前に、ういういにも準備運動をさせないだろう」

「あつ、そうね。じゃあしっかりストレッチさせてから投げ込むわ」

……………投げ込むのはいいんだ。

……………ていうか、こうなると、シヨコたちが参加できなくて助かったような残念なような。などと考えつつも、ハルユキがプールサイドのあでやかな光景から目を離せずにいると。不意に、すぐそばの水面が丸く盛り上がった。

「う、うわあ？」

仰け反った勢い余ってひっくり返りそうになるハルユキの浮き輪を、タカムが押さえる。

ざぶんと水を割って現れたのは、いつのまにか水中に潜っていたらしい日下部輪だ。タンクトップタイプのビキニは可愛らしいタローバー柄、お揃いのヘアバンドをつけた頭からは水滴がばたばたと垂れている。

あゝ先まで水に沈めたまま、輪は上目遣いにハルユキを見上げると、にこつと微笑んだ。

「こんにちは、有田さん」

「あ……こ、こんにちは、日下部さん」

まだリアルでは会っていないシヨコラ・バベッターたちを除くネガ・ネビュラスのメンバーは、午前中に集合して渋谷で買い物や食事を済ませているが、グレート・ウォール所属の輪はプールからの合流だ。

お兄さんのアッシュ・ローラーとは昨日対戦したばかりだが、輪と会うのは二週間ぶりなので、ハルユキは何から話していいのかしぼし迷った。すると輪は、細い指先でハルユキの浮き輪をつつきながら、小声で言う。

「あの、浮き輪、あとで私にも、貸してくれますか？」

「もつ、ももももちろんだよ！ あとでと言わず、いますぐに……」

答えながら、急いで浮き輪を持ち上げて体から抜くと、水に浮かべる。

「どつ、どつどつどうぞ……って、うわあ!？」

とハルユキが叫び、輪も可愛らしい悲鳴を上げた理由は、いきなり上空から誰かが「とろー」とジャンプしてきたからだ。浮き輪の穴にすっぽり飛び込み、ざぶーんと大きな水音を立てたのは、誰あろう黒雪姫。跳ね上げられた水しぶきが、ハルユキと、近くに浮いていたタタムの顔を直撃する。

「せつ、せせせ先輩、なな何を……」

「私が先約だぞ、ハルユキ君?」

ここでついに、極冷気クロユキスマイルが発動。

「うむ、なかなか快適な浮き輪じやないか。素材は何なのかな?」

などと、どこまで本気なのか解らない質問を口にしながら、浮き輪から相い両脚をすりと抜いて座り姿勢へと移行する。

「は、はい、ナノ結晶化エラストマー製で、軽量、薄型、高伸縮性、肌触りもよくて耐久性も……」

ハルユキが、浮き輪メーカーの回し者のようなことを言っていると。

デツキ上のチユリが、呆れ顔でばんばんと両手を叩いた。

「はいそこ、遊んでないで注目! 今日の主賓の登場であらせられるぞー!」

水中の四人が顔を上げ、ストレッチ中だった謎と楓子も立ち上がる。

七人が見守る中、ロッカールームからすたすたと歩み出てきたのは、ショートヘアの女の子だった。真っ白いワンピース型の水着を着ているので女性だと解るが、すらりとした体つきはどことなく中性的な雰囲気もある。

誰だろう、と一瞬考えてしまつてから、前に装着されている半透明外装のニューロリンカーを見てようやく気付く。あれは、メガネを外した水見あきら——アタア・カレントだ。

恐らく初めて目撃するあきらの素顔に思わず見入っていると、今度は楓子がぼんぼんと手を叩いた。

「じゃあ皆さん、気をつけ、ですよ」

憶えて、水中で体をまっすぐに伸ばす。スタードデッキに立ったあきらに向けて、黒雪姫が代表してお礼を言う。

「あきら、今日は貴重なチケットをたくさん用意してくれて、本当にありがとう」

すかさず他の六人が「ありがとうごさいま——す！」と唱和すると、あきらは魔羯に頷き、答えた。

「どういたしまして、なの」

そう。市井の中高生であるハルユキたちが、高いホテルのお高いプールでリゾート気分を満喫できるのは、あきらが人数ぶんのゲストチケットを用意してくれたからなのだ。そんなことが可能な理由は、彼女の母親が、以前に系列ホテルのレストランでシェフ・パティシエールをしていたかららしい。

右手に持っていた白いスイミングキャップを被りながら、あきらはまったくいつもの調子で言った。

「それじゃ、みんな、楽しんで。私は泳ぐの」

どうやら遅れたのはロッカールームで準備運動を済ませてきたかららしく、あきらは無造作

に上体を屈めると、素人目にも見事なフォームで右端のレーンに飛び込んだ。滑り込むように着水、そのまま十メートル近くも水中を進んでから浮き上がり、タロールで泳ぎ去っていく。まったく力が入っていないように見えるのに、恐ろしく速い。

あつという間に二十五メートルを泳ぎ切ると、くるとターンして戻ってくる。純白の水着と相まって、その姿はまるでシロイルカのようなのだ。

「す、すご……………さすが（純水無色）……………」

ハルユキが呟くと、再びタタムがエアメガネを光らせる。

「これは負けていられないな。ぼくもちよつと泳いでくるよ」

すいっと移動して隣のレーンに入ると、戻ってきたあきらのターンとタイミングを合わせて壁を蹴る。あきらとは対照的な力強いフォームで、ぐんぐんと泳いでいく。

学校のプールには近寄りもしないハルユキだが、幼い頃にスイミングスクールに通わされたせいもあって、あらゆる運動の中で唯一泳ぎだけは嫌いではない。しかしもちろん、あきらやタタムのスピードには遠く及ばないので、立ち泳ぎしながらサテどうしたものか……………と思っている。

ハルユキの浮き輪に乗ったままの黒書姫が、ハルユキの肩をぶにとつついた。

「ハルユキ君、キミは水泳のほうはどうなんだ？」

「あ、はい、苦手ってほどじゃないです」

「ほう、それは良かった。では、そろそろ特訓を始めようか」

「へっ？ と、特訓？ 何の、ですか？」

すると黒雪姫は、なぜかニヤリと笑う。

「おや、キミのことだから、我々がこのプールに来た理由をとくに推察しているかと思ったが」

「理由……って、チケットを買えたからじゃないんですか？」

「いや、あきらがチケットを都合してくれるければ、代官山のスポーツセンターまで行こうかと思っていた。会談の前に、少しでも慣れておきたかったからな」

「慣れる……って……」

咳きながら、周囲を見回す。

あきらとタタムは泳ぎ続けているし、チエリと露、楓子はまだ準備運動中。輪は、ハルユキのすぐ隣できょとんとした表情をしている。

「……水に、ですか？」

周りには水しかないのでとりあえずそう答えると、黒雪姫はもう一度微笑んだ。浮き輪ごとくると回転し、ハルユキたちに顔を近づけて囁く。

「惜しい。水に浮く感覚……もつと言え、擬似的な無重力感覚に、だ」

「……………」

鋭く息を吸い込み、輪と顔を見合わせてから、ハルユキは同じく小声で問い返した。

「そ、それって、つまり……今日、とうとう実装されるってことですか？ 例の……（宇宙）ステージが」

「その可能性は決して低くないと、私とフリーコは観んでいる」

「で、でも、なんで今日なんですか？ 噂じゃずっと七月五日あたりってことになって……でも何日経ってもぜんぜん出てこないから、もうこのまま実装されないんじゃないかって話も聞きましたけど」

ハルユキの言葉に、黒雪姬はこくりと頷く。濡れた前髪から滴った水滴が胸元の真っ白い肌に落ち、つうつと流れる。

「確かに、私も実装されるなら五日ではないかと思っていた。加速世界にヘルメス・コードが出現してから、ちょうど一ヶ月後だからな。しかしそれも、確たる根拠があったわけではない。ブレイン・バーストのアップデート期日はけっこういい加減でな……オフィシャル・イベントの一ヶ月後のこともあれば、色々な記念日にこじつけられることもある」

「記念日……って、文化の日とか敬老の日とか……？」

「あ……私も、聞いたこと、あります。（大海）ステージが実装されたの、（海の日）だった……って」

そう発言した輪に、黒雪姬は指を一本立てて見せる。

「その通りだ。ちなみに、みんな大好きな《下水道》ステージが実装されたのも、九月十日の《下水道の日》だったんだぞ」

「そ、そんな記念日があるんですか……って、あれ、でも、待って下さい」
眉を寄せ、おぼろげな記憶を検索する。

「確か、そのままズバリな《宇宙の日》っていうのもありましたよね？ しかも、それも九月だったような……」

「お、よく知ってるな。宇宙の日は九月十二日、初の日本人搭乗員を乗せたスペースシャトルが打ち上げられた日だ」

「へええ、なるほど……って、そうじゃなくてですね」

水中でばしやばしやかぶりを振り、続ける。

「宇宙の日があるなら、宇宙ステージが実装されるのもその日じゃないんですか？ つまり、まだ二ヶ月も先なのでは……？」

「それだと、今度はヘルメス・コードのレースから時間が経ちすぎるんだよ。お台場のテーマパーク、《東京グランキヤッスル》で公式イベントが行われたあと、同じモチーフの《古城》ステージが実装されたのは三十日後だったからな。さすがに三ヶ月は引っ張らないだろうと、私は思う。これは完全な推測だが、管理者はレースから三十日後の七月五日に宇宙ステージを実装するつもりだったのが、その少し先に、宇宙に関係なくもない記念日があったのでそこま

で延期した……のではないかな……」

「な、なんか、やる事が適当ですね、管理者……」

「いまに始まったことではないさ。そもそも、たかが七歳のお子様連中にブレイン・バースト・プログラムなどという代物を与えておいて、あとは完全放置というところからして適当すぎるだろう」

ゲームマスターとオリジネーターを同時にこき下ろす黒雪姫の物言いに、ハルユキは思わずぷくぷくと水中に沈み込んでしまったが、輪は意外な剛胆さを発揮してくすぐす笑った。しかしすぐに不思議そうな顔になると、再び質問を口にする。

「あの、つまり、今日……七月十四日が、宇宙と関係なくもない記念日……ってことですか？　なら、今日は、なんの日……なんですか？」

それに答えたのは、いつの間にかハルユキたちの背後でプールの縁に腰掛け、両脚を膝まで水に入れていた楓子だった。少し離れた水面には、自分で入ったのか楓子に放り込まれたのか、浮き輪裝備の器が浮いている。チユリは、タタムやあきらと一緒に反対側のレーンでがしがし泳いでいるようだ。

「じゃあ、輪と靴さんに三択タイズよ」

につこり笑いながら、楓子は指を三本出した。

「その一、たんぼぼの日。その二、あさがおの日。その三、ひまわりの日」

「……………」

再び輪と顔を見合わせてから、ハルユキは恐る恐る訊ねた。

「あの、どれも、宇宙とまったく関係なさそうなんですが……」

「そうかしら？ よーく考えてみて？」

「えーと……………」

たんぼぼ……は綿毛を飛ばす。あの形が、宇宙船の再突入カプセルに似ていなくもないような気がしなくもない。

「た、たんぼぼの目ー」

「ぶぶー、はずれです。潜水ゲームは、潜水三十秒ですよ」

楓子が笑顔のまま右脚を伸ばし、つま先をハルユキに向けて上下させるので、「ふあい……」と頷きながらニューロリンカーのタイマーアプリを起動し、大きく息を吸ってから頭まで水に沈み込む。

さすが高級ホテルのプールだけあって、水の透明度がかなり高い。プールの底で揺れる自分の影から目を離し、前を見る。その途端、クローバー模様の水着に包まれた輪の胸が至近距離に出現し、うわっと思ひながら体を左に回す。

すると今度は、水面にある浮き輪から突き出す黒雪姫の下半身が網膜を直撃。がばがばっと空気を吐き出してしまい、一気に苦しくなるが、ここでギブアップしたら何かがバレてしまう

気がしたので懸命に堪える。再度体の向きを変え、タイマーのデジタル数字が30になった瞬間、水面へと飛び出す。

ぜーはー言っていると、楓子がにこにこしながら言った。

「おつかれさま、鴉さん。水中の眺めはどうでした？」

——バレてるし！

ハルユキが硬直するのと同時に、輪が顔を赤らめながら両腕で胸を隠し、黒雪姫は「ひあっ」というような声を漏らした。

「な、眺めって、何を見たんだ！」

「え、えと、あの、えーと……先輩、その水着、とってもお似合いです……」

「その台詞、いま言ったらタイミングが最悪だろうが！」

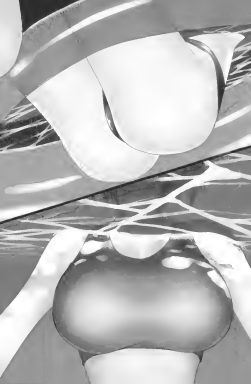
浮き輪に座ったまま、黒雪姫が振り下ろした左足のかかとが、ハルユキの脳天を直撃した。再び、ぶくぶく沈降する。

「はい、鴉さんは脱着ですね。じゃあ、輪の答えは？」

「えっと、えっと……たしか、宇宙アサガオっていうのがあった、気がするので……あさがおの日で……」

「ぶぶぶー、はずれよ。はい、潜水三十秒」

「ふあい……」



とぶん、と波紋を残して輪が消える。光の加減なのか、水面は空の青色に染められ、水中の様子はまったく解らない。

精神的、物理的衝撃から回復したハルユキは、輪が浮いてくるのを待ちきれず、プールサイドの楓子を見上げた。

「あの、師匠、つてことは自動的に、答えはひまわりになるんですが……」

「ひまわりと宇宙の関係、まだ解りませんか？」

「えと……太陽を追いかけるからかな……って、うおわ！」

いきなり目の前十センチに輪が浮上してきたので、思わず仰け反る。

「有田さん、抜け駆け、ずるい……です」

「あ、ご、ごめん」

「でも、私、解り……ました」

くるりと体を回転させた輪は、楓子に向けて言った。

「ひまわりは……気象衛星のこと、ですね？」

「正解よ、輪」

楓子にはっこり笑ったが、後方で黒雪姫の咳払いが響く。

「はらそこ、そんなにくっつくな。えー、目下郎君が言ったとおり、七十年前の今日、日本初の気象衛星（ひまわり1号）が打ち上げられた。それを記念して、七月十四日はひまわりの日

とされているんだ」

「へえええ……なるほど、確かに宇宙関係ですね……」

ハルユキは感心しつつこくこく頷いたが、すぐにあることに気づき、首を捻る。

「あれ……でも、こう言っちゃなんですけどそんなマイナーな記念日に合わせるくらいなら、一週間前の七月七日に宇宙ステージを実装すればよかったんじゃないや……？　七夕のほうが、宇宙関係の日としてはずっとメジャーだと思いませんか……」

「確かにそうだが、七夕は歴史があるぶん日付があいまいなんだよ。日本全国で見ると、旧暦で……つまり八月に七夕祭りをするところもかなりあるからな」

「あっ！　言われてみれば、確かにお祖父ちゃんちがある山形の東根市も、七夕祭りは八月の上旬でしたよ」

「ほう、そうなのか。ううむ、では、それに合わせて……いやいや、いまは宇宙ステージの話だったな」

思考が脱線しかけたらしい黒雪姫は、もう一度吸いすると解説を再開した。

「ともあれ、そんなわけで、宇宙関係の日と言って言えなくもない今日こそ、宇宙ステージが実装されるのではないかと私と楓子は考えた。グローバル接続を切っているから解らないが、あるいはすでに実装され、無重力空間での戦いがばしばし繰り広げられているかもしれないぞ。ならば我々も、万が一の事態に対応できるようにしておかねばならない」

「万が一……という……」

ちらりと周囲を見回し、ハルユキたちの話が聞こえる範囲内に他の利用客がいないことを確かめてから続ける。

「グレイウォとの会談が、初体験の宇宙ステージになるかもしれないってことですか？」

「それもある」

「で、でも、今日は話し合いだけなんですよね？ 不馴れな新規ステージでも、問題はないのでは……？」

「U・V だから、万が一、なのです」

水面に浮かびながら笑顔で皆の話を聞いていた議が、十本の指で浮き輪の表面を軽やかに叩いた。

「U・V グレート・ウォールの皆さんが、約束を破って乱入してくるとは思っていません。けれど、何か起きるまでは何が起きるか解らない……それが加速世界なのです」

「………そっか………そうだよ。特に、今回みたいな重要な話し合いは、いかにもあいつらが狙いそうだし……」

そういえばタタムも昨日、「状況によつては」と言っていたなと思ひながらハルユキが眩くと、議はこくりと頷いた。口には出さなかったが、（へあいつら）のところで誰もが加速研究会の名前を思い浮かべたことは間違いない。

「そうね。輪の前でこんなことを言うのもなんだけど、ダレウォは太所帯だから、情報漏れの可能性は排除できないわ」

楓子がそう言うのと、輪はあご先まで水に沈めたまま、小声で答える。

「会谈のことは、偉い人たちしか知らないはずですが、渋谷第二エリアには十四時五十分から十五時十分までドローパー接続禁止の通達が出てるので、レギオンメンバーはみんな、何かがあるとは思ってる……と思います」

それを聞いた楓子は、仄かな苦笑いを浮かべる。

「その通達は、わたしたちが依頼したもののなのよね。でもそうしておかないと、会谈ステージへの接続を、意図的でなくても邪魔されかねないですし……。かといってダレウォのメンバー全員に、ネガ・ネビュラスが来るから乱入するな、なんて通達を出してもらうのも余計に危険を呼びそうですし」

「……確かに、命令違反を怒られてもいいから、黒の王にタイマンで挑戦してみたい、とか考える人たちがいるような気も……します」

申し訳なさそうな輪の言葉に、黒雪姫もにやりと笑った。

「そういう連中には、領土戦で移並に來ればいつでも一対一で相手をしてやると伝えておいてくれ。ともあれ……これで、私やフリーコが何を懸念しているか理解してもらえたかな、ハルユキ君？」

名前を呼ばれ、ハルユキは慌てて頷く。

「は、はい。想定していない乱入を受けて、しかもそこが新規実装の宇宙ステージで、まともに戦えない……っていう展開ですよね？」

「そうだ。無重力状態であろう宇宙ステージでは、かなり特殊な動作と方向感覚が要求されるはずだからな……。本当は、〈大海〉ステージの海の中で訓練できればよかったのだが、レアなあのステージを引くまで加速し続けるのも大変すぎるしな。そこで、現実世界で！ というわけだ！」

黒雪姫が、びしゃつと水面を叩く。

「説明が長くなってしまったが、三時の会議まであと一時間半ある。泳ぐもよし潜るもよし、疲れたらプールサイドでトロピカルジュースを飲むもよし。みんな、全力で遊べ。それが今日の特訓だ！」

ハルユキたちは一斉に右手を挙げ、「はいー」と叫んだ。

さすがに泳ぎ疲れたらしいあきらたちと入れ替わりで奥のレーンに入り、何往復か泳いだあとは輪や漕と潜水ごっこをして遊び、デッキチニアでカラフルなジュースを飲んだりしているうちに、時間はあつというまに経ってしまった。

午後二時五十分になったところで、黒雪姫がプールの片隅に全員を集めた。水に入ったまま、

八人で輪を作る。

「さて、どうかな諸君。体が浮く感覚には慣れたか？」

レギオンマスタールの問いに、チエリが首を捻りながら答えた。

「慣れたよーな、そうでもないよーな……。ていうか先輩、ほんとにこれで、宇宙ステージの無重力に対応できるんですか？」

「さあ。何せ私も初めてだからな」

その答えに、一同さぶーんとずっこけたが、黒雪姫は澄まし顔で続ける。

「この中で、加速世界の無重力を味わっているのは、ヘルメス・コード縦走レースを最後まで走り抜いたフリーコとハルユキ君だけだ。その経験を踏まえて、ひとこと貰えるかな？」

ハルユキは、楓子と顔を見合わせてから、おずおず答えた。

「あの、僕は、ゴールまで行けませんでしたが……でも、上下左右があいまいな感じは、水に潜ってる時と似てた気がします……」

続いて楓子も、首を傾げながら発言する。

「わたしも、ゴールまでまっすぐ飛んだだけです……。ただ、心の準備ができていないのではぜんぜん違うと思うわ。二時間たっぷりプールで遊んだんだから、もし本当に宇宙ステージが来ても慌てることはない。その心構えがあれば、きっと大丈夫ですよ」

「うむ、そういうことだな。それでは、最後にみんなでもう一度、水に潜ろう。隣の人と手を

「整いでくれ」

左の黒雪姫、右のあきらと、しっかり手を握り合わせる。黒雪姫の「せーの」という合図で胸いっぱい空気を吸い、潜る。

透明なアタアブルーの向こうに、仲間たちの笑顔が揺れている。

加速研究会、そしてオシタトリ・ユニヴァースと対決するために、黒雪姫はレギオンの拡大方針を打ち出した。すでに一昨日付けでシヨコラ・バベッターたち三人が加入し、ネガ・ネビュラスの総勢は十人に――大天使メタトロンを加えれば十一人になっている。

今後、このメンバーで行動する機会が減るだろう。そのことを残念だと思っではいけない。けれど、今日のこの瞬間を、記憶にしっかりと焼き付けておくことはできる。

ハルユキの思いを感じ取ったかのように、あきらと黒雪姫が繋いだ手にぎゅっと力を込めた。その行動が次々に伝播し、輪を一周して戻ってくる。

直後、揃って水面に浮上。盛大なしぶきが収まると、黒雪姫が落ち着いた声で指示した。

「一分前だ。グローバルネット接続用意」

全員、ニューロリンカーに手をやる。会談の舞台となるステージはダレイト・ウォール側が作るの、ハルユキたちは待っているだけでいい。もちろんスターターのアイアン・パウンドは自動観戦リストに登録済み。

「三十秒前。接続開始」

ニューロリンカーのコネクトボタンを長押しする。視界にグローバルネット接続ダイアログ窓が表示される。

「十秒前。九、八、七……」

黒雪姫のカウントを聞きながら、ハルユキは眼をつぶった。

「……三、二、一」

ただの一秒も遅れることなく、壁の裏に、炎に包まれた文字列が赤々と輝いた。

「A R E G I S T E R E D D U E L I S B E G I N N I N G !!」

アバターの足が、硬い地面に触れた。

いつもの対戦ステージと変らない重力を感じる。つまり、宇宙ステージではない。

隙を開けたハルユキの視界に飛び込んだのは、鮮やかな金色から山吹色、黄色、すみれ色を経て濃紺へと至る壮大なグラデーションだった。

永遠の夕焼け空。(黄昏) ステージだ。

現実世界では渋谷ラヴィン・スクエアのサウス・タワーと層階にいたはずだが、いまは地上近くまで降りている。正確には、中央棟屋上広場の片隅。右にはラヴィン・タワー、左には高層マンション、南にはサウス・タワーがそびえているので、まさしく峡谷の底といった趣きがある。

白亜の巨大神殿に姿を変えた高層ビル群から視線を外したハルユキは、宇宙ステージにならなかったことにはっとするような残念なような気持ちを感じながら、周りに立つ仲間たちの数を確認めた。黒の王ブラッタ・ロータス、副長スカイ・レイカー以下、一人も欠けていないようだ。

——と、いうことは。

「カラス・マスト・ダーイ……」

そんな呪いの言葉が真後ろで響き、びくつと振り向く。

立っていたのは、ガイコツヘルメットの両眼に青白い炎をらんと燃やす世紀末ライダー。ギヤラリーなのでバイクには乗っていないが、定期対戦時の一・二倍のオーラを発している。ヘルメットのシールド越しに、怒りに震える声が響く。

「てんめえ、誰に断つて、水着のリンとイチヤコルアイチヤコルア……」

「い、イチヤコルなんてしてませんよお兄さん！」

「ドント・コール・ミー・オニ——サンツ！ リンの水着姿をウオツチしやがっただけで！」

その罪はテン・ハンドレッド・デスに値すんぞコルアアア！」

怒りゲージを急上昇させる、目下総輪のお兄様ことアツシュ・ローラーの右肩を、後ろからはっそりした手がぼんと叩いた。

「万死に値する、と言いたいならテン・サウザンドだと思っわ、アツシュ」

声の主は、彼の〈親〉であり師匠でもあるスカイ・レイカー。アツシュ同様に車椅子型強化外装は使わず、優美なラインを持つ両脚で白いタイルの上に立っている。

びくつと動きを止めるアツシュに、レイカーはあくまで優しく語りかけた。

「そもそも英訳するなり、ユア・クライム・デザイナーズ・キャピタル・パニッシュメント……とかじゃないかしら。そしてわたしも輪の水着姿をばっちり見ちゃいましたが、一万回死な

ないといけませんか？」

「と、とんでもナッシングだつす、師匠！」

「じゃあ、時間もないことですし、さっそく仕事にかかってくれと助かるわ」

「あ、アイアイサー！」

背筋を伸ばしてそう叫んだアッシュ・ローラーは、広大な屋上の真ん中目指してすたこら走り始めた。

ラヴィン・スタエア中央棟の屋上は、柔らかい下草に覆われた空中庭園の趣を呈している。四隅には神殿遺跡ふうの円柱が立ち並び、大理石のタイルが敷かれた中央部分には、都合よく大型のベンチが向かい合わせに置かれているようだ。しかし、いまのところ人影はない。

ハルユキは、視界上部に表示される二つの体力ゲージを見やつた。

左側のゲージには、ダレート・ウォールの幹部集団である《六層装甲》の第三席、《鉄拳》アイアン・パウンドの名前がある。

そして右側の名前は、《Viridian Decurion》。一週間前の七王会議の際にパウンドが《ビリー》という渾名で呼んでいた、六層装甲の第二席だ。しかしハルユキはまだ戦ったことはおろか、姿を見たこともない。

ともあれ、対戦のスターターたちは事前の予告どおり。さて彼らはどこにいるんだろう、と辺りを見回そうとした、その時。

五十メートル四方はありそうな広場の中央部で立ち止まったアッシュが、両足を広げ、両手を体の後ろで握って体を反らせると、大声で叫んだ。

「ダレート・ウォール所属、アッシュ・ローラー！ 黒の王ブラック・ロータス以下七名を、王のもとに案内しましたッス！」

さすがにアッシュ語要素のほとんどないその口上が、周囲の高層神殿群に反響し、消えた。たっぷり五秒ほども続いた沈黙を、

「ご苦労！」

という野太い声が破った。直後、ハルユキたちから見て反対側の床が、建物内部から爆発したかのように盛り上がり、四方に吹き飛ぶ。

直径二メートルはある大穴の中から飛び出してきたのは、ボクシング・グローブ状の右拳を高々と突き上げる鉄色のメタルカラー・アバターだった。アイアン・バウンドだ。どうやら、ジャンピング・アッパーで一階下から天井をぶち抜いたらしい。

「拳ちゃんたら、スターターだからって無駄にカッコつけてますね」

というレイカーの寸評は幸い聞こえなかったようで、バウンドは更に後方轉身宙返りを決めてから屋上に降り立った。

バウンドが作った大穴からは、新たなシルエットが続々と飛び出してくる。二人、三人——そして四人。

穴の右に二人、左に二人が並ぶと、最後に現れたのはひととき巨大な人影だった。ハルユキたちのところまで届くような地震（じしん）を上げて着地したのは、全身を鮮やかな緑色の装甲に包み、左手に巨大な十字盾（たて）を携（も）えた重量級デュエルバターだ。グレート・ウォール頭首たる緑の王、**（絶対防衛）グリーン・グランデ**に間違いない。

ステージの空気がちりちりと弾けるような、圧倒的な情勢圧にハルユキやタム、チユリがわずかに上体を引いてしまいうなか、最年少の諺（ことわざ）が平然とした声で言った。

「……あれで終わりでしょうか？ アッシユさんを入れても、向こうは一人少ないのです」
確かに、言われてみればそのとおりだ。

ネガ・ネビユラス側が総勢七名なのに対して、グレート・ウォール側は、緑の王、バウンド、アッシユにハルユキが名前を知らない三人を加えても計六人。確かバウンドは先週、ネガ・ネビユラスに数を合わせると言っていたはずなのだが。

「……まあ、少ないぶんには別に構わんさ。では、行くとするか」

黒雪姫（クロユキ）がふわりとホバー移動を開始するので、慌てて後を追う。同時に、緑の陣営も、アッシユ・ローラーが待つ中央部へと歩き始める。

二十秒後、両陣営は、十メートルの距離（きょり）を開けて対峙（たいし）した。アッシユは黒の面々に向けて小さく頷（うなづ）くと、緑の列の端（は）につく。

最初に言葉を発したのは、やはりアイアン・バウンドだった。

「最初に、ギヤラリーの接近制限を解除させて貰う！ このままでは、叫ばないと話ができないからな！」

「問題ないわ」

スカイ・レイカーがそう応じるや、バウンドは自分の体力ゲージからインスト・メニューを開き、ドロップを掴めた手で器用に操作した。それを受けて、もう一人の対戦者が受諾ボタンを押すと、ハルユキたちの目の前に（十メートル制限）が解除されたむねのメッセージが現れる。再び双方が前進し、広場の中央に向かい合って設置されている大型ベンチのすぐ後ろで立ち止まる。距離は三メートルにまで縮まり、相手のフェイスマスクがよく見える。

七人の真ん中に立つ黒雪姫が、正面に立つ緑の王を見据えながら、静かな声を発した。

「ダランド。会談の要請を受けてくれたこと、礼を言う」

緑の王は重々しく頷き返したが、例によって声は出さない。黒雪姫も慣れたもので、気にする様子もなく続ける。

「それでは、初対面の者もいるだろうし、まずは自己紹介から始めようか。――私がネガ・ネビュラス頭首、ブラッタ・ロータスだ」

続けて副長のレイカー、あきら、謡、タタム、チユリ、ハルユキの順番で名乗る。

対するダレート・ウォールは、まずいちばんレベルが低いであろうアッシュ・ローラーから名乗り、次に彼の隣に立っている、がっちりとしたシルエットの中型アバターがべこりと一礼

した。

「ウス。六層装甲第五席、(サンタン・シェイファー) デス」

その声が、どう聞いても女性のものだったのでひと驚き。そしてアバターネームも、英語というより中国語に聞こえるのでふた驚き。まさかショコラ・パベッター的な半分自称ネーム？と思っていると、右隣に立つあきらが小声で教えてくれる。

「サンタンは小麦色。シェイファーはコガネムシって意味の英語なの」

「ど……どもです」

どうやら中国語っぽいのは響きだけで、れっきとした英単語だったらしい。

次に名乗ったのは、今度こそ明らかに女性型の、しかもグレート・ウォール所属にしてはすらりと細身なデュエルアバターだった。ペール・グリーンの装甲の上に着ているのは、少し濃い同系色のカクテルドレス。

「……………六層装甲第四席、(リダナム・バイタ)」

落ち着いた声といい、飾り気のない口調といい、どこかアクア・カレントと似通った雰囲気をもっている。ネガ・ネビュラスに復帰する前は(加速世界唯一の用心棒)と呼ばれていたあきらがどう感じたのか気になり、ちらりと右を見るが、水流装甲の奥のアイレンズにはまったく変化がない。

「リダナムバイタっていうのは、世界でいちばん硬いって言われてる本の名前」

再び解説してくれるあきらにもう一度「どもです」と礼を言い、ハルユキは顔を前に戻した。次に名乗ったのは、よく見知った相手だった。

「俺は自己紹介の必要なさそうだが、一応な。第三席、アイアン・バウンドだ」

両拳を構え、しゅしゅっとワン・ツーを打って見せたのは、どうやらバウンド流の挨拶だったらしい。

バウンドが両手を下ろすと、その隣にいた大柄なアバターが重装甲を鳴らして一礼し、よく通るバリトンで名乗った。

「六層装甲第二席、ヘリジアン・デタリオン」。いまのところ俺がレギオンのサブマスターということになっている」

——ってことは、あの人がグレウオのナンバーツーか。

そう思いながら、ハルユキはじつと視線を注いだ。

ヘリジアンというだけあって、装甲の色は深みのある鮮やかな緑色だ。古代ローマの兵士を思わせる意匠の鎧兜を身にまとい、左腕には円形の盾、左腰には少し小さめの剣を装備している。ぱっと見ただけでも、歴戦の強者であることが伝わってくる。

それはそれとして、デタリオンというアバターネームの意味は……。

「(十人長)のことなの」

またしてもあきらに解説させてしまい、ハルユキは恐縮しつつ三度目の「どもです」を口に

した。ほとんど同時に、ブリジアン・デタリオンが右手を持ち上げ、

「で、こちらにおわすが我らの王、グリーン、グランデ」

とレギオンマスターを紹介した。グランデは再び軽く頷いただけで、相変わらず無言を貫いている。

代わりに口を開いたのは、黒の王だった。

「以上でこの場の全員が名乗ったわけだが……そちらは六人でいいのか？ 確かバウンドは、回数を揃えろと言っていたように記憶しているが」

「あー……それがな……」

右手のグローブで、頭にかぶったヘッドギアをこしこし擦りながら、アイアン・バウンドが唸った。

「俺としちや、七人揃えるつもりだったんだが……どうなんだ、ビリー？」

名前を呼ばれたブリジアン・デタリオンも、低音で言い返す。

「こういう場でその譯名はやめてくれ。さもないとお前をアンパンと呼ぶぞ」

「うへ、それは勘弁だぜ。……で、どうよ、第一席は来るのか？」

その問いを聞いたハルユキは、思わず息を吸い込んだ。

ブリジアン・デタリオンは、六層装甲の第二席にしてレギオンのナンバーツー。両方（2）なので納得してしまっていたが、六層装甲は、ネガ・ネビュラスの（四元素）と同じくダレ一



ト・ウォールの幹部集団なのだ。つまり序列的には、デカリオンと緑の王の間にもう一人いるはずなのである。六層装甲の——第一席が。

しかし、デカリオンは大げさな動作で肩をすくめると、自分の上席にいる者に対してあまり敬意の感じられない口調でコメントした。

「アイツの気まぐれには付き合っていられん。いちおう連絡は入れたが、五分経つても現れないんだから、放はなつておいていいだろう」

「そうか。ちよつ、今日こそ、とうとう第一席の顔をおがめると思つてただけだな」とパウンドが残念そうに言うので、ハルユキは思わず声を漏いらしてしまった。

「えつ……パウンドさんも、第一席のヒトに会ったことないんですか？」

鋼鉄こうてつのボクサーは、じろりとハルユキを見ると頷うなづいた。

「ないんだよ、これが。つうか、グレウオの全メンバーでも、第一席に会ったことがあるのはボスとビリー、じゃなくてデカリオンだけなんだよな。第三席の俺でさえ、名前すら知らねーつつうわけ」

「えええ……そんなの、アリなんですか……」

「仕方ねーよ。第一席はタイマンでデカリオンに完勝して、ボスと引き分けたらしいからな。そんだけ強けりゃ、実力主義のウチとしちや文句は言えねー」

「引き分け……て……」

果然と繰り返し返しながら、グリーン・グランデを見上げる。緑の王は泰然自若としてゐるが、かつて、六代目タロム・ディザスターと化したハルユキの全力の撃ち込みを軽々と受け止めたほどの、底知れない実力者だ。

《七の神器》の一つ、大盾《ザ・ストライフ》を所持し、鉄壁の心意技《元年長城》までをも操るグランデと一対一で引き分けるとは——六層装甲第一席は、いったい何者なのか。

ハルユキの硬直状態を解いたのは、黒雪姫のいつもと変わらぬ声だった。

「そちらの事情は了解した。どこの幹部にも、困ったヤツが一人はいるものだな」

ぼやきめいたその台詞に、楓子、あきら、諷かかすかな笑みを浮かべる。

「素早い者を持っていても仕方がない。それでは、早速だが、加速研究会への対抗策に関する話し合いを始めさせて……」

黒雪姫の言葉が半ばで途切れたので、ハルユキは視線を右に向けた。

黒の王は、フェイスマスクをわずかに傾けた状態で固まっていた。楓子が一歩近づこうとしたが、その寸前、何かを感じたかのように上空を振り仰ぐ。

暖い寄せられるように、ハルユキも上を向いた。

黄昏ステージの夕焼け空を背景に、三層の高層ビル改め高層神殿が鋭くそびえ立っている。

ことに、高さ二百三十メートルに達するラヴィン・タワーの最上部は、茜色の空に溶け込んで視認できない。

きらり。

不意に、ビルの天辺近くで、何かが小さく光った。

夕陽をきらきらと反射しながら、それは急速に近づいてくる。自然崩壊したオブジェクト——ではない。人型のシルエット。デュエルアバターだ。

高層神殿の屋上から、真つ直さまに落下してくるアバターを、ハルユキは凝視した。

装甲の色は、道光のせいかな真つ黒に見える。かなり細身だが、腰から伸びるロングコート状のアーマーが大きく広がって、まるで翼のようだ。精悍なデザインのフェイスマスクは恐らく男性型。アイレンズの光はまだ見えない——。

そこまで視認した時、ネガ・ネビュラスの誰かが、

「あ……あつ……」

という細い声を漏らした。

ほぼ同時に、ハルユキは、謎のデュエルアバターの背中に何か細長いものが装着されていることに気付いた。

あれは——剣だ。Xの形に交差する、二本の長剣。

漆黒の、双剣士。

accel World 17

黒の双剣、銀の双翼

二〇四六年十一月

「……」
「……」
「……」

1

「う……うう……ううう……ん……」

仮想デスタトップに開いたウインドウの上で、人差し指を右に左にゆらゆら動かしながら、ハルユキは唸った。

ウインドウは対戦格闘ゲーム（フレイン・バースト）のコンソール画面だ。非加速状態でも聞くことができ、デュエルアバターのステータスや対戦の履歴、バーストポイントの獲得状況などを閲覧・操作できる。

ハルユキが眺めているのは、アバターステータス内、レベルアップ・ボーナスのタブ。バーストリンカーになって以来ずっと空白だったこの画面に、いまは四つもの選択肢が表示されている。なぜなら先週、保有ポイントがとうとう300に到達し、シルバー・クロウはレベル2になったからだ。

その際、安全マージンを取るのを忘れてレベルを上げてしまい、残りポイントがわずか一桁まで減少して、教官役のタタムともども青ざめるといふ一幕があったりしたが、どうにか残高回復に成功した今となってはそれもいい思い出。そのわりにはリカバリー対戦中の記憶がややふやなのが不思議だが、今はそれより日先の課題である。

と言っても、今回ののは（嬉しい悲鳴）という奴だ。何せ眼前のボーナス画面には、新必殺技が二つ、新アビリティが一つ、そして既存アビリティ強化という豪華極まる四種のメニューが燦然と輝いているのだ。

「ううう……やっぱ必殺技かな……でも新アビリティも捨てがたいよな……必殺技にするにしても、どっちのほうが強いかな……」

指は三つのボタンの上を順不同に動くだけで、いつこうにどれかを押すには至らない。生身のハルユキが鍛えに鍛えた優柔不断アビリティのせいもあるが、問題は、ブレイン・バーストというゲームはセーブ&ロードが一切できないことだ。どれかを選び、気に入らなかったからロードしてやり直し、というワザは原則として使えない。つまり完全なる一発勝負。

「……………む、むぬぬ……………こうなったらいつそボタンを見ないで連任せに……………」

視線だけを上向けて窓を視界から外すと、指をぐっと引き、意を決して突き出す——ふりだけしてから「なーんちゃって」と呟く。

今回も選択保留を決め、ハルユキはため息とともにぼたりと手を下ろそうとした。

——が、その寸前。

「や、お持たせ、少年！ 検査が長引いてな」

という声が真後ろで響き、同時に背中を少し強めに叩かれたので、ハルユキはびくっと全身を震わせた。はずみで右手が仮想アスタトップ上のウィンドウに接触しそうになり、

「わ、わあああ！」

と悲鳴を漏らしつつ思い切り腕を跳ね上げる。幸い、ウツカリ操作による悲劇その二は回避されたものの、なぜか後方から「ひうつ」というような妙な声が聞こえた。大きく振り上げた格好の右手を戻そうとするが、指先が何かに引つかかっている。

おそるおそる振り向いたハルユキが見たのは――。

バジヤマの上にカーディガンと厚手のショールを羽織った黒雪姫と、そのバジヤマの前合わせから内部へ侵入した自分の指だった。

「ふもっ、ち、ちやい、ちやいがますっ!!」

意味不明の叫び声を発しつつ、ハルユキは右手を全力で引き抜いた。すると、引つかかっていた二つ目のボタンが外れ、布地がはらりと左右にはだけた。

梅郷中学校生徒会副会長にしてハルユキの《親》、そしていちどは消滅したというレギオン《ネガ・ネビュラス》のマスターでもある黒雪姫が、阿佐ヶ谷駅にほど近いこの病院に入院してから四週間が経つ。

事故の直後は生命すら危ぶまれたのだが、ここ数年で急速に発達した医療技術であるM・M治療と、そして恐らく本人の意志力によって死の淵から生還した。高度治療室から出て以降の回復は目覚ましく、外見的には肋骨骨折した左足にギプスが残るのみで、早くも退院の見通し

が立ったらしい。

それはもちろん大いに喜ばしいことなのだが、毎日学校帰りに黒雪姫を見舞い続けてきたハルユキとしては、ほんのわずかな寂しきもある。梅郷中に復帰すれば、黒雪姫は全校生徒憧れの副会長様に戻り、もしかしたらハルユキに構っている時間もなくなってしまう……

「……最近だんだん、キミが何を考えているのか読めるようになってきたぞ」

という声とともに、突然左のほっぺたがムニユと引っ張られた。伏し目がちだった顔を慌てて向ければ、軽く唇を尖らせる黒雪姫の美貌がすぐ傍にある。

「い、いへ別に、変なこと考へてたわけじゃ……」

「言っておくがな、退院したら本格的にキミをびしびし鍛えるつもりなんだからな。目標は今年中にレベル3……いや4だ」

「え、ええ——!?」

先刻とは真逆の意味でおののくハルユキの頬からばちんと指を離し、黒雪姫は表情を和らげると正面に向き直った。

「……ま、私もこの時間がなくなってしまうのは少々寂しいがな……」

眩く横顔を染める夕陽の朱と、艶やかな黒髪のコントラストがあまりに眩しくて、ハルユキは思わず眼を瞬かせてから、視線を前に向けた。

二人はいま、病院の屋上南側に設置されたベンチに並んで腰掛け、阿佐谷から高円寺へと至

る街並みを眺めている。すぐ近くを中央線の高架が左右に横切り、その少し先はもう青梅街道だ。何の縁か、このベンチはまっすぐに梅郷中の方角を向いていて、眼を凝らせば彼方に校舎屋上のソーラーパネル群の輝きが視認できる。

杉並区のこのあたりは、前世紀から残る商店街や住宅地と最先端のインテリジェント・ビルが混在しているのだが、いまは全てが赤金色に染め上げられ、(夕焼け) ステージとでも名付けたいほどの美しさだ。

今日はいちにちよく晴れたが、晩秋ともなれば夕暮れの微風は少し冷たく、黒雪姫は先ほどハルユキが不埒な所行に及んでしまったバジヤマの襟元をかき合わせた。不可避的に廻りかける素肌の白さを頭の奥まで押し戻し、ハルユキは言った。

「あの、そろそろ中に戻ったほうが……」

「いや、大丈夫だよ、ありがとう。どうせあと二十分くらいで夕食の時間だしな……それまではここでこうしていたい」

「で、でも、寒くなってきましたし……」

「ン……そうか、なら、少し耐寒支援をくれ」

にやりと笑い、黒雪姫は体を十センチほど右側に移動させた。細い体は必然的にハルユキの左側面と接触、いや密着し、確かに寒さが遠ざかる。

「うな、これで万全だ。……キミはあつたかいな」

「え、えと、その、発熱量には自信ありますから……」

ハルユキ渾身の自信キヤダだったが、しかし黒雪姫は笑わずに唇の動きだけで「バカモノ」と言った。続けて、いつそう身を寄せながら囁く。

「物理的ではなく精神的な温度のことだよ。なんとというか……ほっとする。倉嶋君が、キミのことになると私と対立するのも当然だな……」

その言葉の意味するところが、残念ながらハルユキにはよく理解できず、黒雪姫のささやかな重みを受け止めつつも首を傾げた。

「え……チユ、じゃない倉嶋は、僕を自分専用の手下だと思ってるだけですから……」

「ふふ、まあ、いずれ明らかになるさ、色々」と

今度は黒雪姫は微笑み、何かを思い出したように右手の指を一本立てた。

「そういえば、さっきここで私を待っている時、いったい何を見ていたんだ？ やけに考え込んでいたようだ」

「あ……えっと、ブレイン・バーストのコンソールです」

「ほう？ ……ああ、いや、解ったぞ。今のキミをそれほど悩ませるものはたった一つだな。」

「ずばり、レベルアップ・ボーナスだろう」

簡単に言い当てられ、ハルユキは眼を丸くした。

「こ、ご名答です。でも、どうして解ったんですか？」

「決まっているさ。昔の私も同じように悩んだ……というか、全てのバーストリンカーが通る道だからな」

笑顔のままそう答えた黒雪姫は、そこで少し訝しそうな表情になると続けた。

「……しかし、キミ確か、レベル2になってからもう何日も経つだろう？ その間、ボーナスを取らずに戦っていたのか？」

「え、ええまあ……そういうことに……」

両手の人差し指をくっつけながらハルユキが頷くと、すぐ左にある顔に今度は驚きと呆れを混合した色が浮かぶ。

「それはまた慎重というか我慢強いというか……確かにここ数日、検査、検査でドタバタしていてなかなかゆっくりキミの相手もできなかったが、例えばタタム君あたりなら適切なアドバイスを……」

「そ、それがその……前にちょっとレベルアップ・ボーナスの話題出したとき、タタのやつ、遠い眼になって『ぼくは考えなしに必殺技はっかり取りすぎだから参考にならないと思うよ……』とか言ってたもんで……」

「……………そ、そうか。スマン」

微妙な表情でこの場にはいないタタムに謝ると、黒雪姫は軽量薄型ギプスに固められた左足をひょいと右脚の上に乗せた。そのまま無言で、東から紫色に沈みつつある夕空を見上げる（観）

に向かって、ハルユキは小声で言った。

「先輩、その……もう僕ひとりじゃどんなに考えても決められないと思うんで、いつそ先輩に決めて頂けないでしょうか？　どのボーナスを取るか……」

「……私もいま、そうすべきかどうか考えていた」

黒雪姫は眩くと、視線を空からハルユキに戻し、真剣な表情で続けた。

「キミひとりでは決めがたいのもよく解る。(親) パーストリンカーの中には、(子) の成長方向を自分で決める者も少なくない。親は子にはない知識と経験があるからな、あるいはそれが正解なのかもしれないと私も思う。しかし……」

そこで一度口を閉じ、黒雪姫は羽織っていた天然ウールらしい黒いシヨールを半分ハルユキの肩に掛けた。包み込むようなその仕草と裏腹に、瞳には毅然とした光が浮かんでいる。

「……厳しいことを言うようだが、親は子の創造者ではなく、子もまた親の被造物ではないのだ。キミのデュエルアバター、シルバー・タロウを生み出したのはハルユキ君自身の心だ。ならばその翼の羽ばたく方向も、キミが決めるべきではないかな……」

「……………はい」

ハルユキは素直に頷いていた。戦闘方法のアドバイスくらいならともかく、やり直し不可のレベルアップ・ボーナス選択まで黒雪姫に頼るのは、単に責任を押しつけるだけの行為だと気付いたのだ。ここで自分の決断ができないのなら、ハルユキはあの時……幽霊中のラウンジで

黒雪姫にブレイン・バースト・プログラムを送信された時、イエスボタンを押すべきではなかった。

「解りました、先輩。僕、こんど加速世界に行った時、あいつに……シルバー・クロウに訊いてみます。ちゃんと訊けば、答えてくれる気がするんです」

「ン、いい返事だ」

黒雪姫はにっこり微笑み、ショールの端を持った右手でハルユキの体をぎゅっと抱き寄せた。今更ながらに自分の置かれている状況を認識して、心臓の鼓動が一気に三倍まで加速する。自カバーストリンク状態で硬直するハルユキの五感に、甘い香りやらステキな柔らかさやらの情報の流れ込み、処理能力の限界を超えて意識が遠く……。

「だが、それだけでは親として少々情けないからな」

左耳に触れるほど近くにある唇がそんな言葉を囁き、ハルユキの意識をどうにか現実世界に引き戻した。

「アドバース代わりに、私自身の経験話を話してやろう」

「せ……んばいじしん、の……」

ぼんやりそう呟いてから、ハルユキはようやく思考を五割ほど回復させる。

そう……。よくよく考えてみれば、黒雪姫……加速世界にその名を知られるレベル9、(黒の王)ブラッタ・ロータスにも初心者だった頃はあったはずなのだ。

「それは……先輩の、《親》が教えてくれたこと……ですか？」

ハルユキの問いに、しかし黒雪姫はそつとかぶりを振った。

「いや……そうではない。私の《親》はそのへんまったくの放任主義で……。何せ、自分のレギオンにすら入れなかったくらいだからな」

「え……じゃあ、先輩は、一人だけであんなに強くなったんですか……？」

「それも否、だ。《親》は、ごく最初と……そして最後の時を除いて私にほとんど干渉しようにしなかったが、しかし私にも《師》と呼べるようなバーストリンカーはいたんだよ。その者のやり方で、私もキミに伝えられることを伝えよう」

「やり方……」

躊躇返しに呟いてから、ハルユキは先ほどとは別の意味で体を硬くした。大して鋭くもない直感が、なぜか危険を告げたからだ。

しかし黒雪姫は、まるでハルユキのその反応を予期していたかのように、右肩に載せた手之力を込めた。がっちりハルユキの体をホールドしたまま、どこから取り出したのか黒いXSBターブルの片方を自分のニューロリンカーに挿入する。

「え、あの、やり方って」

「準、いや《剣で語る》。それが我が師のやり方だ」

にっこり微笑み、黒雪姫はハルユキのニューロリンカーにもう一方のプラグをぶすつと突き

刺した。視界に点灯するワイヤード・コネクション警告が消えないうちに、艶やかな容体がど
めのひと言を囁いた。

「バースト・リント」

「セイ……リヤアアアッ!!」

全身全霊の気合に乗せた撃ち込み。仮想の大気が裂け、ソニックブームの轟音がステージそのものを震わせる。それらのエフェクトすらも後方に置き去りにするスピードで、漆黒の刃は宙を駆ける。

《絶対切斷》の二つ名を持つレベル8バーストリンカー、レギオン（ネガ・ネビュラス）頭首ブラッタ・ロータスの斬撃を正面から受け止めようとする者は、もう加速世界には存在しない。たった二人の例外を除いて。

そのうち一人は、《絶対防壁》ことレギオン（タレート・ウォール）の頭首グリーン・グランド。彼が持つ強化外装、七の神器の三番星に列せられる大盾（ザ・ストライフ）は、遠隔だろうと近接だろうとあらゆる属性の攻撃に耐えてのける。

そしてもう一人は、ネガ・ネビュラスの幹部集団である《四元素》の一角、《矛盾存在》なる二つ名で呼ばれるグラフアイト・エッジだ。レベルはロータスと同じ8。そしてアバターの色合いも、更には外見的特徴も似すぎるほどに似ている。なぜなら、彼の武器は、両の手に握られた二本の剣なのだ。

ロータス渾身の撃ち込みを、グラフはその場から一步も動かずに待ち受けた。

両手の長剣をきりりつと回転させつつ持ち上げ、体の前でX字に交差させる。両刃の直剣は二本とも同一デザインで、エッジ部分はほとんど黒に近いメタリックグレーなのだが、中央部分はガラスのように透明な素材になっている。ゆえに遠目から見ると、幅二センチほどの刃だけが存在する中空の剣にも見える。

通常、剣というものは攻めにも受けにも刃部だけを使うものだが、グラフがクロスさせて構える剣は透明部、つまり腹を正面に晒している。これでは単なるパンチ攻撃にすらへし折られてしまいそうだが、彼に限ってはこのアクションはミスではない。

剣の向こう側に飄然と立つミドルサイズの男性型アバターを睨み、ロータスは斬撃の刹那に念じた。

——その《盾》、今日こそ破る!!

単なる通常攻撃ではあるが、必殺技以上の迫力をともなう振り下ろされたロータスの右手剣が、グラフの構える双剣の交差部に激突した。

くわあん! というような甲高いインパクト音が響き、発生した衝撃波がステージの後方まで環状に広がっていく。少し離れたところで戦いを見守る二つの人影もその波に吞まれるが、ギヤラリー扱いゆえに影響はない。

ロータスの斬撃はグラフの十字防御を一撃で崩すには至らなかったが、さりとて弾かれるこ

ともなく、交錯点でのせめぎ合いへと移行した。何年も昔、初めてドラフの双剣に撃ち込んだ時は、たやすく跳ね返されて二十メートル以上も吹っ飛んだのだから大いなる進歩と言えるが――これで満足する（絶対切断）ではない。

「く……おとおッ……!!」

声を絞り出しつつ、右腕にあらんかぎりのパワーを集中させる。ピンポイントに圧縮された威力が青白いスパークとなつて描画され、二人の黒い装甲が不規則に裂く。

ブラック・ロータスは、四肢の剣に（終決の剣）というアビリティを備えている。効果は、刃に最大レベルの切断属性攻撃力を永続的に発生させること。

剣を装備するデュエルバターは多いが、普通は攻撃モーション中、つまり剣を振っている時しか刃に威力は宿らない。しかしロータスの剣は、たとえ静止していても、斬撃中に準ずる攻撃力を常に発生させ続けているのだ。結果どのようなことが起きるかという点、敵の攻撃を刃でガードするだけで、相手の拳足や得物のほうが切断されてしまう。これが絶対切断という二つ名のゆえんだ。

ロータスの四肢と衝突して断ち切れずに済むものは、切断ダメージに最大級の耐性を持つ装甲（おそらくグランデの盾くらいしか存在しないが）か、同程度の威力を持つ剣（これも加速世界に何本とない）だけである。例外として、特殊条件つきで防御可能なアイテムやアビリティもなくはない――たとえば、（回した回数に比例して防御力が上がる）イエロー・レディ

オのバトンなど——が、脆弱なはずの側面でロータスの斬撃を受け止めてのけるのは、加速世界広しといえどもグラフの双剣だけだろう。

彼が剣の腹を晒しているのは、別に手加減をしているからではない。これが、グラフアイト・エッジというデュエルアバターの持つ力なのだ。いや、剣の持つ、と言うべきか。

グラフの双剣は、二つの強力極まる性能を秘めている。

そのうち一つが、側面の透明部分を盾として使った時はありとあらゆる攻撃をガードするというものだ。この力は本人のアビリティではなく、剣の素材に由来する。透明部分はガラスでもタリスタルでもなく、天然ダイヤモンドすら超える硬度を持つ（ハイパー・ダイヤモンド）なる物質で出来ているのだ。ブレイン・バースト2039というゲームが開始されてから四年が経つが、いまだかつてこの守りを破ったバーストリンカーは一人も存在しない。もちろん、ロータスも例外ではない。

——でも、今日は……今日こそは………

『お……おとおおおッ………!!』

加速世界最硬の物質と言われるグラフの剣のハイパーダイヤモンド素材に、ロータスは身の裡からかき集めた全てのエネルギーを叩き付けた。再び衝撃波が発生し、超高速で拡散する。二人のレベル8がせめぎ合わせる、数値を超えたパワーに耐えかねてか、破壊不能のはずの地面に放射状のひび割れが走る。

ブラック・ロータスは、自分がマスターを務めるレギオンのメンバー……つまり配下であるグラフィット・エッジと、これまで数限りなく剣を撃ち合わせてきた。ウマが合わないからでも、もちろん頭首の立場を笠に着たシゴキでもない。むしろその逆——グラフィは、ロータスがまだレベル2や3だった頃から剣での戦い方を指導してきた、言わば（師匠）のような存在なのだ。

それなのに、今日のこの稽古に限ってロータスが師を乗り越えんと必死になるのには理由がある。

ロータスは、近々レベルを前人未踏（のはず）の9に上昇させるつもりでいる。8から9へ上げるには、気が遠くなるほど膨大なポイント消費しなくてはならないが、それでもレギオンマスターの任務に支障を来さないだけの安全マージンを含めたポイントがようやく溜まったのだ。

どうやら、他に六つある巨大レギオンのマスターたちもほぼ同時にレベル9に達する気配なので、彼らと一括りにして（純色の七王）などと呼ばれている身としては遅れを取るわけにはいかない。しかし、問題がひとつある。レベルが9になるといことは、8のグラフィット・エッジを上回ってしまうということだ。その状態で一本取っても、（師を超えた）とは到底言えない。

つまり、同条件でグラフィと戦えるのは、恐らく今日が最後。これまで、現実時間で三年以上、

加速世界ではカウント不能な年月にわたって数多の技を伝授してくれた彼に、どうしても成長の証を見せたい。——いや、単純に、いつも憎たらしいほど余裕のあるこの双剣使いを一度でいいから叩きのめして勝ち誇りたい。

「い……いかげん、吹っ飛べ……!!」

集中のあまりか視野の周辺がホワイトアウトし始めるのを感じながら、ロータスは掠れ声を絞り出した。

いったん距離を取り、再び撃ち込む余力はもうない。それ以前にステップ回避の達人であるグラフに双剣クロスガードを使わせるまで追い込むのが一苦勞なのだ。なのに、この状況でも透明なハイパーダイヤ越しに垣間見えるフェイスマスクは飄然とした雰囲気だけを漂わせている。

こういう時、グラフお得意の台詞は、「なかなかいいぞ、ロッタ」「もう一頑張りだ、ロッタ」「ナイスガッツだ、ロッタ」などなど。どこまでも余裕しやくしやくな態度もきることながら、ロータスのもじりらしい（ロッタ）なる呼び方がまた腕に障る。

それは確かに、初めて出会った時、ロータスはまだ小学二年生だったので子供扱いもやむを得なかったかもしれないが、今はもう六年生……来年の春には中学生なのだ。だいたい、ブレイン・バーストのインストール条件を考えれば、グラフだってリアルでは似たような年齢のはずではないか。まったく、この双剣使いはどうしてこう……

「強くなったな、ロツタ……いや、ロータス」

突然、響迫り合いの軋み音を背景に、そんな声が聞こえた。

「——ロツ」

空耳か、と仰天するが、いつになく穏やかな声は更に続く。

「……もう、俺が教えることはなさそうだ」

かつて言われたことのない台詞に、ロータスは不覚にも集中を乱してしまった。拮抗していた攻撃力と防御力のバランスが崩れ、その瞬間、高密度に凝縮していたエネルギーが解放される。

ぐわあん！ と爆発じみた轟音を伴う圧力に打たれ、ロータスはひとたまりもなく後方に吹き飛んだ。(黄色) ステージの、ひび割れた大理石に何度もバウンドしながらころころ転がる。タイミングを見て右足の剣を床面に突き立て、一条の軌を刻みながら制動。軽く頭を振りつつ立ち上がる。

てつきり、同じく至近距離からパワーの暴発に巻き込まれたグラフィも同じように吹っ飛ばされたものと思ったが、何たることか、メタリツタグレーのアバターは元の位置から一歩も動いていない。交差させた双剣で、エネルギーの全てを受け流したようだ。

「……まったく、あいつは！」

心の中でそう毒づきながら、ブラツタ・ロータス——黒雪姫は叫んだ。

「おいグラフ！ 今のは作戦か？」

すると、十メートル以上離れた場所に立つグラフは、両手の剣を降ろしながらひよいと肩をすくめる。

「まさか、師匠としての本心だよ。ロッタの剣勢を乱す良なら、そうだなあ……黒くて平たくてカサカサ走る虫の話でもするさ」

「やめろ。殺すぞ」

冷たい声で言い返し、黒雪殿は長く息を吐いた。

師を乗り越える、という目的は惜しくも達せられなかったが、最後にグラフがあんなことを言わなければ押し切っていた自信がある。という意味も含めて、左側に並んで立ち合いを見守っていた、審判役の二人に確認する。

「メイデン、カレン。引き分け……ということでもいいな？」

すると、まず右側に立つ白と薄紅の小柄なアバターが、ふるふると顔を左右に動かした。

「……どう見ても、ローねえの負け、なのです」

続けて左側の、全身を特異な流水装甲に包んだアバターが、水滴を散らしながら同じくかぶりを振る。

「戦いは、最後に立っていたほうが勝ちだと思うの」

「……………ふむ、そうか」



黒雪姫は頷き、視線を公正な審判たちに向けたまま――

「ふんっ！」

気合とともに右腕の剣を振り抜いた。進った赤い光が、床面……正確には渋谷駅東口に存在する大型複合ビル、渋谷ヒカリエの屋上を一直線に走る。ラインのこちら側にロータスと審判二人、向こう側にグラフィート・エッジという構図だ。

「……………あ」

何かに気付いたらしいグラフィが、剣を振ったまま前に走り出そうとした。しかしその寸前、彼の立つ床面が、重低音を轟かせて斜め後方に沈み込む。

「おい、ロッタ、ずずずるいぞそれ!!」

両手を振り回してバランスを取りつつグラフィは叫んだが、もう遅い。黒雪姫は、グラフィ直伝の遠距離攻撃技を放ち、高層ビルの上端を斜めに切断したのだ。分離された巨大構造物は、重力に引かれて切断面を滑り落ちはじめ、その上に立っていたグラフィも必然的に道連れ、というわけだ。

「うおっ……………落ち……………落ちるうううう……………」

という声を最後に、双剣使いは黒雪姫の視界から消えた。あの状況から高さ百八十メートルのビル屋上に戻ってこられるのは、ネガ・ネビュラスでもたった一人――高出力ブースター型強化外装を持つ、この場にはいない（四元素）だけだ。そして、彼女より高く飛べるブースト

リンカーは、加速世界には存在しない。

右腕を振り切った姿勢からすつと体を伸ばすと、黒雪姫は審判二人を見て、改めて訊ねた。

「これで、私の勝ちだな」

「……………反則、なのです」

「……………ずるっこすぎるの」

「褒め言葉と受け取ってねこう」

ふいっと背けた顔を、黒雪姫は西の空に向けた。夕焼けのオレンジを背景に表示される体力ゲージの右側、グラフアイト・エッジの名を刻んだほうがガリガリッと急減少した直後、遠く下方の地上から重々しい崩壊音が届いた。

五分後――。

剥還によってか実力によってかあるいはその両方か、からくもゲージ全損を免れエレベーターで再び屋上に戻ってきたグラフを交え、四人は輪になって座った。椅子は、黄昏ステージ特有のギリシャ神殿風円柱を適当な高さに切断したものだ。

ロータスとグラフが通常対戦で生成したフィールドなので、三十分の時間制限がある。師と弟子の立ち合いで半分を消費し、残りは約十分。グローバルネットワーク経由ではなく、レギオン専用のクローズドネットワークを媒介しているの、観戦者はいない。

最初に口を開いたのは、薄紅と生成りの二色をまとう巫女型アバター、アーダー・メイデンだった。

「……ローねえ。レベル9に上がる決心は、ついたのでですか？」

メイデンが、まだ六年生の黒雪姫を（ロータス姉様）の略で呼ぶ理由は至極単純。彼女はレギオンでも恐らくぶっちぎりで最年少の小学二年生なのだ。しかしレベルは早くも7に達し、物腰も非常に落ち着いている。

つぶらな緑色のアイレンズを見返し、黒雪姫は微妙な角度で頷いた。

「まあ、な……。本当は、今日こそグラフに完勝し、スッキリ気分良くレベルアップするつもりだったが……」

正面に座るメタリックグレーのアバターをじろりと一瞥すると、相手は師匠らしからぬ態度でぼりぼり頭を掻く。

「お、俺もそのつもりで免許皆伝ばいこと言っただけだなあ……」

「ならあんな露迫り合いの最中じゃなく、試合後にちゃんと言えればいいだろうー」

「いやあ、それはちよつとキヤラじゃないって言うか……気恥すかしいって言うか……」

ネガ・ネビュラス結成当時から最古参にしてレギオン最強の剣士でありながら、グラフのこの威厳のなさは昔からいっこうに変わらないう。下校時刻の関係で同席していないエレメンツの四人目などは、彼のことを（剣が本体のヒト）と評している。

しかしその表現は、実のところかなりの的を射ている。グラファイト・エッジの本体は装甲が薄く格闘戦も不得手なので、双剣なしの戦闘では遠隔型のメイデンにも勝てないだろう。ポテンシャルのほとんどを剣、つまり強化外装に注ぎ込んだ一点特化型のデュエルバターというわけだ。

「大丈夫です、グラファさんのお気持ちには、きつと剣を通じてローねえにも届いているのです」
小さなフェイスマスクに微笑みの気配を滲ませながらメイデンがそうフォローを入れると、グラファは意を得たりとばかりに深々と頷き、調子良く言った。

「そう！ 俺が伝えようとしたのはつまりそういうことなんだよ、我が弟子よ。さすが本ガビユの良心、デンデンはいいこと言うなあ」

グラファ命名による愛称を聞いた途端、メイデンのアイレンズを満たす光が少しだけ怖くなる。ロツタちゃん呼ばわりされている黒雪姫にも気持ちは解るが、いまは話を続けねばならない。咳払いして口を開く。

「グラファの意思が届いたかどうかはともかく、私もきつきの立ち合いには満足している。完勝とは行かなかったが、レベル8同士での最後の一战としては悪くなかった……と思う」

「それでは、レベルを上げるのですね、ローねえ？」
表情を戻し、可愛らしく小首を傾げるメイデンに頷きかける。

「うん。……ああも膨大なポイントを一度に消費するのは恐ろしいが、レベル10を目指すなら

避けては通れぬ道だしな……」

するとその時、これまで黙って会話を聞いていた細身の流水アバター、アクア・カレントが静かに言った。

「ポイント減少中は、私たちがロータスを完璧に守るから、安心していいの」

黒雪姫は体を左に向け、さらさらとかすかな音を立てるアバターに軽く頭を下げた。

「ありがとう、カレント。だが、妙な気遣いは無用だぞ。無制限フィールドでの定期エネミー狩りには、レベルアップ後もすぐに参加するからな」

「……そう言くと、思ったの。でも……少し、気になることがある」

「あの噂か？ レベル9に上がると、これまで存在しなかった何らかの特例ルールが適用される、とかいう……」

カレントが頷くと、頭の後ろ側から結わえ髪のように流れる水が揺らぐ。

加速世界に、(レベル9特別ルール)の噂が流れたのは三ヶ月ほど前のことだ。出所は不明、内容も至って不明瞭。情報が少ないのは、大多数のバーストリンカーが「自分には関係ない話」と聞き捨てしてしまったからだ。

それも無理はない。現在バーストリンカーは一下人弱が存在すると言われるが、レベル8に到達できた者は容易く数えられるほどで、更にレベル9を射程に収めた者など十人にも満たないだろう。黒雪姫とて、これほどのポイントを増められたのは、ネガ・ネビュラス頭首という

立場に助けられた部分が大きい。

なればこそ、噂通りレベル9上昇に何らかのリスクが設定されているのなら、己が身を以て確かめねばならない……と思っていたのだが。

アクア・カレントは、直線型のフェイスマスクを左に向けると、グラフィイト・エッジを青白いアイレンズでひたと見据えた。

「グラフィ。あなたがロータスの前にレベル9になってみれば、噂の真偽を安全に確認できると思うの」

やや衝撃的な提案をさらりとぶつけられ、メタリックグレーのアバターが大きく体を揺らす。
「え……ええ？ お、俺？」

「私とメイデンはまだレベル7だけど、あなたは8……しかも、ロータスに次いで9に近いところにいると、私は思っているの。違う？」

カレントが、四人いる〈四元素〉の、この場に残りひとりに言及しなかったのには理由がある。彼女もグラフィ同様レベル8なのだが、最近になってレギオンの第一線からの引退を仄めかしているのだ。ブレイン・バーストというゲームに飽きたからではなく、その道……バーストリンカーとして、誰よりも純粋に高みを目指しているがゆえに。

グラフィとは別の意味で、最も強く心を繋いだ友である彼女が遠さかりつつあることを思うと胸がずきりと痛むが、それに耐えて意識をカレントとグラフィのやりとりに集中する。

「え、ええっと……違うとは言いませんが、安全マージン考えるところちょっと足りないし、そもそも純色の七王に先んじて儼みたいなのが9になるわけには……」

「なら、グラフィさんも王を名乗ればいいのです」

左側からメイデンにもそんなことを言われ、双剣使いは両手と首を交互に復運動させる。

「い、いやいやいや、そんなの俺には荷が重すぎるよ。だいたい、カラーネームが《グラフィアイト》だからなあ……仮に王に名乗りを上げても、何の王になるんだか。《黒鉛の王》か？」
「それはローネえの《黒の王》とかぶるからだめなのです」

日頃《デンデン》と呼ばわりされ続けているお返しに、メイデンにすげなく否定されて言葉につまる剣士に、カレントからも容赦のないコメント。

「私は《鉛筆の王》がいいと思うの」

「えんびつ……ってなんですか、カレンさん？」

小首を傾げるメイデンに、黒雪姫と同じく小学六年生らしいカレントが解説する。

「昔は、黒鉛を芯に使った筆記具が広く使用されていたの。細くて折れやすいからグラフィにぴったりのの」

「そうかあ……今時の小学生は鉛筆を知らんのかあ……って、そういうことじゃなくてだな！ カレント、俺そこまでメンタル弱くないぞ！」

「ちよっと前に、案の王にばこられた時、こっそり凹んだの、みんな気付いてるの。それと……」

何度も言ってるけど私、カレントじゃなくてカ・レ・ン・トなの」

「あー、えっと、俺の地元に水かきんとうっていう銘菓があるからつい……」

「絶対うそなの！」

ここで、ついに黒雪姫は笑い出してしまった。もしかしたら、さっき少しだけ辛い気分になったのに気付いた三人が、わざと陽気な掛け合いを披露してくれたのかもしれないが、それも皆の優しさだ。

「ははは……、まあ、それくらいにしておいてやれ、メイデン、カレン。レベル9上昇に不確定要素があるとしても、まさか顔匠に露払いをさせるわけにはいかんさ。それに、どうやら他の王連中とタイミングを合わせてレベルアップする流れになりそうだから……たとえヤバイことになっても奴らと一蓮托生だ」

黒雪姫がそう言った途端、グラフがシンプルながらも精悍なデザインのフェイスマスクに真剣な色を浮かべる。

「他の王と同時に、か……。——ロッタ、それはつまり、レベル9上昇に前後して七王全員で会谈みたいなものが催されるってことか？」

「噂の真偽いかによっては、可能性はなくてもないな。これまでも二人や三人、四人規模ではあれこれ外交交渉してきたし、その七人版というだけだと思うが……」

「そうか……」

グラフは言葉を切ると、腕組みをして考え込む様子を見せる。普段は飄々と捉えどころのない彼だが、ごくまれに鋭い洞察力を発揮するので、残り三人は口を閉ざして待つ。

やがて顔を上げた双剣使いは、やや唐突な発言を行った。

「ロッタ。俺は今まで、お前のレベルアップ・ボーナスについてあれこれ助言してきた」

「……？ ああ、それについては感謝しているが……」

「いや、礼を言っただけじゃないんだ。なぜならそれは、俺がお前というバーストリンカーの方向性を決してしまったということだからな。一対一デュエルでのオフェンス特化、という」

「……突然どうしたんだ？ 私はべつに、お前に言われるがままにこのアバターを強化してきたわけではないぞ。自分でもその方向が最も自分らしく戦えると思ったからだ」

黒雪姫が、剣状の両手を小さく広げると、グラフもゆっくりと頷く。

「俺も、いまさら自説を枉げようってわけじゃないんだ。万能型ビルドよりも一極型ビルドのほうが、最後の最後、本当にギリギリの局面で〈突き抜ける力〉を発揮できる……その信念は何かあるうと変わらない。まあ、ここにいる三人には言わずもがなのことだろうけどな」

今度は、黒雪姫とメイデン、カレントが頷きを返す。

黒雪姫は、まだほんの新米だった頃から、レベルアップ・ボーナスを師の助言に基づいて選択してきた。長射程・広範囲タイプの必殺技や強化外装はひとつも取らず、近接・単体型の

必殺技と、四肢の剣の攻撃力強化だけを運んできたのだ。

それを後悔したことは一度もない。強力なアビリティ（終決の剣）を発現できたのも、一極型を目指してきたからこそと思っている。アーダー・メイデンとアクア・カレントは別にダブルアイト・エッジの弟子というわけではないが成長の方向性は一緒で、メイデンは遠距離火力、アクアは流水装甲を主に強化してきているはずだ。

——なのに、ダブルはどうして今更そんなことを？

という三人の物問いたげな視線を受け、双剣使いは珍しく一瞬の遠慮を見せてから、低い声で言った。

「……………よもやないだろう、とは思っただけどな……。ロツタ、もし、万が一、俺たちがいないフィールドで自分と同じくらい強い奴らとの集団戦になってしまった場合でも……………決して自分を捨てるな。多対一と考えず、目の前の一對一に集中するんだ。攻めろ。攻めて攻めて、何だろうと斬り伏せろ。それがお前の強さなんだからな」

「……それがお前の強さなんだからな、と我が師は言った。もしかしたらあの時、すでに予感していたのかもしれない……。七王会議を、私がこの剣で血に染めてしまふことを……」
 眩くようにそう言い終えた黒の王ブラッタ・ロータスの、猛々しくも凄麗な姿を、ハルユキは言葉もなく見つめた。

直結対戦を始める前には「剣で語る」と言っていた黒雪姫だが、ステージに降り立つや否や斬りかかってきたわけでは幸いなかった。地形オブジェクトをハルユキにも手伝わせず椅子の形に整え、そこに向かい合わせて座ると、少し長めの話を聞かせてくれたのだ。

因有名詞は出なかったが、二年前……二〇四四年の夏に消滅した（第一期ネガ・ネビュラス）のサブリーダーたちの中に、黒雪姫の師匠格だったバーストリンカーがいたこと。その人は黒雪姫に、万能型ではなく一極型を目指せとアドバイスしたこと。

語られなかった部分で不思議に思ったことは山ほどあったが——たとえば、なぜ（親）ではなく他のバーストリンカーが師匠だったのか、等々——今は黒雪姫の、痛みに耐えるような様子が気になって、ハルユキは即席の椅子から身を乗り出した。

「あ、あの、先輩。ちょっと前にも言いましたけど……先輩が他の王たちと戦う道を選んだの

は当たり前のことだった、僕は思います。だって、ブレイン・バーストは対戦格闘ゲームで、僕たちは戦うためにこの世界にダイブしてるんですから……」

国語力を限界まで駆使してどうにかそんな言葉を口にする、黒雪姫は俯^{うつむ}けていたフェイスマスクを上げ、半鏡面ゴーグルの奥に光る青紫色のアイレンズでじっとハルユキを見つめた。

「ああ……。——そうだな、その通りだ」

頷^{うなづ}き、気分を切り替えるように右足のつま先で床の石材をキンと鳴らすと、細身のボディをまっすぐに伸ばす。降り注ぐ青白い月光が、透明感のあるピアノブラックの装甲内部に浸透し、アバター全体を仄かに輝^{きら}かせる。

二人は阿佐谷の病院屋上で加速したので、降り立ったのも同座標だ。しかし、眼下の光景は一変している。建物は全てゴシック調の装飾を施された白い石造り、空は青みがかった黒に染まり、頭上には途轍もなく巨大な満月が浮かぶ。この《月光》ステージは、無数に存在するステージの中でも美しさは群を抜いていて、また怪しげな地形効果や小生物も存在しないので、会話するには最適な場所だ。もちろん直結対戦なので、周囲にギャラリーの姿はない。

「……戦うためのステージと、戦うためのデュエルアバター。私の師は、その単純な概念を誰よりも体現していたバーストリンカーだった」

ハルユキと眼を合わせたまま、黒雪姫は再び静かに語り始めた。

「そして私もそうありたいと望み、ブラック・ロータスを一对一の近接戦に特化したかたちへ

と育ててきた。師にそうするよう言われたからだけではない。このアバター自身がそう望んでいると感じたからだ」

「アバター自身が……望んでいる……う」

バーストリンカーになって以来、そんなことを一度たりとも考えなかったハルユキは、軽く眼を睨りつつ繰り返した。すると黒雪姫は、微笑みの気配を滲ませながらこくりと首肯する。

「そうだ。デュエルアバターは我々バーストリンカーと一体にして一対の存在……。私は前にこのロータスを（醜惡の極み）と表現したが、それは自分のアバターをただ嫌っているということではないよ。（切斷）の具現化たるこの醜い姿は、まさしく私自身だからな。キミはどうだ、ハルユキ君？ レベル2になるまで共に戦ってきて、そろそろシルバー・クロウの声が聞こえるようになったかい？」

唐突にそう問われ、思わず自分の両手を見下ろす。銀色の装甲に包まれた細く華奢な指は、格闘タイプの力強さとはほど遠い。

バーストリンカーとなって最初の対戦で、魔ビルの窓ガラスに映るこのアバターを見た時、ハルユキはつい「サコっばい」などと思ってしまったものだ。いや、今でもその印象は消えていないが、仮にクロウを他のデザインのアバターと交換してやると言われても恐らく断るだろう。唯一無二の（飛行）アビリティが発現したからではない。このツルツル頭のメタルカラーこそが自分、という意識がいつの間にか胸にすっかり根を下ろしてしまったのだ。

「ええと……声はまだ聞こえませんが、でも僕も、こいつが嫌いじゃないです。だってクロウは僕の心の中から生まれた……生まれてきてくれたんですから」

先端の尖った指をきゅつと握りながらハルユキが言うと、黒雪姫はなぜか嬉しそうに二度、三度と頷いた。

「シ、そうだな、その通りだ。キミがいま口にした言葉こそがデュエルバター成長の出発点だ、ゆめゆめ忘れるなよ。——さて、では、その認識を踏まえつつ、そろそろ始めようか」

「へっ？ 始めるって……何をですか？」

「……あのなあ、加速前にちゃんと言っただろう？ 剣で語るよ」

呆れたように首を振り、黒雪姫は白亜の椅子からすつくと立ち上がった。視線をちらりと上に向け、

「残り十分か。まあ足りるだろう」

「……た、足りるって、何にですか……？」

往生際悪く訊ねるハルユキの眼元に、びたっと露えられたのは、切っ先を視認できないほどに鋭い漆黒の剣だ。思わず上体を仰け反らせつつ、擦れ声を漏らす。

「あ、あの、まさか、僕と……ただただ対戦……」

「フア、是非とも一戦お手合わせ願いたいところだが、今はさすがにレベル差がありすぎるかな。一対一での対戦は、いずれキミがもっと成長した時の楽しみとしておこう」

黒雪姫は笑いを含んだ声でそう答えると、はっとするハルユキの目の前から剣を少し引いて続けた。

「大前提として、デュエルアバターの育て方に唯一の正解は存在しない。遠・近・間すべての能力を備える万能型を目指すか、それとも私や師のようにひとつの能力に特化するか……最終的に選択するのはキミだ。私が『このレベルアップ・ボーナスを選べ』と言うのは簡単だが、やはりキミに自分で感じて欲しいんだ。シルバー・クロウが何を望み、どんな道を進みたがっているのかを」

「こいつが……望んでいること……？」

「そう。それは即ち、キミの心の奥底に秘められた自分自身の望みでもある。……さあ、立て、ハルユキ君」

黒雪姫の声はいつになく優しく響き、ハルユキは吸い寄せられるように即席の白い椅子から腰を上げた。一歩近づこうとしたが、黒雪姫は逆に手振りでハルユキを下がらせる。同時に自分も後方にすうっとホバー移動し、双方がたつぷり十メートルほど離れた時――。

「では……行くぞ、シルバー・クロウ！ この一撃に、全身全霊を以て対峙してみせろ！！」
さっきの優しい声はなんだったの、と言いたいくらいの背刺すような雷声が静謐なステージに響き渡った。

バイオレット・ブルーの両眼が強く輝く。左右の剣がすうっと斜め後ろに開かれ、細身のア

バスターが緩やかに前傾する。

どうつー！ という重い衝撃が足先から放たれ、病院の屋上に放射状のヒビを走らせた。直後、巨大な弓から放たれた黒曜石の矢尻を思わせる猛突進。瞬きひとつする間もなく、黒の王の姿がハルユキの眼前に迫る。

右手の剣が大上段からの斬撃モーションを開始したその時、ようやくハルユキの意識も切り替わった。あらゆる音がピツチを下げていくような感覚とともに、時間が少しだけ緩やかになる。それでもブラッタ・ロータスの撃ち込みはとんでもないスピードで、鋭利極まる刃がたちまち眼前に迫る。

シルバー・タロウに遠隔攻撃型の必殺技、もしくは強化外装が与えられていれば、ここまで近づかれる前に牽制射撃することも可能だったろう。たとえば親友であるタタムのアバター、シアン・パイルなら、胸部から多数のニードルミサイルを発射する必殺技（スブラッシュ・ステインガー）でロータスの接近を阻んだはずだ。

しかし、現在のタロウは遠隔技をひとつも持っていない。レベルアップ・ボーナスの選取肢には存在したが、取得前のお試し使用は不可能。

この状況からできることは、メタルカラーの特徴である金属装甲を用いての防衛だけだ。黒雪姫は確かに言っていた。メタルカラー・アバターは、切断や貫通属性の攻撃に耐性を持っていると。

ならば、ガントレット状の両腕をがっちり固めればガードは可能はずだ。ハルユキはようやくレベル2になったばかりのひよつこだが、これまで戦ってきた数多のデュエルパートナーの中にも、剣を使ってクロウの腕装甲を切り裂けた者はいなかったのだ。

瞬間的にそこまですを思考し、ハルユキはすっかり両脚を踏ん張ると、両腕を顔の前で交差させた。クロウの堅固な防衛姿勢を見ても、ロータスは斬撃の軌道を変えようとしていない。あくまで真上から、一直線に斬り下ろしてくる。

——ここだ………ガード!!

接触の瞬間、ハルユキは両腕にありつたけの気合を込め、インパクトに備えた。

しかし——。

音、重さ、その他いかなる衝撃をも、ハルユキは感じることはなかった。ただ、オレンジ色の火花がわずかに視界の端を流れた程度だ。見開いた両腕の先では、信じがたい現象が進行している。

薄い漆黒の刃が、分厚い銀色の装甲を、さしたる抵抗感もなく切断していく。

まるで双方の《当たり判定》が失せてしまったかのようにリアリティのない光景。しかし、両腕を走るひやりとした冷感と、視界左上で減少し始めた体力ゲージは確かな現実だ。このままガードしては、寸刻のうちに両腕……いやシルバー・クロウの体そのものが両断される。

「く………」

ハルユキは息を詰め、体を思い切り後傾させた。しかし、新撃のスピードを超えられるはずもない。刃はあつという間に装甲を断ち切り、内部のアバター素体に触れる。あまりに鋭すぎるせいか、痛覚すら生まれえない。

——これがレベル9の……近接一極型アバターの實力。

——ガードなんかできるわけない……先撃は最初からこうなることが解っていたはず……なら、なんで先撃は防いでみるなんて言っただ……。

詰め混じりにそこまで考えた時、ハルユキはようやく思い出した。

黒書姫は、攻撃を「防げ」とは言っていない。「対処しろ」と言ったのだ。それはつまり、いまのシルバー・クロウにも、この新撃に対応できる力があるということだ。

だとすれば……可能性は、たったひとつ。

「う……おっ……！」

ハルユキは更に深く体を傾けつつ、シルバー・クロウの背中に装備された薄い金属フィン……すなわち翼を展開させた。

刃はすでに両腕の中心にまで達し、切っ先はクロウのヘルメット左側面に食い込んできている。ここから翼を使って前や上に飛ばうとすれば、自分からアバターを切断させるに等しい。

ハルユキはいままで、背中の翼……（飛行）アビリティを、突進、上昇、急降下……すなわち前進にしか使ってこなかった。正確には、それ以外の使い方はないと思っていた。しかし、

クロウの金属翼は、鳥のように羽ばたいて飛ぶわけではない。極薄のブレード・フィンが高周波で振動し、空気を叩くことで推力を得ているのだ。

ならば——できるはずだ。静止状態から、真後ろに飛行することが。

「……………飛べっ！」

両脚を曲げ、上体を傾けた姿勢から、ハルユキは思いきり翼を震わせた。

突如生まれた気流に叩かれ、ロータスがわずかに斬撃の速度を鈍らせる。唯一の機を逃さず、ハルユキは地面を蹴り飛ばす。

ぐわっ！ という爆發じみたサウンドが轟き、シルバー・クロウは巨人の手で叩かれたかのような勢いで後ろに飛翔……と言うより吹き飛ばされた。漆黒の刃が、火花の尾を引きながら腕から抜ける。真つ二つの危機からは脱けたものの、慣れない機動にたちまち体勢を崩し、両脚を何度か床面に擦りつつ辛くも離陸。青白い満月を背景に十メートル以上も上昇したところで、ようやくホバリングダに移行する。

「……………は、はあああ……………」

長く息を吐き出しながら下を見ると、すでに剣を降ろしている黒雪姫と眼が合った。

先刻の殺気が幻だったかのように穏やかで、満足そうな視線だ。こくりと頷き、上空のハルユキに向かって叫ぶ。

「成長したな、ハルユキ君！」

「どうやら一応は（対処）できたらしいと知り、ハルユキはもう一度はっと安堵のため息をつくと、ゆるやかに降下した。黒雪姫のすぐ前に着地し、改めて両腕装甲の傷痕を見る。現実世界なら、どのような工具を用いても不可能と思えるほど完璧な切り口だ。わずかに覗く切断面は、鏡の如く輝いている。」

「あの一瞬で、よく私の剣が（ガード不可）だと気付いたな。そこからの対応の速さも見事なものだったぞ」

黒雪姫が涼しげな顔でそんな感想を述べるので、ハルユキは顔を上げると少々愚痴っぽく言い返してしまった。

「先に教えてもらってたら、最初からガードしようなんて思わなかったですよ……」

「それでは指導にならないじゃないか」

短く笑ってから、黒雪姫はすつと背筋を伸ばした。

「さて。どうだ……クロウの声は聞こえたかな？」

「え、ええと……聞こえたような、気もします……けど……」

せつかくの実戦指導にも歯切れの悪い返事をするハルユキに、しかし師は怒るでもなく鷹揚に頷いた。

「大丈夫、いまの動きができるなら、答えはもうキミの中にある。心の迷くま、まっすぐにそのアバターを育てていけばいいさ」

言う、素早くインストを操作する。視界に出現したドロウ申請窓のOKボタンを押す前に、ハルユキは両の拳を握り、「ありがとうございました！」と深く頭を下げた。

黒雪姫とは病院最上階のエレベーター前で別れ、帰宅するために高円寺方面へと歩くあいだ、ハルユキは脳裏で対戦終了間際に聞いたひと言を繰り返して再生していた。

——まっすぐにそのアバターを育てればいい。

それに対して威勢良く頷きはしたものの、実のところ、まだ迷いは残る。

月光ステージで、黒の王のガード不能の撃ち込みにぎりぎりのところで対処できたにせよ、もしクロウにシアン・パイルのような遠隔型必殺技があれば、最初の突進そのものを停められたかもしれないのだ。そして、現在いつでも選択可能な四つのレベルアップ・ボーナスの中に、〈ラジアル・ショット〉という腕の装甲部から二本の金属矢を放射状に撃ち出す必殺技が含まれている。

短い説明文と単純なシルエット・モーションの情報しかないのに、実際に選択してみないと対戦での使い勝手は解らない。だが、これまでずっと徒手空拳の戦いを続けてきたハルユキにとって、いわゆる〈飛び道具〉は憧れの力だ。それがあれば、遠くから好き放題に撃ちまくってくる赤糸アバターに文字通り一矢……いや三矢報いられる、かもしれない。

それに、そう、黒雪姫だって言っていたではないか？ もっとも望む力を選ぶ、と。

「……………うううん……………」

歩きながら、数十分前と同じように唸ると、ハルユキは仮想デスタトップにブレイン・バーストのコンソールを聞いた。タブを、もうすっかり見慣れてしまったポータス選択画面に切り替える。

四つのポータスの左上が、地上をスライドダッシュして距離を詰め、パンチを高速連打する近接型必殺技「ヘラビッド・ナッタル」。右上が、ハルユキの心を探らえて離さない「ヘラジアル・ショット」。左下が、胴体部の防御力を増す強化外装「ハードアーマー」。そして右下に、既存の「飛行」アビリティ性能強化。

強化外装は武器ではないので惹かれないし、アビリティ強化もなんだか地味だ。選ぶならやはり必殺技、二つのうちどちらかなら飛び道具……。と、思考はやはりその方向に流れていく。「……………せっかくレベル2になったのに、いつまでもポータス未取得のまま戦ってるのももったいないしな……………」

中央線高架沿いの赤信号で立ち止まったのを機に、ハルユキは小声でそう呟くと、ウインドウの右上に指を伸ばした。

「よし、もうこれに決める！ 飛び道具プラス飛行なんて、考えてみれば最強のコンボじゃないか。この技で勝ちまくって、先輩が退院する前にレベル3になる！」

無意識のうちに自分をむりやり説得するような言葉を口にして、ぶるぶる震える指を「ヘラジ

アル・ショット」のボタンに近づける。

だが、数ミリ手前でなぜか手が止まってしまふ。頭ではこのボタンを押すと決意しているはずなのに、まるで行動不能の障害技を喰らったかの如く肉体が言うことを聞かない。

「……………ふう……………」

優柔不断にも程があるという幻滅のため息を吐きながら、ハルユキは今回もボーナス選択を中断して、ちらりと道路の向かい側を見た。赤い歩行者信号の際にA表示されている待ち時間は十二秒。充分だ。

「バースト・リンク」

眩くと、ばしいいっ！ という耳慣れた加速音とともに世界が青く凍る。初期加速空間に桃色プタアバターの姿で降り立ったハルユキは、開いたままのコンソールをマツチングリストに切り替えた。

一瞬のサーチャング表示を経て、リストにはたちまち十人近いバーストリンカーの名前が並ぶ。ハルユキがいまいる杉並戦域は長いこと中立域だったが、黒の王ブラッタ・ロータスの加速世界増速に合わせて、新生ネガ・ネビュラスの領土として宣言したのだ。

領土内では、そこを支配するレギオンのメンバーは他のバーストリンカーからの〈乱入〉を拒否できるという特権がある。ゆえに領土にいる限り、自分が優位に立てる相手だけを選んで対戦することが可能だ。

しかし、リストを上から下まで確認したハルユキは、そこにひとつだけ存在する初見の名前にブタアバターの右手を伸ばした。さっきと違って直前で止まることはなく、黒いひづめがリストに触れる。即座に出現する『DUEL』のボタンを、ぱしっと音を立てて叩く。

——この一戦で、今度こそ見極める。僕が……そしてシルバー・クロウが、どんな力を窺っているのか。

強くそう念じ、デュエルアバターへの変身エフェクトに体を委ねる。

今日二度目の通常対戦フィールドは、〈月光〉とは打って変わって破壊の色濃い〈風化〉ステージだった。周囲の建物は全て、ぼろぼろに朽ちたコンクリートから剥離まみれの鉄骨が突き出す殺風景な代物に変貌している。路面も細かくひび割れ、止むことのない風が砂埃を幾筋もたなびかせる。

しかし、空だけは美しい。澄み切ったスカイブルーは、人類がこの星から消えたあとの乾いた清浄さを湛えている。

一瞬だけ空の青さに見入ってしまったハルユキは、瞬きすると視界右上の体力ゲージを確認した。表示されている名前は『Jade Jailer』。レベルはひとつ上の3。

「ジェイド……は翡翠だよな。ってことは緑系か。ジェイラーは……監獄のヒト？ 囚人って意味かな……？」

中学一年生の……というかハルユキの英語力では、残念ながらそこまで分析が限界だった。実際、ブレイン・バーストのシステム周りは万事が英語で表記されるので、バーストリンカーにとって英語の成績はかなり重要な能力なのだが、こればかりは一朝一夕で身につくものではない。タタムとのタッグ戦だとはほとんどの英単語は彼が即座に訳してくれるので、つい甘えて

しまっている面もあるのだが。

ともあれ、相手を直接見れば（ジュイラー）の意味も解るはずだ。視界中央に浮かぶガイドカーソルはほぼ真東を指している。方位針が微震動しているのは、相手が一直線に接近中である証だ。

「……この地形で直線移動？ 住宅街だから真っ直ぐな道なんかないはずなのに……」

眩（くら）いてから、ハルユキはすぐに悟（さと）った。相手は道路を移動しているのではない。手近なコンクリート塊を立て続けに壊（こわ）して必殺技ゲージをチャージすると、翼（つばさ）を使った垂直ジャンプで、頭上を東西に貫（つらぬ）く直線的構造物——即ち中央線の高架（こうか）に飛び上がる。

線路を支える軌道スラブもまたひび割れたらけだが、その上のレールだけは鈍い鋼鉄色に輝（きら）いていた。スチーじにもよるが、まともな線路があれば、たいしていそこにはエリア境界外から電車が走ってくる。もちろん一対戦に一回あるかどうかのレイアウトだが、壊（こわ）かれれば大ダメージは必至だ。素早く前後を確認するが、今のところ影も形も見えない。

しかしその代わりに、高円寺駅方面から高速で接近してくるシルエットがあった。もちろん、対戦相手のジュイッド・ジュイラーだろう。双方の距離（きょり）が縮まるにつれ、線路を見下ろせる位置のビル屋上に、更に幾つかの人影が出現する。戦場追隨モードを有効にしているギャラリーたちがレポートしてきたのだ。

よそ見をしている場合ではないのだが、それでもハルユキはちらりと観戦者の顔ぶれを確認

してしまった。新宿区の学校でまだ部活中のはずのタタムがいないのは当然だが、ついさっき別れたばかりの黒雪姫——ブラック・ロータスの姿も見えない。

もちろん、入院中の黒雪姫が四六時中自動観戦をオンにしているはずもないのだが、それでも少しだけ心細く感じてしまってから、ハルユキは自分を叱咤した。この対戦は、自分の進むべき道を見極めるためのものだ。《親》がいてもいなくても、全力を尽くすのみ。

ぐっと両拳を握り、視線を正面に戻すと、ちょうど対戦相手が十メートルほど距離を置いて、二条のレールの間で足を止めたところだった。

もし敵のカターネームが《遠隔の赤》系だったら、馬鹿正直に線路に上らず、周囲のビルから飛び降りての奇襲を狙ったところだが、《防衛の緑》ならば飛び道具で攻撃される可能性は低い。——という予測に違わず、相手は鉄だの弓だのは持っていないようだ。

と言ってクロウのように完全な素手というわけでもなく、両手ともに特殊な形状をしている。五指の代わりに存在するのは、直径五十センチはあろうかという巨大な輪っか。ワッシャーのように薄べったいが、エッジに刃がついている様子はない。輪っかを含む全身の装甲色は、名前のとおりのジェイド・グリーン。

しかし、最大の特徴は、右手首と左手首をつなぐ太い鎧だった。長さは二メートルもあろうか、じやらりと足許近くまでぶら下がっている。あれだけ長ければ攻撃動作の妨げにはならないだろうが、自由を奪われているという印象を強く受ける。

——やっぱりジェイラーは（囚人）だったかな。

と内心で考えつつ、ハルユキはべこりと頭を下げた。

「ええと、はじめまして、（ネガ・ネビュラス）所属のシルバー・クロウです。乱入失礼しました、よろしくお願ひします！」

相手もレベル2なのだから初心者度合いでは大差ないはずだが、対戦を吹っつけた側としていちおう挨拶すると、相手も両手の頭をじゃらつと鳴らして応じた。

「……（グレート・ウォール）所属、ジェイド・ジェイラーでござる」

………ごさる？

と肩を落してから、いや気にすべきはそこじゃないと思ひ直す。緑の王のレギオン（グレート・ウォール）といえば、渋谷から自衛に至る広大な領土を持つ、加速世界最大級のレギオンだ。いちおう渋谷と杉並は隣接しているが、グレイウォのメンバーが高円寺界隈まで出張ってきたことはほとんどないはずだ。

そんなハルユキの思考を読んだかのように、ジェイラーは、幅笠をかぶったような形状の頭を左右に振った。

「乱入を謝る必要はないでござる。拙者、貴殿と手合わせせんがために杉並まで来たでござるからな。こちらからは乱入できぬゆえ、貴殿から挑んで貰えたのは重畳でござった」

………拙者？ 杉並？

また台詞の細部に引つかかりつつも、ハルユキはもう一度頭を下げる。

「そ、それはどうも、遠路はるばるありがとうございます……ござ……ございます」

「なんのなんの、礼には及ばんでござるよ。何せ強者……」

そこで右手の輪っかをじやらりとハルユキに向け、ジェイターは声を張った。

「……貴殿を、植物帖の最新ページに書き加えるつもりでござるからな」

「……と、トリモノチコー？」

って何だ？ と首を捻るハルユキに代わって、左右のビル屋上からギヤラリーたちの歓声が降り注ぐ。

「よっ、同心ジェイド之介！」

「そのカラスは簡単にやお縄にできねーぞー」

ギヤラリーの様子から、どうやらジェイターは渋谷エリア方面ではなかなかの有名なようだが、しかしそれを言うなら、シルバー・クロウの名は今や東京の反対側にまで届いている、らしい。

——鎖つきの囚人アバターのくせに、僕を捕まえられるつもりなら……やってみろ！

と、内心だけで威勢良く言い返すと、ハルユキは相手に合わせて左右の手をびしっと構えた。

「それじゃ、始めさせて貰います！」

「いざ尋常（じんじょう）に勝負でござる！」

双方の気合が中間点で小さなスパークを弾けさせた瞬間、同時に動く。

ハルユキは、ジェイラーの戦闘スタイルも能力も一切知らない。だが少なくとも近接型であるのは間違いないようで、相手も一直線に突っ込んでくる。

……こんな時、（ラジアル・ショット）みたいな遠隔型の必殺技を持っていれば素早く一発撃って、相手の出方を確かめられるのに。

などとしつこく浮かんでくる思考を頭の外に押しやり、ハルユキは敵の武器——両手の輪っかに意識を集中した。刃はついていない、つまり斬撃ではなく打撃属性だろうが、むしろそのほうがメタルカラーのクロウには脅威だ。防衛よりも回避で対処すべきだろう。

「そうれい！」

かけ声とともに真上から振り下ろされてくる右手の輪っかを、ハルユキはショートステップで避けた。途端、

「どっこい！」

今度は左手の輪が水平軌道で通り、こちらはジャンプで避ける。しかしそれが敵の狙いだっただようで、三撃目——ジェイラーの両手を繋ぐ鎖が正面から弧を描いて襲いかかってきた。

普通ならば、（ジャンプ中の対空技）はガードするしかない。しかしハルユキだけは、跳躍中でも軌道を変えられる。背中の翼で、きっきの黒雪姫との対戦中に開眼したばかりのパワースラストを短くかけると、ジャンプが空中で停止する。

目の前を頭が通りすぎ、コンクリートの軌道スラブを空しく打ち付けたところで、改めて攻撃再開。空中からの右回し蹴りが、ジェイラーの左肩口にヒットする。

「がいいんー」と確實な衝撃音が響き、相手の体力ゲージが五パーセント強減少。クリーンヒットにもかかわらずこの減り幅は、やはり相当に防御力が高い。格闘戦を優位に進めるには、相当の手数が必要だろう。

「……こんな時、せめて（ヘラビッド・ナッタル）みたいな連撃系の必殺技があれば。

……って、いつまでそんなことを考えてるんだ！ 戦いに集中しろ！

自分を吐りつけつつ、キックの反動を利用して後方宙返り。大きく距離を取って着地する。ひとまずファースト・アタックはこちらが取ったが、これで相手もクロウの格闘スタイルを認識しただろう。ここからは引き出しの多さが勝敗を分ける。

ジェイラーも同じことを考えたのだろう、じやらりと両手間の鎖を鳴らして身を起こすと叫んだ。

「成程、流石によく動くでござるな！ 格闘では分が悪いようなので、早速奥の手を使わせて貰うでござるよ！」

「ど、どうぞ、ご自由に！」

答えながら、ちらりと敵の必殺技ゲージを確認。事前に溜めてきた分と、いまの振舞で溜まった分を合わせて、半分以上がチャージされている。

ジェイラーは両腕をまっすぐ前に出し、鎖をだらりとぶら下げた。手首のスナップでそれを振り上げるや、技名発声。

「（スキッピング・チェーン）Ⅲ」

——あ、さすがに必殺技の名前は英語なのか。

などと思つたのも束の間、ハルユキは、敵の動きに両眼を丸くした。

グリーンに輝く鎖がジェイラーの足許に叩き付けられると、すかさず小さなジャンプでそれを飛び越える。鎖は後方から頭上を回り、また地面へ。びしっ！と先端がコンタリートを打つと同時に、またしてもジャンプ。三度、四度、ジェイラーは同じ動作を繰り返す。

これはつまり、ハルユキが大の苦手とする（縄跳び）、いや（頭跳び）だ。唖然としている間にもジャンプの周期はみるみる高速化し、びしっ、びしっ、という打撃音がびびびという連続音にまで高まった、次の瞬間——。

縁に発光する球体と化したジェイラーが、スラブに浅い轍を刻みながら、一直線にハルユキへと突っ込んできた。

「わ、わああ！」

慌てて右後方に飛び退るが、縄跳びボールも軌道を変えて追隨してくる。鎖が鋼鉄のレールに触れ、赤い火花が大量に飛び散る。技の性質から見て、両腕でガードしても削りダメージでダメージを相当持っていられるだろう。少々情けない対処法だが、ひとまず（飛行）で上空に退

避するしかない。

「くっ……」

地面を蹴り付けてジャンプ、同時に翼を振動させる。生まれた揚力がぐうっと体を持ち上げ、空へと一直線の垂直上昇――

「かかったな、でござるうう!!」

――するす商、そんな声とともに、球体がぎゅんつと跳ねた。まるで高速回転する鎖がある種の推進力を発生させているかの如く、すでに線路から三メートルは離れていたハルユキに迫る。緑に光るボールがクロウのつま先に触れた、その途端。

「うわああー」

鎖が足首に引っかかり、有無を言わせぬ勢いでハルユキは地面へと叩き落とされた。スラブへの激突だけは最後の揚力で回避したものの、仰向けに倒れ込んでしまう。そこに上空から、尚も回転し続ける鎖ボールが落下してくる。あれの下敷きになったら、今度こそゲージを最後まで閉り取られかねない。

だが幸い、そこでジェイラーの必殺技ゲージが尽きた。網縋び状態が解除され、空中でアバターが露出する。

――好機――

ハルユキは素早く立ち上がると、落下してくるジェイラーの両手首からだらりと垂れる鎖を

持ち受けた。あの鎖を綱ツナんで再度、降くだりし、そのまま高空まで持ち上げれば、文句なくハルユキの勝ちだ。どんな頑丈ツルツルな縁糸エリスでも、地上百メートルからの落下ダメージには耐えられない。

「もらったあああっ！」

叫びつつ、伸ばした右手でがっちり鎖を掴んだ——のと同時に、

「なんのおおおっ！」

ジェイラーもまた右手の輪っかを振り下ろしてきた。回避できる間合いはないが、クロウもメタルカラーだ。通常技の一撃くらいなら耐えられる。腹に力を込め、衝撃に備えるハルユキの体を、輪っかが横撞横撞きに打ち付ける。

だが。予想されたショックはほとんどなかった。

なぜなら、輪っかの左半分が、頂点に隠かくれていたビポットを軸にして内側に動いたのだ。そのままぐると一回転し、ハルユキの背中側から回り込むと、がちいーん——と甲高い音を立てて再び輪に戻る。つまり、クロウの胴体が、ジェイラーの右手の輪っか内部に入り込んでしまった状態だ。

「——御用でござるッ!!」

ジェイラーの高らかな叫び声はまるで勝利宣言の如しだが、しかし今のアクションでハルユキの体力ゲージは一ドットも減っていない。現象に構わず降くだりしようとしたが、ジェイラーはまたしても予想外の行動を取った。

着地するや、今度は左手の輪っかを足許の鋼鉄レールに叩き付ける。強いコンタクトストラブを碎きながら、先刻同様に輪っかの半分が回転し、がちつと再接続。こちらは内部にレールを啜え込んだ形だ。

右手にハルユキ、左手にレールを固定したジェイラーの意図を読み取れず、ハルユキは一瞬どうすべきか迷った。だが、真に驚愕すべきは、その後に起きた現象だった。

鈍い金属音を放ち、ジェイラーの両手の輪っかが、手首から分離したのだ。

両手を失った翡翠色のアバターは、大きく後方にジャンプして距離を取る。あとに残されたのは、ハルユキの胴を啜え込む輪っかとレールを啜えた輪っか、そして二つを繋ぐ長さ二メートルの鎖——。

「う……………」

ここでようやく、あまりにも遅まきながら、ハルユキはジェイラーの特徴的な両手が何だったのかを悟った。

これは打撃武器ではなく、巨大な《手錠》だ。

そして《Jailer》の意味は囚人ではなく……《看守》。

「シルバー・タロウ、召し捕ったり！ でござる！」

手首から先のない両腕をがしつと組み、ジェイド・ジェイラーがそう発言すると、線路両脇のビルからギャラリーの声が降り注いだ。

「よっ、お見事、ジェイド之介！」

「あーあ、ネガビュのカラスもお純かあ。まあありや初見じゃ対処できねーよなあ」

「カラス小僧、次は逮捕されんなよー」

……まるでギャラリーも、そして対戦相手も、これで勝負が決してしまったかのような口ぶりだ。

しかし、体力ゲージの減少具合はほぼ同等。そして残り時間はまだ十五分もある。

「……まだまだ！ こんな手錠、すぐ脱獄してやる！」

叫び、ハルユキは胴体に嵌る輪っかからぶら下がる鎖を両手で掴んだ。反対側がレールに接続されたそれを思い切り引くと、すぐにがちと張り詰める。

「う……ぬぬおとおお……！」

全身の力を込めて引っ張り続けるが、翡翠色の鎖はびくともしない。五メートルほど離れたところから、ジェイラーが稲笠状の頭を振り振り言う。

「無駄でござるよ。その鎖は青のレギオンのフロスト・ホーンにも引きちぎれなかったでござるからな」

「え……ま、マジで……」

フロスト・ホーンと言えば、突進力と腕力が自慢の超近接型アバターだ。単純なパワーはクロウをかなり上回るだろう。

「そ、それなら……！」

今度はピンと張った鎖を右拳で殴りつけるが、やはり大して傷もつかない。ならばとスラブ上に垂らして足でガンガン踏み付けるが、結果は同じだ。

鎖がだめなら、反対側の輪っかを固定しているレールを破壊すれば。そう考えて鋼鉄の軌条を思い切り蹴り飛ばすと、何たることか逆にわずかなダメージを喰らってしまう。この感服は恐らく破壊不能オブジェクトだ。

なんでたかがレールがそんなに保護されてるんだ、という八つ当たり気味の思考は——直後、戦慄に変わった。

破壊不能な理由は決まっている。この上を、電車が通るからだ。そうと考えれば、ジェイラーが高架線を戦場に選んだ理由も、ハルユキをレールに固定した理由も自ずと明らかになる。もちろん、シルバー・クロウを電車に轢かせるためだ。

「ようやく気付いたようでござるな。されど最早手遅れでござるよ」

そんな声が聞こえ、ハルユキは顔を上げた。するとジェイラーは、すつと左腕を新宿方面に向ける。風化ステージの砂埃の彼方にちかっと光るのは——間違いなく、電車の前照灯。

「く……………」

歯噛みしつつ、ハルユキはもう一度鎖を引っ張った。だが、クロウの腕力では切断できないことは確認済みだ。張り詰めた鎖を通して、細かい振動が伝わってくる。そして、がたたん、

がたたんという重い金属音も。

……だめか。このまま電車で吹っ飛ばされるしかないのか。クロウに飛び道具があれば、この状態からでもジェイターを攻撃できたのに。

……いや、僕はバカか！ 飛び道具があつたら、ジェイターはその死角に入ればいいだけだ。敗因は、もっと本質的なところにある。ジェイド・ジェイターは（敵を捕らえて固定する）能力に特化したアバターで、彼はその力を十全に活かすことだけを考えて戦っていた。これこそが、一極型アバターの強さ――。

「……………まだ……………まだ終わってない！」

半分以上自分に向けて、ハルユキは吼えた。

握っていた鎖を離し、真上を睨む。ジェイターが（捕獲）特化なら、クロウは（飛行）特化だ。腕力、打撃力で鎖を破壊できなくても、もう一つ、まだ試していない力がある。

「い……………けえっ!!」

拳を握り、両翼からフルパワーの推力を発生させる。ロケットのように離陸したクロウの体は、しかし直後、がちん！ と空中に固定される。わずかにメートルしかない鎖が一直線に張り詰め、輪っかに固定されたクロウの胴体とレール双方からオレンジ色の火花が散る。

「う……………お……………おお……………!!」

両手をまっすぐ上に伸ばし、ありったけの力で翼を振動させる。ぎざぎざ、という軋み音の

発生源は鎖か、レールか、あるいはタロウの体そのものか。

やがて背中の装甲が圧力に負け、リングが食い込み始める。同時に体力ゲージの減少が始まるが、ハルユキは無視してフルパワーの上昇を続けた。電車はすでに無人の運転席が視認できるほどの距離まで接近している。自動運行プログラムは、レール上に異物があるうとスピードを緩める気配はない。

その時――。

びきつ、とかすかな音が聞こえ、同時に右側――ジェイラーのほうの体力ゲージがわずかに減った。

焼き切れそうな頭の片隅で、なぜ、と考えてすぐに気付く。この手錠は強化外装ではない。ジェイラーの手、つまり体の一部だ。つまり、体力ゲージが減ったということは――鎖の損傷が始まった、ということだ。

「く……お……おおあああ――!!」

叫び、ハルユキは残された最後の力を振り絞った。

電車との衝突までは恐らく二十秒。そして必殺技ゲージが尽きるまでは十五秒。だがそんな計算も意識から弾き飛ばされ、視界には空の青しか映らなくなる。

空。あの空へ。飛びたい。どこまでも高く。

……ああ、そうか……。

……僕は、なんてバカだったんだ。僕が、そしてシルバー・クロウが何を望んでいるかなんて、バーストリンカーになった時から……いや、そのずっと前から解りきっていたのに。

遠隔技とか、連打技とか、そんなもののクロウには必要ない。なぜなら、僕は対戦に勝つためだけにこの世界にいるわけじゃないんだ。それよりもっと大切で、気持ちよくて、心の底から望んでいるのは――

飛ぶこと。

ハルユキは、無意識のうちに伸ばした左手を少し動かした。体力ゲージに触れ、インストメニユーを呼び出し、そして。

赤錆だらけの鋼鉄板に装甲された電車が、轟音とともに通過した。

そのす前、ばきいん！ という硬い破壊音が響いた。

地上から、澄み切ったブルーの空に向かって、銀色の矢が高く高く飛んだ。

黒の王ブラック・ロータス——黒雪姫は、他のギャラリーたちから少し離れたビルの上から、戦場の様子を見守っていた。

《子》であるハルユキ少年の行動を読み、病室に戻ると同時に自動観戦モードをオンにしたのだ。戦場追跡機能は切っているのに、自力で移動する必要はあったが。

シルバー・クロウが繋がれていた位置を四角編成の電車が通過しても、クロウの体力ゲージが健在なので、ギャラリーたちが騒ぎ始める。対戦相手のジュイド・ジュイラーもきよろきよろ周囲を見回しているが、レール上には手錠の片割れと、半ばから切断された鎖が横たわっているだけ。

しかし、やがて彼らも気付く。

上空、遠かな高みをさらさらと銀色に輝きながら舞う、白銀の鶴に。驚愕の音が黒雪姫の耳にも届く。

「ど……どうやって鎖を切ったんだ？ ぜんぜんダメそうだったろ？」

「な、なんか、急に加速しやがったよな……ブースター点火したみたい……」

「オレ、見たぞ。あいつ、電車が来る直前に、インストいじってなかったか？」

「だからっていきなりパワーアップしねえだろ……強化外装なんか持ってねえはずだし、そもそも外装ならボイスコマンドで呼べるし……」

（ボイスコマンドで呼べる）
 侃々諤々の会話を数秒続けてから、やっと一人が真実に至る。シルバー・クロウが、どうやってジェイド・ジェイラーの鎖を切断するだけの推力を得たのか。

「あっ……あ、あ……」 解ったぞ！ あいつ……あのカラス野郎、戦闘中に、レベルアップ、ボ・ナス取りやがった……飛行アビリティを、強化しやがったんだ！」

地のギョラリも、そしてジェイラーまでもが呆然と立ち尽くすなか、クロウはきらりと陽光を跳ね返してターンする。鋭い足先をまっすぐ伸ばし、青空に炎の軌跡を引いて急降下してくる姿は、まさしく真昼の流星。

「……………どうだ、メイデン、カレン。レイカー、そしてグラフ。見えているか……………」

黒雪姫はアイレンズを細めながらそっと呟いた。

「あれが、私の遺んだ（子）だ。私の双剣では切り開けなかった扉を、彼の双翼ならきつと開けてくれる。我々が辿り着けなかった遠かな場所まで、彼ならきつと飛んでくれる。私は……そう信じているんだ」

あとがき

お久しぶりです、川原礫^{かわはら くだら}です。「アクセル・ワールド17 星の揺りかご」をお読み下さり、ありがとうございます。

まずは、16巻から八ヶ月も間があいてしまったことを深くお詫び致します。他の本は出ていたんですが、いろいろと宇宙的パワーが働きました……。今巻もきっちり「つづく」で終わってしまったので、次巻はなるべく早くお届けできるようにしたい！ です！

そしてもう一点説明させて下さい。この17巻には、本編のあとに「黒の双剣、銀の双翼」という短編が収録されています。これは、テレビアニメ版アクセル・ワールドのBD&DVD第1巻の特典として書き下ろしたものののですが、内容的にこの17巻の下敷きになっている部分が多々ありまして、同時に読んだほうがより楽しめるのではと考えて、このような体裁にさせて頂きました。収録を快く許可して下さいました関係各位には、この場でお礼申し上げます。そして改めて、BD&DVDをお買い上げ下さった皆様にも、心からのお礼を！ ありがとうございます！

本編の話ももう少し。この巻では、渋谷駅周辺の大規模商業施設として、〈渋谷ラヴィン・

スタエア」なる名前が出てきます。これは二〇一四年現在、六年後の開業を目指して工事が進んでいる再開発事業なのですが、まだ施設名は決定していません。メインとなるビルの名前も現時点では《渋谷駅街区東棟》^{（仮称）}となっていて、これは早やうく将来的にナントカヒルズとかナントカタワーとか名前がつくんだろうな—と思ったので、アクセル世界ではビルに《ラヴィン・タワー》、施設全体を《ラヴィン・スタエア》と勝手にネーミングさせて頂きました。もし、あなたがこの本を二〇二〇年頃に読んで下さっているのなら「ビルの名前ちゃんやん！」とお思いでしょうが、そのような事情ですのでお許し下さい！

内容のほうとしては、12巻で初登場したシヨコラ・バベッターとその仲間たちがネガ・ネビュラスに加入してくるというなかなかの重大事件？ が起きましたね。まだハルユキとはリアルでは会っていないのですが、いずれそういう展開もあるうかと思うので、いまから現実世界のシヨコラたちを書くのが楽しみです。（アバターコンテスト）に応募して下さった幾跡^{（仮称）}なごみさんにも、改めてお礼を申し上げます。

そして、今回はギガ・マキシマムにデンジャラスな進行となつてしまい、担当の三木^{（仮称）}さんとイラストのHIM Aさんには大変なご迷惑をおかけしました。次はテラがんばります！

「これは、ゲームであっても」



ソードアート

電撃文庫
プログレッシブ シリーズ最新第3巻『泡影のバルカローレ』は、
電撃文庫にて2014年12月10日発売 —!!!

特報!!!

『絶対ナル覇者2』は

2015年春頃発売予定!!!

● 川原 礫 著作リスト

「アタセル・ウールド1―黒雲の帰還―」 (複製文庫)

「アタセル・ウールド2―紅の暴風雨―」 (同)

「アタセル・ウールド3―夕陽の暗闇―」 (同)

「アタセル・ウールド4―蒼空への飛翔―」 (同)

「アタセル・ウールド5―足影の浮き橋―」 (同)

「アタセル・ウールド6―烽火の神―」 (同)

「アタセル・ウールド7―災禍の報―」 (同)

「アタセル・ウールド8―運命の連環―」 (同)

「アタセル・ウールド9―七十年の祈り―」 (同)

「アタセル・ウールド10―四重奏―」 (同)

「アタセル・ウールド11―朝陽の第一―」 (同)

「アタセル・ウールド12―赤の鼓―」 (同)

「アタセル・ウールド13―水際の号火―」 (同)

「アタセル・ウールド14―祖先の大天使―」 (同)

「アタセル・ウールド15―終わりと始まり―」 (同)

「アタセル・ウールド16―白雲の隠微―」 (同)

「アタセル・ウールド17―足跡の語り―」 (同)

「ソードアート・オンライン―アインタラッド―」 (同)

ソードアート・オンライン2 アインクラッド」(四)

ソードアート・オンライン3 フェアリィ・ダンス」(四)

ソードアート・オンライン4 フェアリィ・ダンス」(四)

ソードアート・オンライン5 フェアリィ・ダンス」(四)

ソードアート・オンライン6 フェアリィ・ダンス」(四)

ソードアート・オンライン7 マザーズ・ロザリオ」(四)

ソードアート・オンライン8 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン9 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン10 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン11 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン12 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン13 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン14 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン15 アーリー・デイズ・オブ・ソード」(四)

ソードアート・オンライン プロダクション1」(四)

ソードアート・オンライン プロダクション2」(四)

絶対ナル孤獨者1——The End——」(四)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

<http://dengekibunko-dengeki.com/>

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-6-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「川原 礫先生」係

「HIMA 先生」係

『星の盛りかご』——書き下ろし

『星の星屑、星の星屑』——アニメ『アクセル・ワールド』Blu-ray&DVD初回限定版特典

(2012年7月)

アクセル・ワールド17

—星の煌めいて—

著者 あさひら 川原 礪

発行 2014年10月10日 初版発行

発行所 塚田正晃
株式会社KADOKAWA
〒100-8177 東京都千代田区富士見3-13-3
プロデュース アスキー・メディアワークス
〒100-8584 東京都千代田区富士見1-9-19
03-5216-0299 (編集)
03-3228-1854 (営業)
著者 荻窪裕司 (METTA・MANIERA)
印刷・製本 悠印館株式会社

本書の複製権利 (コピー、スキャン、デジタル化等) 並びに無断複製等の権利等の配分は、発行禁止上での例外を除き無効とされています。また、本書を転写等するなどの第三者に権利して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

著者・訳者とはお取引を停止いたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークス 03-5216-0299 までにお送りください。

盗料が仕向先にてお取引を停止いたします。

然し、古書店で本書を購入されている場合はお取引を停止致しません。

販売店がバーコードに表示してあります。

©2014 REKI KAWAHARA

ISBN978-4-04-866906-8 C0193 Printed in Japan

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を取録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times, Changing Publishing) 時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、決なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日

角川歴彦